
全力天使【ドM】

みかみ てれん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全力天使【ドM】

【Nコード】

N5992Y

【作者名】

みかみ てれん

【あらすじ】

「あたしをドMにしてくださいっ！」

天使の国“天ツ雲”^{エルティバ}にて、主人公ハクスイは衝撃的な出会いを果たす。彼女の名はルルノ、人間たちの世界を守るために日夜奮闘する彩光使^{セラファイ}の美少女であった。ふたりの再会は天使や悪魔を巻き込み、“大襲来”から続く因縁はハクスイの運命を捻じ曲げる。

新感覚『ハートフルSMコメディ』、異世界転生やVRMMOのおつまみにも、いかがでしょうか？ 完結まで毎日更新（予定）です。

この物語には、軽度のSM描写、毒のあるツッコミなどが含まれております。ご注意ください。

プロローグ「出会い」

ハクスイは止まらない。

本日最後の試験だ。たくさんのギャラリーたちが見守っている武闘場には、熱気が渦巻いていた。伝説の達成瞬間を目撃しようと、他のクラスからも生徒たちが集まっているのだ。

そんな見物客の中心で、もみの木の棒を持ったハクスイは緩く構えている。片手をジャージのポケットに突っ込んだその姿はどう見ても真剣勝負の最中とは思えなかったが、畳張りの空間は完全に彼の支配下にあった。

武道場に立っている少年の数は残り一三名。そのうちのひとりが駆け出し、ハクスイの斜め後ろから切りかかった。前方に固まっているクラスメイトたちを視線で制しているハクスイには、避けられるはずもない一撃のはずだった。

しかしハクスイは横薙ぎの奇襲をターンするように避けると、勢いを殺しきれず泳ぐ少年の背を軽く小突いた。

試験監督官——シユレエルが疾呼する。

「マシマ、退場！」

クルセイターズ
対悪魔用乱戦稽古。

バトルロイヤル方式で行なわれるこの試験は、これまで学んだ武術の集大成を発揮する場であった。勝ち残るために必要な資質は、ただひとつ。バイアビリティ生存能力である。

標的がなぜ後方からの奇襲を避けられたのか、そのことに気づくことができないマシマ少年は、まるで悪夢を見たような顔で武道場

から去ってゆく。

ハクスイはただ観察していたのだ。向かい合う生徒たちの表情が変われば、膠着状態が変化したことは明らかだろう。あとは視線を追えばいい。どんなに潜めても、踏み込みの足音は消せるものではない。ならば避けるタイミングは自ずとわかる。

だがそれをこなすには、気が遠くなるような年月の修練が必要とされるだろう。加えて、揺るぎない胆力も不可欠だ。

ハクスイはつまり、そういった生徒であつた。

中肉中背で、皮肉げな口元。若干黒髪を伸ばしている以外は、一般的な生徒とはさほど変わらない容姿なのだが、ただ、ハクスイを象徴するものがあるとしたら、その眼差し――

校内をまるでスラム街の片隅ように淀ませる雰囲気は彼にはあつた。世の中の全てを意味のないものとして映すような黒瞳。夢や希望やそういった光を完全にシャットアウトし、それどころか根こそぎ吸い込んで消滅させてしまうブラックホールじみた目だ。

ハクスイの前に立つ同級生は、ほとんどがその圧倒的な負の気配に飲み込まれる。言葉が出てこなくなり、なぜだか心中に漠然とした不安が去来する。ハクスイの持つ奇妙な圧力が噂された名が、「限りなく悪“魔”に近い“天”使」、すなわち、『魔天のハクスイ』である。幼い頃から鍛錬に鍛錬を重ねてきた賜物である化物じみた運動神経さえ、彼の伝説に拍車をかけていた。

転進。ハクスイは振り返るとともに駆け出した。彼の強襲に、後方で身を寄せ合っていた小魚のような少年たちは震え上がった。

男にしては長い黒髪をなびかせ、ハクスイは広い武道場を縦断する。恐怖を押し返すようにして突き出された棒を弾き、殴りつける。ひとり、ふたり、そして三人。戦意を喪失したクラスメイトを床に

転がせば、これで背後の安全は確保終了。ハクスイは木の棒を手中でくるりと回す。

「『魔天のハクスイ』めっ……！　今回もクラスの男子でひとりだけ実技満点を取る気か！　そうはさせないぞ……！」

残りはもはや十名にも満たない。一撃当てられたら退場の勝ち抜き戦にも関わらず、彼らは一群となっていた。互いが互いに敵同士であるはず、なのにだ。

そこまでして、ハクスイひとりを勝ち進めさせたくないのだ。浮かぶ表情は、僻み、妬み、恐れ、つまり負け犬根性そのものである。

「なんだかな……」

ハクスイは思わず髪をかきあげながらうめく。嫌われっぷりもここまですれば清々しさすら感じてしまう。

そのときだ。武道場に眩い白光が満ちた。

「許さない、許さないよ、ハクスイクン！」

一塊でいた生徒の中のひとりが、気迫溢れる大声で叫び出したのだ。その少年を見て、ギャラリーのめいめいが声を上げる。

「あつ、あいつは！」「多分三組のナンバー2のやつだ！　名前は知らねえ！」「なんて卑怯な！　学校の授業で光輝^{エンジェル}武装をまとい始めやがったぞ！」「見境ねえ！　見損なったぞナンバー2！」

高笑いをしながら、ナンバー2の少年は武闘場に浮かぶ。彼の両手両足は光に包まれ、その背からは真っ白な一對の翼が生えていた。そばかすの残るあどけない顔立ちをした少年は得意げに天井付近を飛び回る。その様は天使というより、むしろ虫のようだ。

「どうだい、ハクスイくん！ きみにはこれができないだろう！
ハッハッハッハ！ そうだね、天使のくせにさ、機奨光ボジティアを持た
ないきみには！」

少年は、弓を射るような態勢を取った。すると彼の回りに散らば
っていた微光が集まり、手の中でひとつの大まかな輪郭を描く。そ
れは光の輝きが定まってゆくにつれ、一本の槍としての形状を取っ
た。機奨光による初級の光輝武装、光輝槍アンジェランスである。

「どうだい、ぼくの槍は！ その木の棒で応戦してみるかな！ 無
駄だけだね！」

色めき立つギャラリーの前で、ナンバー2が伸縮自在の槍を伸ば
す。ジュツ、ジュツと音を立てて、武道場の床に穴が穿たれてゆく。
その突きの速度はまさに光速。見てから避けるのはハクスイと言え
ど至難の技だろう。

さらに光の翼は、本人の身体能力に関わらず、高速移動を可能に
する。狭い室内という誓約はあったものの、ナンバー2は中空から
次々と攻撃を繰り出してくる。

光輝武装対木の棒。彼我戦力差は圧倒的である。

「もう授業の度を越えているぞ！」 「なんで教使は止めないんだ！」
「停学になるんじゃない？ ナンバー2」 「ああはなりたくないな……」

……

もつとも、有利さと引換に彼は信頼をことごとく失ってしまった
だろうが——それはともかく、ナンバー2は一向に気づかなかつた。
先ほどから槍撃がハクスイにかすりもしないという事実に、だ。

ハクスイはやはり精察していた。彼の視線と穂先を。手元の角度
と、狙いをつける直前に急停止する直前の翼の羽ばたきを。どんな

に相手が強力な技を使おうとも、ハクスイはなんらうろたえていなかった。

しかしやはりナンバー2は気づかない。今の彼はきっと見たいものしか見えてないのだ。すこぶる楽しそうではある。

武道場を斜めに走りぬけ、三連続の突きを回避したハクスイは、感情を映さない瞳で跳躍した。様子を見守っていたクラスメイトの団に。「こ、こっちに来るなあ！」と悲鳴が上がる。

「どこに逃げると言うのかね、ハーツハツハツハ！ 死ねい！」

完全に悪役臭の漂うナンバー2が放った突きは、ハクスイの脇腹を掠める。しかし有効打ではない。

飛び上がったハクスイは、近くの男の肩を蹴り、別の男の頭を蹴り、さらに壁を蹴る。それもわずか一瞬の出来事。迫り来るハクスイの唇の動きが、ナンバー2には確かに見えていた。

「死ねってというのは、自分がそうされても文句がねえってことなのかね」

伸ばした槍を元の長さに戻すのを忘れていたナンバー2は、慌てて槍を引く。だが、間に合わない。身が竦んで動かない。

ナンバー2の顔が驚愕に染まると同時、ハクスイは木の棒を振りかぶって、そして、回転しながら、冷蔵庫のドアを閉めるような軽快さで、もみの棒を振り切った。

「よっ」

大根を真つ二つに両断するような快活な音が響いた。その直後、ずどーん、とナンバー2が武闘場の床に落ちて、潰れる。悲鳴が波のように広がって辺りはざわついた。

「うわあ……あいつ、光輝武装まで発動して……」「あれほど笑っ

てたのに……無様な……」「容赦ねえ、『魔天のハクスイ』……」
「強い、強すぎる……」

あとはもう、消化試合の様だった。

今まで事態を静観していた教使は、深いため息をついた。女生徒からも人気の高い壮年の伊達男は、そのわずかにシワの刻まれたこめかみを押さえながら、慚然と告げた。

「……実技の授業、そこまでだ」

穴だらけの武道場の床を眺めて、苦虫を噛み潰したような顔をしていた教使の男の重苦しい言葉に、ハクスイは棒を払って構えを解いた。

「お疲れ様でした」

ナンバー2を倒してからは一分にも満たない時間で、彼の周りには立つものは残っていなかった。ハクスイが頭を下げたその直後、ギャラリーから拍手が巻き起こった。見物人と反比例したテンションで、教使は目の間を揉みほぐしながら、苦々しくつぶやく。

「こんな事例は、初めてだな……男女ともに、最後まで立っているのは、たったひとりか……生徒が訓練で光輝武装を使ったってのもな……」

額の汗を手の甲で拭きながら、ハクスイは隣で行われている女子の実技の授業を眺めた。

女性陣も壮絶な結果となってしまうたようだ。中央にひとりだけ立っているのは、見覚えのある銀髪の少女の後ろ姿だった。

ハクスイは棒を肩に担ぎながら息切れもなく姿勢を緩めた。

「グイエか、あいつもよくやるな」

授業終わりのチャイムが鳴り、教使がそれぞれにジャッジを言い渡す。

「ハクスイくんとヴィエくんは、着替えたら職員室に來い……」
床にめり込んだナンバー2を横目に、ひととき大きなため息とともに教使は付言した。

「……ネヒヤエルくんは、一週間の停学だ。それで手を打とう」

〃

「やりすぎだろ」

「ハクスイに言われたくないの」

ハクスイのつぶやきにヴィエはそっぽを向いた。学校指定の白ジヤージ姿のふたりは、足腰の立たないクラスメイトたちを置いて、さっさと武闘場を出る。渡り廊下を通ると、涼しい風がふたりの間を吹き抜けた。ヴィエは長いプラチナの髪をなびかせて、颯爽と歩く。

そんな彼女は、反省とともにかぶりを振る。

「……学期末の試験だからって、気合を入れすぎたの」

「まあ、気持ちはわかるが、やりすぎだろ。少しくらい手加減してやれば良かったんだ」

「……」

「いて、蹴るなよ」

「……ハクスイに言われたくないの」

〃

ヴィエと別れて、武闘場から校舎に入っすぐの男子更衣室の前までやってきたハクスイは、ドアノブに手をかけたところで、ふと動きを止めた。なにやら熱を感じたのだ。違和感に気づいて振り返ると、そこには廊下の角に半身を隠して、制服姿の女子生徒が立っていた。

ハクスイが見やると、女子生徒はパツと姿をくらます。

「なんだ？ 俺に用、か？」

試験の終わった他クラスの生徒だろうか。あるいは、やけに小柄に見えたことから、下級生かもしれない。ハクスイが辛抱強く待っている、まずは小さな頭が見えた。あちこちがピンと跳ねた、毛糸玉のようなはちみつ色のショートカットだ。

それが徐々に覗いてくると、今度は髪の色と同じ、黄金色の濡れた瞳と目が合った。ぱちっ、ぱちぱちっ、と何度も瞬きを繰り返したあとに、彼女は意を決したように姿を現した。

まるで童話の世界から抜け出てきたお姫様のような、凄まじい美少女だった。小柄な代わりに、真ん丸い瞳が星空のような広大さを想起させられた。

「あ、あのっ……あのっ、あのっ、あのっ！」
「ん？」

拳をグーに固めて肘を引く彼女から、ほのかに燐光が立ち上る。

あたふたと身振り手振りをしながら、薄い光をまとった美少女はなにやら気持ちを伝えようとしてくる。

「えと、あ、あたしっ！ あっ！ さっきのっ！」

「いや、なんだよ」

「もう、全力でっ！ エンジェルっ！ エンジェルっ！ スパーキングっ！」

「いやだから、なんなんだよ」

叫ぶ度に彼女の顔が赤く染まってゆくのは、酸欠のためではないかとハクスイは思った。ふわふわの髪の毛を揺らして、長いのはもちろんのこと、きらめくように綺麗なまつげの伸びた瞳をくりくりと回しながら、美少女は身体いっぱい叫んできた。

「あ、あたしを、どうかドMにしてくださいーっ！」

声の残響がしばらく廊下に残り、ハクスイは口をぽかんと開けたまま聞き返した。

「……は？」

第一話 - 1

「あ、あたしを、どうかドMにしてくださいーっ!」

声の残響がしばらく廊下に残り、ハクスイは口をぽかんと開けたまま聞き返した。

「……は？」

ぶるぶると小動物のように震えながら、拳をぎゅっと握って俯いていた美少女は、弾かれたように顔をあげる。白い綺麗な肌は、ピンク色に染まっていた。

ハクスイと少女の視線が交錯する。彼女は両手を前に出したり、頬に当てたり、髪をくしゃくしゃといじったりしてから、大きく首を振った。

「やつ、ちがつ! そつちじゃない! こつ、心の声が漏れちゃったっ!」

心の声?

追求したかったが、やぶ蛇になりそうだったのでハクスイは黙ったまま彼女が落ち着くのを待つ。できれば早く用件を言って立ち去ってほしかったのだが。

「だ、だからもうっ!」

すると、彼女の周囲がキラキラと輝き出す。全身から燐光を放ち出した彼女は、まるで地上に降りてきた彗星のようだった。

「か、かつこよかったよーっ!」

叫ぶと同時に、彼女は反転して走り去ってゆく。それはあつという間のことだった。

「……本当に、なんだったんだ……?」

一学期、期末試験最終日。

とりあえずそれが、ハクスイと彼女の唐突な出会いであった。

この世界には、天使がいる。

微笑む赤ん坊のそばに。親とはぐれて泣きじゃくる幼子の隣に。雲の切れ間から差し込む光の中に。家族に看取られてこの世を去る老人の枕元に。天使たちはそつと訪れて、一枚の金貨の代わりに、祝福を授けてゆく。

彼らは決して伝説の中の存在ではない。

空に浮かぶ雲の世界、エルティバ天ツ雲には、今でもたくさんの天使たちが暮らしている。神に仕える彼らは人を見守り、育み、そのあり方を正しく導こうとする人類の守護者たちであった。

セラフィ
彩光使――

それは天使の中でも、ヒトと関わりながら生きてゆくための険しき道を選択した者たちである。

光輝なる者。天使の中の天使たちの名称。彼らこそが悪魔を打ち倒し、人類を守る神の尖兵たちだ。華々しき栄光と熾烈な戦い。光と闇の狭間で己が身を危険に晒しながらも立ち向かう彼ら彩光使こそ、古来より人類に「天使」と崇められてきた者たちなのだ。

天使として生まれたからには、彩光使を目指す。それはある意味とてつもなく純粹で、優しい想いの形であった。

そんな彩光使という夢を追う者が、ここにもまたひとり。
アリギエーリ

“大襲来”を乗り越え、その両眼に深い宿命を秘めた若者である。だが彼は未だ自らの生まれの価値に気づかず、胸の火に“願い”の焚き木をくべることができずにいた。

彼の名はハクスイ。

今はまだ、ただの少年である。

（一体なんだっただろうな……）

まぶたの裏に、少女の機奨光が焼きついていた。なにを間違った

のかはわからないが、あれほどの美少女に「ドMにしてください」と懇願されたときの衝撃はしばらく忘れられないだろうと思う。

ハクスイが制服に着替えて廊下に出ると、そこにはヴィエが待っていた。

フィノーノ高校の制服は、清楚な水色と白のチェック柄のスカート、それに真つ白なブラウスという組み合わせだが、ヴィエが着ると女性的な色香が感じられた。ただ俯きながら、けだるそうに廊下の壁に寄りかかっているだけなのに、まるで絵画のように映えている。

ハクスイはつまらなそうに俯いていた彼女に声をかける。

「誰か待ってんのか、ヴィエ」

「……ハクスイをよ……ひとりで怒られたくないもの」

「揃ってたら二倍叱られるような気もするが……」

ふたりは再び揃って廊下を歩き出す。

「友達が言っていたんだけど……実技の授業で全員抜きを果たしたのって、フィノーノ高校の長い歴史でも、前代未聞で……だから、つまり、ハクスイとわたししかないっていうの」

「へえ、俺たちすごいことしたんだな」

「常識的ではないっていうことじゃないの……？ 他の人に点数とか、つけにくくなっちゃうのよ。だから、謝ったほうが良いと思うんだけど……」

「それは……まあ、悪いことしたかもな」

本日の試験全科目が無事終了し、賑わい出す校内においても、ハクスイとヴィエが並んで歩く姿を見た生徒たちは、次々と道を譲ってゆく。ヴィエのあまりの美しさに気圧されて、とかそういうわけ

ではない。皆が避けているのは、“魔天”のハクスイの方だった。

学園一の美女とも呼び声の高いヴィエが、なぜそんなハクスイとまともに付き合っているのかということ、それは単に幼馴染だからという以外にも理由があった。それはともかくとして、足を進めていた彼女は人目のなくなってきた辺りで、唐突に回れ右をした。

「やっぱり、帰るの……」

「なんでだよ」

ハクスイはすかさずヴィエの手首を掴む。

「だって、悪い知らせに決まっているもの」

「そりやそうだろうけど、度合いがあるだろ。聞いてみなきゃわからねえよ」

「退学かもしれないの……」

「武術の授業でベストを尽くしただけで、なんで退学にさせられるんだ……」

ハクスイとの差は、頭半個分もないだろう。女性にしては長身である。特に、頭の小ささと足の長さが、彼女の容姿のバランス感を非常に美しいものとしていた。胸の小ささも、そのモデル体型により、同性にはむしろ美点として見られるだろう。目を伏せると、水晶のように切れ長な蒼い瞳が、光に反射してきらきらと輝いていた。彼女の中身を知らない生徒たちの中には、バージンスノウのような透き通る肌を持つヴィエに、憧れの眼差しを向ける男女も少なくはない。

だが、ヴィエはハクスイが呆れるほどに、凄まじく後ろ向きな性格をしていたのだ。彼女の澄ました表情はとうに剥がれ、童女のような素顔が見え隠れし出した。

「もしかしたら、死刑かもしれないの……！」

「天使の国、天ツ雲に死刑制度はないぞ」
エルディバ

「わたしにだけ、適応されるかもしれないの……」

「俺が言うのもなんだが、悲観的もほどがあるぞ、ヴィエ」

すると、こういった場面では決まってヴィエの声は震え出すのだ。
「ハクスイひとりで聞いてくれればいいのっ、わらしはおうち帰るものっ」

「待て待て待て待て」

ハクスイの制止もやむなく、完全にテンパって舌足らずになった
ヴィエは、全力で逃げてゆく。そんな彼女を、ハクスイもまた必死
の形相で追いかけて捕まえる。

「手間取らせんじゃねえ！」

「ら~~~~め~~~~！」

捕獲後、ハクスイは泣き叫ぶヴィエの腕を掴み、無理矢理引きず
ってゆく。そういった光景もまた、ハクスイの『噂』を助長するも
のに違いなかった。

ヴィエの癖は、幼少のときからまったく変わっていない。彼女は
少し焦ると、すぐに口が回らなくなるのだ。誰にも見せない美女の
破綻も、ハクスイはもう慣れたものだ。ヴィエを引きずったまま職
員室へと続く廊下を進む。

「はいはい、ハクスイ、入ります」

そうして職員室のドアをノックをした途端である。ヴィエはなに
やらジャンパーのファスナーを引き上げるように、シュツと外見を

取り繕った。

「……失礼しますの」

見事に美女の皮をかぶり直し、ヴィエは会釈しながら入室する。その徹底した自身のイメージ戦略の見事さに、小さなため息をつきながら、「ちす」とハクスイもあとに続いた。

第一話 - 2

並んだ教員机の向こうには、先ほどの試験担当教使であり、学年主任とハクスイたちのクラスの担任を兼任するシュレエルが険しい顔で待っていた。

声も眉も潜めて、ハクスイとヴィエが囁き合う。

「やっぱり怒っているよな」

「人に迷惑をかけることしかできないものね、わたしたち……いいの、早めに謝るの」

つくや否や、挨拶よりも早くヴィエが頭を下げた。

「先ほどの授業は、申し訳ございませんでしたの」

「やりすぎちいました」

ハクスイとヴィエが謝罪すると、シュレエルは外面を一変し、「いやいや」と手を振った。

「そういうことではないんだよ。確かにありや困るが……別にそんなのは、負けたやつが次頑張りやいい。じゃなくてな、お前らの話だよ」

「わたしたちの……？」

ハクスイとヴィエは顔を見合わせた。その枯れた表情もまたまらなないと一部の女子生徒には評されるシュレエル教使は、こめかみをかく。

「念のため確認をしておくけどな、一応お前たちも、この養成学校に入学したってことは、彩光使^{セリフ}を目指しているんだよな」

「ええ」「まあ」

ふたりは曖昧にうなずいた。

「……本当にか？」

教使に胡乱な目を向けられる。

「なれるものなら」

「目指すだけなら、誰にも迷惑をかけませんし」

「悪魔を絶滅させてやるのが、俺の遠い夢ですから」

「入学した当時は、わたしも希望を抱いていましたの……」

シユレエルはため息をつく。

「本当にネガティブだな、お前たち……胸を張って言わないのか？
天使なら、憧れだろ？ 彩光使は。先生だって昔はなりたかったんだぞ」

「じゃあ諦めて教使になったんすか？」

「教使こそが俺の生きる道だと気づいたんだ！」

図星だったのか、ハクスイの言葉にシユレエルは思わず声を荒げた。が、すぐに冷静さを取り戻し、短い髭を撫でた。

「あのなあ……そこでお前たちに言いたいことがあるんだ。期末試験も終わった今、少し早いけど、進路の相談だ。来年はもう三年生だろ？ ちゃんと真面目に答えろよ」

「彩光使は無理だから、キツパリ諦めて学校辞めろってことすか？」

「それを言われたら、どうしようもないの……明日からなにをして生きていこうかしら……」

「違う！ 勝手に話を進めるな！」

シユレエルは机を叩いて、強引にふたりの妄想を止めさせる。

「お前たちの武術で彩光使にならないのは、勿体無いと言いたんだ！ 天ツ雲・フィノーノの損失だぞ！ あのな、彩光使に必要な資質は多く存在しているが、先生は第一に自分の身を守る力だと思

っている。どんなに仕事ができる彩光使でも、悪魔にやられてしまったらそこでおしまいだろ。だから、武術ほど大切なものはないんだ。どんな彩光使だって、学生時代にクラス全員抜きなんてできなかったのに、お前らってやつは……！」

「はあ」「わたしたち、そんな大したものではないですよ」

謙遜なのかネガティブなのか、ふたりはとりあえず顔の前に掲げた手を横に振る。

「いい加減にしろよお前ら、そんなんだから、機奨光がないんだよ…… 良いか？ 彩光使に必要な不可欠な機奨光のボーダーラインは、大体上位20位までだ…… んだが、これ、見てみる」

シュレエルに渡された紙には、ふたりの機奨光試験の学年順位が、いち早く記載されていた。ハクスイ、161名のうち、161位。ヴィエ、161名のうち、160位。

「はあ、まあ、そうでしょうね」

「いつも通り、こんなものですよ」

「納得しているんじゃないぞ！ 機奨光の成績の悪さで中退にさせられることはないが、逆立ちしたって彩光使になれるような点数じゃないからな！」

もはや何度目か、息を切らせたシュレエルは、はあ、とため息をつく。

「だからこそ、先生はお前たちに適切な指導を心がけるつもりだ。先生はお前たちをどうしても、彩光使にしてやりたいんだ。それだけはお前らにしてくれるよな？」

「すごいっす先生。熱血っすね」

「立派だと思いますの」

「他人事かお前ら！ …… ったく、もういい…… 先生が勝手に決めてやったからな、一応お前たちに話を通そうかと思っただ俺がバカだったよ。まず、ヴィエくん」

シュレエルは机の下から取り出した書籍を、次々と積み上げてゆく。五冊、十冊、十五冊、二十冊…… 本はヴィエの腰ほどまでに重くなった。その塔を眺めたヴィエは顔をしかめる。

「…… なんですの？」

「機奨光を高めるための自己啓発書だ。色んなバリエーションをな、中央図書館に行って借りてきてやったんだぞ。もちろん問題集もある。色んな教使に相談してな、全てがオススメの一級品だ」

「…… 学校の授業で、行なってますけれども」

「その四十倍の量が宿題だ。ヴィエくんには、とにかく数をこなしてもらうことにする」

「…… 効果があるとは思えませんけれど、わたしなんかには」

「ちゃんと読んでおくんだぞ。きょうから自由時間はないと思ってくれ。で、だ」

無茶な命令に固まるヴィエを置いて、シュレエルは椅子の向きを変えてハクスイを見やる。

「ハクスイくんに関しては、もうお手上げと言いたいんだけどな」

「どうも長い間お世話になりました」

「待て待て！ 冗談も通じないのかお前！ 頭を下げるな立ち去ろうとするな！ いいから、先生は考えたんだ。ヴィエくんには量の課題、そして、ハクスイくんには質の課題だ」

とりあえず本を一冊掴んで開いていたヴィエが「質……？」とつぶやいた。シュレエルは自信を男臭い笑みに変えて、人差し指を立て

てる。

「ああ、もし効果があれば全国で機奨光不足に悩む生徒たちへの対応策ともなるだろう？　そのための、いわばテストケースだな、お前たちは。全国みんなのために、頑張ってくれよ」

「はあ」

「わたしは、わかりましたけれど……ハクスイは、なんですか？　なにをしますの？」

「質の課題はな、特別教使だ。個別に、ハクスイクン担当でな」

「それはこの俺だ！　とか言っちゃう感じすか？」

「シュレエル先生は確かに良い先生だけど、堅物だからふたりつきりはちよつと……」

「言わんよ。というよりも、なんだ今のヴィエくんの発言は。正面から陰口か？　斬新だな。まあいい」

大人の潔さで諦めると、シュレエルは喉を鳴らしてから告げてくる。

「お呼びした先生は、なんと彩光使の方だぞ」

『彩光使……』

ハクスイとヴィエの声が揃った。

「そうだ、驚いただろ。おっと、俺はそろそろ授業が始まるから行くから、ハクスイクンはここで待ってるよ。頼んだ方は、彩光使の仕事が終わり次第、駆けつけるって言ってたからな」

「彩光使の人が、直々に、か……？」

「ハクスイに……すごい」

ヴィエは口元に手を当てて目を見開いている。齢十六にして不惑の境地に至るハクスイですら、黒瞳を大きく揺らしていた。

そもそもこのフィノーノ高校とは、彩光使を養成するために設立された学校である。この学校に通う全ての生徒が彩光使を目指し、彩光使に憧れ続けているのだ。それはハクスイやヴィエであっても、例外ではなかった。

「ちよつと、見てみたいかも……」

誕生日プレゼントを待つ幼女のように目を輝かすヴィエに、シュレエルは冷たく言い放つ。

「お前は補習だ」

「えー……」

「いいからいくぞ、ヴィエくんにはとにかく量をこなしてもらわなければならない。ほら、持てるだけでいいから持つて。じゃあな、ハクスイクン、くれぐれも失礼のないようにするんだぞ」

「ま、前が見えませんの……」

ヴィエに次々と本を抱えさせて、ふたりはチャイムに追い立てられるように部屋を出てゆく。待機を命じられたハクスイは、一気に人口密度の薄まった職員室で手持ち無沙汰に頬をかいた。

「彩光使……本物の、彩光使か……なんか、突然すぎて、夢みてえだな……」

彩光使は天ツ雲で選りすぐりの戦闘員だ。その素晴らしい機奨光により数々の光輝武装を使いこなし、悪魔という悪魔を殲滅する神の使徒だ。彼らは小学生から高校生までになりたい職業ナンバーワンを独占し、いわば天使たちの象徴的存在として輝き続けている。

ハクスイのような見習い学生天使とは格が違う上に、中央庁から支給される給金も、教使とは桁が違う。

「一体どんな人が……来るのかな……」

テレビで目にする彼らは、美青年であつたり、知的な女性であつたり、仕事ができそうな大人といったイメージが強かった。

あまりの緊張に手が震えてしまう。失礼がないように、などと真面目に考えすぎると意識が遠ざかつてしまいそうだ。

「……み、見放されないように、しねえとな……」

グイエではないが、悪い想像が頭の端に浮かんでしまう。少しの間ひとりで待っていると、静まり返った校舎で、遠くから慌ただしい足音が響いてくるのが聞こえてきた。

（来たか……？）

身体が石になりそうだ。常に俯きがちの無表情で過ごしているように見えるハクスイであるが、その実はひどく慎重で謹厳である。

前向きにも後ろ向きにもなれない彼は、幸運を信じることができない。己の行動が全てなのだ。だからこそ、その双肩にかかるプレッシャーは尋常ではない。

様々な受け答えを想定しつつも待っていると、勢いよく職員室のドアが開け放たれた。

「おまたせ！」

満面の笑みとともにやってきたのは、思い描いていたとはまったく異なる人物像で……

彩光使は華奢で小柄な美少女だったため、ハクスイは一瞬、学生が教使に呼び出されたのかと思った。それに、彼女の顔に見覚えもあつたのだ。

「…………あれ、お前は…………？」
彼女は廊下で叫んで去っていった、ふわふわの金髪の美少女だった。

少女はこちらを指さしながら、大きく口を開いたまま「あ」を連呼していた。その表情が、コップの水に朱を差したように、少しずつ、少しずつ染まってゆく。

「あつ、あつ、あの、あつ！」
互いに見つめ合うことしばし、まるで観念したかのように、少女は名乗った。

「は、は、初めまして…………！　せ、彩光使だよ！」

第一話 - 3

「じゃ、じゃあ、あたしから自己紹介するね」

場所を変えてから、彼女はそう言い直した。溢れる機奨光が彼女の肌から清光のように放たれ、輪郭がぼやけたショートカットは、近くで見るとタンポポの綿毛のように柔らかそうだ。

「あたしはルルノ。好きなものは恋愛話で、嫌いなものは悪口。よく人からは脳天気だって言われるけれども、ちゃんと悩んでいることだってある身近な高校二年生だよ。これからよろしくね！あたしも頑張るよ！」

ハキハキとした耳心地の良い声だった。美少女というのならば、ヴィエも引けを取らないだろう。だが彼女は、それに加えて暖かな機奨光と人柄を兼ね備えているようだった。

色々と彼女に聞きたいことはあったものの――主に初対面の際の奇言について――ハクスイはとりあえず頬をかきながらつぶやく。「……そういや、史上最年少で、彩光使になった優秀な天使がうちの学校にいるって、聞いたことがあったっけな……それが、ルルノ……さん、だったのか」

「あたしのことはルノでいいよ！ 同い年だしさ、敬語もいらなし、遠慮もしないでね！」

ルルノは背伸びをするように、親指を突き出してくる。

「いや、しかし……」

相手はなんといっても、あの彩光使なのだ。天使たちの永遠の憧れにして、地上の平和を守る暁の兵士たち。いくら見た目が子供っ

ばいからといっても、自分と同列に扱うなど。

「あたしが良いって言っているんだから、良いじゃん！　ね？　ね？」

だが、そうまでして笑顔を押しつけられると、ハクスイはそれ以上言い返すことはできない。強弁するのはなおさら相手に失礼だろう。

ふたりは生徒指導室に移動して、向かい合って座っていた。

わずかに逡巡した後、それならば、とハクスイはルルノノに従った。

「わかった、ルノ。俺はハクスイだ。まあ、呼びやすいように呼んでくれ」

「おっけー！　それじゃあ、にーさんと呼ばせてもらうね！」

ハクスイはコケかけた。

「それおかしくないか？」

「呼ばせてもらわざるをえないね！」

「なんでだよ、誰かに命令されてんのかよ」

詳しく問うも、ルルノノは意に介していない。

「シユレエル先生から頼まれてね、にーさんの機奨光を覚醒させてやってくれって！　ふふっ、そのために、お手伝いをさせてもらうよ！」

「いや、その、悪いな」

「人の役に立つのが彩光使の仕事！　お安い御用さ！」

張り切って、ルルノノは小さな胸を張る。可憐な容姿に反して、いちいち所作が男前だ。

「なあ、とりあえずまずひとつ聞いてもいいか？」

「なにかな！ 言つてごらん言つてごらん！」

「その、さっきの更衣室前で、『DMにしてください』って、あれなんだっただ？」

その瞬間、彼女の身体がぴかっと光った。

「うおっ」

まるで目くらましのようだ。一瞬のフラッシュに驚いていると、ルルノの顔が徐々に赤く染まってゆく。

「そ、それはっ……！」

なんとなく、しまったかな、とハクスイが心のなかで反省していると、ルルノの髪からぱらぱらと蛍光がなびく。

「いつ、今は彩光使だから、あたし！ か、関係のない話は、謹んでもらおうかな！」

「そ、そうか……」

頬杖をついて気難しそうな表情を演出するルルノに、若干気圧されてしまう。どうやら、謎は謎のまま先送りにされてしまうようだ。

「……だ、だから……その話は、また、あとで……」

「ん？」

「な、なんでもないなんでもないよ！ 追求しちゃだめだってば！ き、気にしてたら不幸になっちゃうよ！」

不幸にはなりたくなかったので口をつぐんでいると、ルルノは何度も繰り返しうなずいていた。

なんとか自分のペースを取り戻したらしい彼女は、ファイルを片手に口調を改める。

「そ、それでは、コホン……えー、にーさんはフィノーノ高校二年生。子供の頃から彩光使を目指していて、そのために稽古に励んできた武芸は、同じ学年に並び立つものはいないどころか、十年にひ

とりの逸材と言われている……」

「ちょ、ちよつと待ってくれ。それ誰が書いたんだよ」

ファイルから出した内申書のようなものを読み上げるルルノに、思わず手を伸ばす。

「え、シュレエル先生だよ」

「そつか……だったら早く短所を読み上げてくれよ……上げて落とす気か、畜生」

「べ、別にそんなつもりはなかったけど……ええと、勉学の成績も優秀、それでいて何事にも真剣に取り組んでいるため、教師からの信頼は厚い。しかし、その彼の欠点は機奨光の欠如である。彼は天使の力の源である機奨光を、入学当時から“1ポイントも持っていない”」

「……まあ、そういうわけだ」

それがどれほどに異常なことなのか、ルルノはわかっているだろう。

「そつか、なるほどねー」

「なんか軽いな！」

「いや、機奨光がない人なんて初めてだから、ちよつとびっくりしちゃって」

「あ、ああそうなのか、驚いていたのか」

彼女は金髪の巻き毛を指でくると弄り出す。

「機奨光っていうのは、どの天使も持っている、不可能を可能とする能力のことだね。それがゼロっていうのは、どういうことなんだろう？」

「俺もよくわからねえんだけど、面倒を見てもらっているお医者さんの話ではさ……“どうして生きているのかわからない”だそうだし、な、なるほど……」

「機奨光がない天使は飛べない。光輝武装を使えない。もつと根本的なところで言うと、天使としての体を維持できない。ただの小さな火になってしまう。……って、世の中では信じられているみたいだしな」

ハクスイの目に光沢がなく、“魔天”と噂されているのも単純な話だ。彼には機奨光が一切ないのだから。

天使が当たり前に持っているべき機奨光を瞳に映すことができないため、まさしくブラックホールの眼窩である。

「うーん、それはちょっと、大変なこと、だよなあ」

「ちなみに、彩光使のルノはどれくらいの機奨光があるんだ？」
知識としては、ハクスイも知っている。

ひとりの学生が出力する平均の機奨光は500ポジ前後であり、彩光使になるための条件はその二倍、1000ポジの壁を越えなければいけない。そして、数万、数十万の天使が生活する天ツ雲を空に浮かべるために必要な機奨光は、合計500万と言われている。

「あたし？ あたしはこないだ計測した値は、300万だったかな」
ハクスイは噴き出した。

「……マジか」

そんな数値は、教使はおろか、教科書ですら見たことがない。彩光使としても、異常なのではないだろうか。

「まあでも……機奨光がないから身体が悪いつてわけでもねえし、テストの総合評価は落ちるが、こうして高校にも通えている。今通院しているとこの病院代は、なんか中央庁の偉い人に負担してもらっているし……ただ、彩光使には、なれねえな」

そう言うと、ルルノは真剣に考え込んでいた。

「そっか、なるほど、なるほどね……なるほど……」

ハクスイは普段通りの暗い目で、窓の外の校庭を眺める。これだけは本当にどうしようもないことなのだと、ハクスイは諦めているのだ。

「迷惑をかけて、悪いな。シュレエル先生も、手がつけれないってんで、ルノに押しつけたんだろ」

その途端だ。

「そんな言い方をしちゃだめだよ！」

笑顔ベースの表情を保っていたルルノノが目を吊り上げてピシャリと言い放ってきたので、ハクスイは少し驚いた。

「機奨光を高めたんだよね、にーさんは。なら、あたしに任せてよ！」

「だけどな……医使だって、サジを投げそうになってんのに」

機奨光を高めることは、非常に困難だ。心や想いなどといった目に見えないものを変えるためには、性格の矯正すらも必要となる。それですら、確実とは言えないのだ。反復するだけで身につく武芸や勉強とはわけが違う。生き方が変わるようなある日突然の衝撃で跳ね上がることもあれば、その逆もある。火で形作られている天使の原動力は、あまりにも不安定なのだ。

だがルルノノは自信満々に言う。

「エンジェル大丈夫！」

「……なんだ、それ」

「あたしの中で流行っている謳い文句だよ！ エンジェル大丈夫！ 天使の問題なんて、ほとんどは気合で解決するんだから！」

「そ、そうか、シンプルでいいな」

ルルノノの爽快な笑顔を見ると、ハクスイですら信じてしまおうかという気になってしまう。

「……なら、頼む」

今までもさんざん向き合ってきた問題だ。もう他に頼れる人はいないのだから。

「あたしが、にーさんを立派な彩光使にしてみせるとも！」

心地良い断言であった。ルルノは胸を叩き、それから人差し指を立てた。

「個人の機奨光を伸ばすためには、その人のことを知る必要があるのさ！ そのために、にーさんがどんなときに幸せを感じるか、お聞かせ願わざるをえないね！」

「……幸せ？」

ハクスイはその言葉を初めて聞いたような顔をした。

「俺か……俺は……」

「そ、そんな深刻に考えこむようなことじゃないと思うけど！」

（……確かに、考えてみれば、悪魔を倒すことは俺の目的であって、幸せとは関係がない気がするな……幸せ、幸せか……そーいや、ヴィエも確かにあんまり幸せそうじゃねえしな……）

ハクスイがなにも答えずにいると、ルルノは熱弁を振るう。

「幸せなことあるよ！ たくさんあるよ！ じゃなかったら、機奨光なんてないよ！ 友達のコイバナ聞いたりとか！ 休日二度寝しているときとか！ 人の笑顔を見たときとか！ なんでもないことが幸せに思えることが、一番の幸せだとあたしは思うんだ！」

「それは……あるかもな」

どうやら問題はその辺りにあるのかもしれないと、ハクスイは思った。

「なにをやっても幸せと思えないよりは、確かに、マシだ。ものすごく、マシだ」

「違っよ！ それは違っよ！ なにをやっても、って、にーさんは

まだなんにも体験していないじゃないかと、言わざるをえないよ！」

「……そう、なのか？」

「なによりもまず、刺激！ ふふつ、あたし良いことを思いついちやったよ！」

ルルノノは口元に手を当てて、無防備な笑顔を覗かせた。見る人が見たら、彼女は自分に惚れていると思い込んでしまいそうな、透明感のある瑞々しい笑顔だった。

その時、どこかすぐ近くから「ワァー」という小さな喝采が響いてきた。

「な、なんだ？ 誰だ？ こええ」

「ああ、強い機奨光を発揮するとね、溢れた力が音や声に変化するのにはよくあるんだよ」

「ま、マジかよ、当たり前のことなのか、これ…… すごいな、機奨光って、すごいな…… さすが彩光使だ。シュレエル先生とは違う」

ルルノノは部屋に飾られている時計を眺めて「もう三時かあ、早いほうがいいなっ」と独り言を言ってから、ハクスイに向き直る。

「あのさ、にーさんって、これから時間あるかな？」

「これからか？ あ、ああ…… 試験はもう全部終わったし、家に帰ってからも特になにもないから、きょうは一日暇だが」

よしっ、とルルノノは指を鳴らした。他人のことだというのに、こちらまで感情が伝染してきそうなほど、喜んでくれているのがわかった。

「ふふつ、それじゃ、準備が済むまで校庭で待っていてもらえるかな！ 幸せを見つけられないにーさんに、目にモノを見せてあげるよ！」

「あ、ああ…… よろしく頼む」

くく

それからしばらくの間、ハクスイは制服のまま、授業中でがらんとした校庭で待ちぼうけをしていた。ルルノと別れてから、もう一時間近い。忍耐強く我慢していたハクスイがしびれを切らし出していた頃だ。突如として、空から強風が吹きつけてきた。

「……ん？」

見上げれば、上空から一艇の白銀の船が降りてくるではないか。

「ありやあ……機方舟か……？」
ボディーエア

機方舟は彩光使の象徴だ。一对の翼の生えたその流線型の丸いフォルムは、格好良いというよりは可愛らしく、どこか白いハトを彷彿とさせるような平和的な乗り物に見えた。

授業中だというのに、校舎の窓から生徒たちが首を出して騒いでいた。校庭に立っていないければ、ハクスイもあの中に混じっていただろう。機方舟はゆっくりと校庭に降りてくる。まるで空気の抜けた風船が地面に帰って来るような、優しい着地であった。

ぽつんと翼が消えると、両手を掲げるように両側のハッチが開く。

銀色の機体の中から現れたのは、衣装をチェンジしたルルノだった。学校の制服ではなくっていたルルノの格好は、テレビや写真でしか見たことがなかった彩光使としての正装であった。金と

銀の飾り糸が丁寧に縫いつけられた、真っ白な外套だ。

「にーさん、ちょっと時間がかかったね！ ごめんね、ごめんね！」

第一話 - 4

「……一体これは、どういうことなんだ？ 事情がまったくわからないんだが……」

「ふふつ、決まっているじゃないか！ 下界に行くんだよ！」

面食らってすぐには言葉を返せないハクスイは、「下界……？」とオウム返しにつぶやいた。そんな彼に、ルルノは手に持っていた紙を突き出してきた。思わず、読み上げる。

「下界渡航免状……？」

「さつきね、フィノーノの中央庁に寄つて、発行してもらつてきたんだよ！ ほら見て、学生一名つて書いてあるでしょ？」

「……ああ、確かに、書いている」

「あたしは今の仕事に幸せを感じているからさ、彩光使の仕事を実際にしてもらうのが早いと思つたんだ！ 人の笑顔を見れば、にーさんも幸せを感じてもらえると思つてね！ ふふつ」

「なんと……」

生で彩光使の活躍が見れる。それは彩光使候補生にとっては、夢のような幸運に違いない。だが、だからこそハクスイは尻込みする。

「でも、それは、その、良いのか？ 俺みたいな天使がほいほいと気軽に地上に降りてつたら、なんか、問題とか、起こらないのか？」

「エンジェル大丈夫！ だって監督責任者のあたしがついているんだもん！ こう見えても、あたしは一人前の彩光使なんだからね！ ふふつ、心配いらないって！」

300万の機奨光を持つ美少女の笑顔に、まるでハクスイの暗闇

のような憂慮も吹き飛んでしまうようだ。ハクスイは胸元を押さえる。火がほんの少しだけ疼くように揺らいた気がした。

断ろうという気持ちと、行ってみたいという気持ちが衝突し、さらに音を立てて燃え上がった。

ハクスイはうつむいていた顔をゆつくりと上げ、ルルノノにうなずく。

「わ、わかった……なら、行こうか」

「うんっ、乗って乗って！」

ルルノノに手引きされてハッチの中に足を踏み入れる。前面が巨大スクリーンになっており、その前に備えつけられているのが操縦席だろう。後ろは座席と荷物置場のようだ。だがそれよりも目についたのは、簡素な室内のあちこちに貼られている、太文字で書かれた標語だ。

『為せばなる。為さねばならぬ、何事も』 『人生は道』 『限界に限界はない』 『なぜベストを尽くさないのか』 『ネバー・ギブ・アップ』 人生を諦めない』

ハクスイは無然としながら顎に手を当てた。

「……この機方舟、お前のなんだな」

「お、よくわかったね！ ふふふっ、ルルノノ号さ！」

「名前はともかく……自家用機だなんて、すげーな」

ルルノノは操縦席に陣取り、機体のMの字型のハンドルを握る。音も立てずにハッチが閉まる。ハクスイはとりあえず、その後ろの座席におっかなびつくり腰を下ろした。

「よし、じゃあ、行くよー！」

「お、おう……うわっ」

空を飛んだことすらないハクスイは、突然の浮遊感について叫び声を上げてしまう。

「ちゃんとシートベルト締めてねー！」

「そ、それはどこにあるんだ……こ、これか？ よし、つけたぞ」

「さ、あとはお空の旅を満喫していよう」

「おおっ」

すると先ほどまで操縦席に座っていたルルノノが、気持ちよさそうに目を細めて伸びをして、責任者の座るべき席を離れた。ジャンプして、ハクスイの隣の座席に腰を下ろしてきたのだ。

「お前、運転は……」

「ああ、これはもう、ボタンひとつでピッピッピの自動操縦だよ」

「そ、そうなのか」

「あはは、だって、あたしじゃ運転はおろか、着地も発進もできないもん」

「下ろしてくれ、頼むから俺を下ろしてくれ」

戦々恐々としたハクスイの言葉を冗談と捉えたのか、ルルノノはまたも「あはは」と能天気な笑い声をあげる。普通の天使なら気にならないような上下左右の細かな揺れも、己の翼で飛んだことが一度もないハクスイにとっては自分の身体を襲う大きな違和感であった。

「えっ、平気だよ、自動操縦は万全なんだから！」

「でも、天使が操っているわけじゃないんだろう！ 自動だなんてなにが起きるかわからないじゃないか！ 怖いだろ！」

「だ、大丈夫だってば、にーさんは心配性だなあ……そんないっぱいいっぱいにならないでも」

初めて聞いたハクスイの怒鳴り声に、ルルノノはたらりと汗を流

しながら、両手を振る。それからあさつての方向を指さした。

「あ、ほら、にーさん、見てみて！」

「な、なんだよ、標語のひとつを読み上げても、俺には何の効果もないぞ……って」

ルルノノが差したのは、機方舟の壁面に張りつけられた透過モニター——ようするに右の窓であった。睨むように視線を移動させたハクスイが、息を呑む。

そこには雄大な天ツ雲が浮かんでいたのだ。下界の人々には見ることができない、雲の上に浮かぶ国である。世界の十七箇所に点在するうちのひとつ、極東にある天ツ雲・フィノーノの姿であった。

この瞬間だけは恐怖心も忘れたように、ハクスイは呆然と偉大なる雲の国を眺めていた。

「すげえな……下から見ると、やっぱり、そこらの雲と見分けがつかねえんだな……」

「ふふっ、果たしてそうかな！ 目を凝らしてごらんよ！」

「ん？ ……あ、機奨光か」

ハクスイは雲から発せられる威光に気づいた。そう意識すると、雲全体が光り輝いているのが見て取れた。あまりにも大きな天ツ雲が光を放つ様は、まるで第二の太陽のようであった。

「すげえ……」

「人間がお日様とかお月様の光を浴びると気持ち良いとか、幸せだとか、そういう気分になるのはね！ ふふっ、天ツ雲が空に浮かぶために放出している機奨光を、たっぷり浴びているからなんだよ！」

「へー……すげえな……」

ハクスイが堂々と浮かぶ天ツ雲の姿に見入っていると、いつしか重苦しさや心細さはなくなっていた。あるいはそれは天ツ雲のように機奨光を絶え間なく発するひとりの美少女が、ハクスイのそばでとても楽しそうに笑っていたからなのかもしれない。

「ほらほら、にーさん、見えてきた見えてきた！」

ルルノノこそが初めて機方舟に乗ったかのように明るくはしゃいでいる中、ハクスイは彼女が示す先を眺めて、感慨深い気持ちに浸る。

「あれが、地上なのか……」

小さい頃から名前だけは知っていた世界だ。彩光使にでもならなければ、一生行くことはないと思っていた光景が、人間の住む世界が、ハクスイの眼前にはいつぱいに広がっていた。

〃

夕暮れに染まる地上に、機方舟は降り立ってゆく。ハッチが開くとともに、ルルノノは勢い良く立ち上がり、ハクスイの手を引いてきた。

「さ、いこういこう、にーさん！ お楽しみの時間だよ！」

だが、ハクスイはすぐには動かない。気になることがあるような顔で、手を広げた。

「俺は、この格好で大丈夫なのか？ いや、その、普段通りの学生

服だろ？ 人間に見つかったり、しないのか？」

「あはは、大丈夫だよ！ これから先はどうなるかわからないけど、今の人間の神霊力じゃ、あたしたちは見えないよ！ せいぜいラッパの音が聞こえてくる気がするなー、程度だよ！」

「そ、そうか？ それならいいんだが」

ルルノノは荷物置場にあつた小さなトランクを持つと、ハッチから飛び降りていった。ハクスイもその後にとくと、コンクリート作りの巨大な建物とそれに差しかかる西日が目に入った。

「ん……ここは、学校、か？」

「そうだねー。中学校かなー？」

大きな建物の裏手に降りたようだ。緑のフェンスに囲まれていることから、校舎裏の空き地なのかもしれない。ルルノノとともに、ハクスイも辺りを見回す。

「下界つつたって、天ツ雲とあんまり変わらねえんだな……」

「そりゃあそうだよー、天ツ雲の文化は、人間さんの世界から輸入されているんだからね」

指を立ててしたり顔で語ると、ルルノノは「さてと」と一旦トランクを置き、手首に身につけていた光の輪を、自分の頭の上に浮かべた。

「この光導輪^{サクセブ}は、市販のものと違う、彩光使の特別製だね。困っている人を見つけ出して、そのネガティブなオーラを感知することができるんだよ。大体の場所は、機方舟にインプットしていたけれど、もしかしたらどこかに行っちゃったかもしれないからね、現地に着いてからはこれで探すんだ。えと、困っている人はどこかなあ」

「あれか？」

ハクスイが指差す先、校舎裏の奥まった日陰に、男子と女子が立

っていた。トランクを抱えて駆け寄ってゆくルルノノに、ハクスイも続く。

フィノーノ高校の制服に似た、白いワイシャツと、水色のスカート、あるいは黒のスラックスだ。男子生徒の方は黒髪を短く刈り込んでいて、童顔な少年だった。少女もまた黒髪をストレートに長く伸ばしていて、大人しげな風貌に、顔を真っ赤に染めて俯いていた。

「あ、そうだね！ 生徒さんっぽいね！ きゃー、初々しいねー！」
「なにが初々しいんだ？ 緊迫した雰囲気だぞ？」

「ふふっ、まあまあ、話を聞いていればわかると思うよっ」

疑問の目を向けるハクスイに対して、ルルノノはなぜだかとても嬉しそうだ。

「困っているのは、どうやら、女の子の方みたいだねー」

「あの黒いもやもやが、そうなのか？」

なにやら気まずそうに固まったまま動かない中学生の少女の身体からは、黒い粒子が立ち上っていた。まるで薄い霧に包まれているように、姿がぼやけてしまっている。

「そうだね、あれこそが、機奨光と対極をなす存在の力、冥混沌だ
よー！」

「落ち込んだときに、発生するんだな」

「うん。天使にとっては猛毒だし、これに包まれると、とにかく暗いことばかりしか考えられなくなるんだよ！ それが発生する理由の半分は、人間さん自身に原因があるんだけど……」

「もう半分は、悪魔の仕業なんだな」

「そうだね！ にーさんってば物知り！ 天才！ エンジェル！」

「小学生でも知ってっからな……」

ルルノノに賛辞の視線を向けられて、ハクスイは頭をかく。むし

るバカにされている気分だ。

「この子たちの場合は、どっちに原因があるのかわからないけどさ、でもどっちでも、困っているならあたしたちが冥混沌を抜わなきゃね！」

そう言つと、ルルノノは持っていたトランクケースを地面に置き、蓋を開く。中には、小さな黄金のラッパが収まっていた。

「人間さんに機奨光をプレゼントするときには、機奨光放出の増幅装置である特別なラッパを使っんだよ」

金ピカのラッパを持って、ルルノノは真っ白な翼を背中から生やした。ピカピカに光る、機奨光の発現だ。それは昼に見かけたばかりのクラスメイトのものよりずっとキレイで、厳かであった。光導輪に、翼、小さなラッパ、そして真っ白な衣装といい、これでどこからどう見ても、下界で信奉されている天使の姿である。

「じゃあ行くよ——」

ルルノノはそう言ってから、ラッパのマウスピースに桃色の唇を近づけた。

音が飛び出す。

ルルノノが吹いているのは、学校の音楽の授業でも習う、応援歌チャントの代表的な一曲だ。『恋人たちへの愛餐歌アガペー』は小学生でも知っているし、何人もの歌手もカバーしている人気曲だ。しかしルルノノの鳴らす音は、今までに聞いたどの歌とも違っていた。

（これが本当の、応援歌なのか……これに比べたら今までの応援歌なんて、ただの音の集まり、だな……）

ルルノノがラッパを鳴らすことに、少女の辺りを覆う冥混沌が晴れてゆく。

すぐに少女がまっていた冥混沌はなくなり、すると今度は、少

女の背中に天使のように小さな白い翼が生えてきたのだ。彼女を包む機奨光が、聖なる形を取っているのであった。

まるでルルノノに息吹を与えられた土塊のように、少女は動き出す。

「あ、あの！」

「……は、はい！」

少年もまた、緊張に身を固くしているようだった。

「じ、実は、ね、あの、わたし、その、前から、あの、瞬くんのことが、その」

「は、はい」

少女の翼が、ふわっと広がったその瞬間、顔を真っ赤にして、少女は叫んだ。

「好きだったのー！ー！」

応援歌をBGMに、白い羽が舞う。

羽は少女の身体を離れた途端、靈光に変わり、まるで輝く蝶のようになり彩った。

（……あ、そういうことか）

そこでようやくハクスイは得心した。自分は人間の中学生の告白シーンに居合わせたのだと。

第一話 - 5

応援を中断したルルノノが、ハクスイの脇を肘でつついてくる。

「もー、鈍いなあ、にーさんは。男女の機微はね、機奨光と冥混沌のせめぎ合いなのだよ！ 恋愛での問題が、一番冥混沌が発生しやすいんだから！」

「悪いな、疎くてよ。でも彩光使ってこんなことまですんのか」

「そうだよ。だってほら、見てみてよ」

男子生徒が、顔を赤らめながら、うなずくのが見えた。

「その……なんていうか……ぼくで、良かったら、ぜひ……」

「えっ……」

少女が自分の口元を手で抑えた。

「ほんとほ、ぼくのほうこそ、先に美月ちゃんに、告白しようと思つて……でも、その、先をこされちゃったみたいで……はは、カッコ悪いけど……その」

ルルノノはそのやりとりを見て、組んだ両手を頬に当て、じーんと感動していた。

「ほらほら……どう、にーさん……！」

「と言われても、別に。他人事だしな」

「くー、これこそがね！ 機奨光を高めるために必要なんだよ！ 人の喜ぶ顔を見て、自分たちが明日を生きるための糧とするのさ！ だからにーさんは暗いまなんだよもうっ！」

怒られてしまった。ルルノノは興奮した表情でラッパをハクスイの胸元に押しつけてきた。

「と、というわけだね！ ふふっ、これからこのふたりを応援してみらんだよ！ ゆくゆくはちゃんと、人の幸せを願えるような男になるんだよ、にーさん！」

「……よし、これも彩光使の仕事なんだもんな」

ハクスイの座右の銘は、“やってみてから後悔する”だ。ルルノに差し出されたラツパを受け取り、マウスピースを取り替えてから、ゆっくりと吹口に唇に当てようとする。

応援歌なら授業で何度もやっている。授業の成績も悪くはない。だが、すぐそばに彩光使がいるということで、身を固くしてしまう。「さすがに、緊張するな……よし、それなら行くぞ」

「失敗は成功の女神！ 後ろにあたしが控えているんだから、安心してやっちゃって！」

片腕を突き上げるルルノの応援の直後、少年が頭を下げた。

「ぼくもむしろ、美月ちゃん、ぼくからもお願いできるかな……付き合って、ほしいんだ」

そこに、ハクスイのラツパが響き渡る。音自体は、非常に滑らかな、綺麗な高音である。よどみがないと言っても過言ではない。これが音楽のテストなら、満点に近いはずだ。

しかしなぜだろう、その音から凄まじいまでの暗さがにじみ出ているように感じるのは。

パァン、とまるでガラスが碎けるように、少女の背中の羽が散った。

「ほえ？」

ルルノの呆けた声の後に、凄まじい勢いで少女が頭を下げた。

「ご、ごめんなさい、瞬くん！ 無理！ それだけは無理！」

『え、ええええええええええええええええ！』

件の瞬くん＋ルルノノが、目が飛び出るような表情で叫ぶ。少女の体から、まるで不燃物を燃やしているときのような黒い煙が吹き上がる。

「わたしなんてチビで可愛くなくて頭も悪い女の子なんて、瞬くんが付き合ってくれるわけないもの！ だから、ダメ、無理！ 絶対ダメ！ やだ！ お断りよ！ 寄らないで！」

「なにこれ！すごい悪質なバツゲームなのか！」

その冥混沌が感染するかのように、少年もまた、猛烈な勢いで黒煙を放出し始めた。

「や、やっぱりだめなんだ……ぼくみたいな何の取り柄もなくて、結局、普通なだけが印象のぼくなんかじゃ……美月ちゃんと付き合うなんて夢を見るだけ無謀だったんだ……」

「ああ、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、瞬くん……こんなわたしが告白なんて考えちゃったから、すごい迷惑をかけて……ああ、もう、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

黒々とした冥混沌が大河のように流れる中、少年と少女は互いに謝り続ける。

ルルノノは少しの間ぽかんとしていたが、やるべき事を思い出して頭を抱えながら叫んだ。

「ど、どどうしてこんなことに……」

「……うーむ……」

ハクスイは手元のラッパを見つめながら、複雑な表情をしていた。
「なんつーか、上で暮らしていたときは気づかなかったが……俺の
0ポジってのは……相当なもんなんだな……」

ルルノノが平気そうな顔をしていたから忘れていたが、元々は誰
の顔にも影を落としてしまうような男だったのだと、ハクスイは傷
つく。

「さ、さすがのあたしも、こんなの初めて見たよ……」

「人の心に絶望を芽生えさせてしまうほどの天使か、俺は……」

ハクスイ自身もまた、絶望しきっている心ながら、少なくとも
衝撃を受けてしまう。ラッパをトランクにしまいながら、謝罪する。

「悪いことをしてしまったな……すまん、中学生の男女……すまん、
ルノ……」

「いいいやそんな、そ、そんなににーさんが謝ることじゃ!」

「俺はこのまま空に戻って、もう二度と地上には来ないことを誓お
う……」

「ま、まだ終わっちゃいないってば! 諦めないでにーさん! え
えい、あたしに任せて!」
「いや、しかし……」

ついには少年と少女がそれぞれ地面に頭をこすりつけそうになる
ほど低頭するに至って、その事態を重く見たルルノノは、学生たち
に声を張り上げた。

「だめだよ! せつかくの想いをそんな風に捨てちゃったら、もっ
たいないよ!」

ルルノノの背に生えた翼が、さらに光度を増してゆく。彼女は強

い言葉の風で、少年少女の冥混沌を吹き飛ばそうと奮闘する。

「自分に負けないで！ ふたりならできるって！ さっきは思いが通じ合ったんだから！ 諦めちゃだめだって！ 恋は素晴らしいものなんだから、それを嘘にしちゃだめだよ！」

ルルノノは必死に歯を食いしばって声を張った。他人のためにどうしてそこまで一生懸命になれるのかわからないほどに、ルルノノは全力だった。

「ほら頑張って！ 心に負けないで！ 全力で頑張って！ 負けないで！ 立ち上がって！」

それはハクスイが彩光使という職業に対して抱いていたスマートさを粉々に打ち壊すような光景であったが、なぜだか今のルルノノのほうが、イメージよりも何倍も輝いて見えた。

「頑張って！」という一際大きな叫びの後に、少年と少女は立ち上がっていた。その目はもう、ハクスイのようにダークには染まっていなかった。

「で、でも！」

少女がグツと胸元に当てた手に力を込める。

「わ、わたしそんな風に、ホントに、ダメすぎるけど……でも、でも、頑張るから！」

「ぼ、ぼくも、自分を変えられるように、頑張る！」

冥混沌が霧散し、また新たな機奨光がふたりを包み込む。

「だって、好きだから！」

「ぼくも、好きなんだ！」

ふたりは顔を真っ赤にしたが、きちんと自分の想いを伝えていた。瞬くん、わたしと、付き合ってくださいっ

先ほどの言葉をもう一度少女が述べると、少年はすぐに頭を下げ

た。

「み、美月ちゃん……こ、こちらこそ！」

今度こそ、美月は涙を目に浮かべて、何度もうなずいていた。天使に祝福されたうら若いカップルは、こうして結ばれることができたのだ。他人事に興味はないとまで言い放ったハクスイですら「良かった」と思えるほどに純真で、けがれなき世界の神聖な出来事のようにだった。

「おお……やったな、ルノ」

ハクスイが向き直ると、ルルノは地面にへたりながら息を切り、それでも誇らしげな顔をしてピースサインを作っていた。

「へ、へへ……ほら、どう、にーさん……だから安心して失敗して、つて言っただしょ……」

機奨光の力を大量に消費したために、凄まじい疲労感を覚えていたのだろう。ハクスイはそんなルルノに、純粹な尊敬の眼差しを向ける。

「本当に……すごいな、彩光使の力は」

「ふ、ふふふ……まーね……幸せな人の顔を見ると、嬉しくなるでしょう……」

「いや、それはどうかかわらないが……まあ」

安易にはうなずけなかったが、それでもハクスイは心から幸せそうに微笑むふたりを眺めて、考えを改めることにした。

「良いことをした、って気はしてくるんだろうな」

「ふふっ……そうでしょうそうですね……」

辺りにすっかり夜の帳が降りていた時間帯だった。そのとき少年と手を握り合っていた少女が、不吉を感じさせる口調で、つぶやい

た。

「あ、カラス……」

つられてしまい、ハクスイが見やると、フェンスの上に一羽のカラスが止まっていた。

「え、なに？ 美月ちゃん」

「あ、ううん……ただ最近よく見るなあって思って……あ、いいの……行こ、瞬くん」

「う、うん」

少年と少女が去っていつてもまだ、ルルノは神妙な顔をしてカラスを睨んでいる。

「カラス……？ まさか」

「どうしたんだ？ ルノ」

腰が抜けたようにへたりこんだままのルルノが、何らかの危機を抱いているその最中だった。突然、つんざくようなけたたましい啞い声が響いたのだ。

「ケエーッケッケッケッケッケッケッケッ！」

しわがれた老人の声色が、そのカラスの口元から、放たれていたのである。

「天使どもめ！ いい気になっているんじゃないぞ！ ケエーッケッケッケッケッ！」

第一話 - 6

「や、やっぱり……悪魔！」

敵意のにじんだルルノノの叫びを、ハクスイが聞きとがめた。

「あのカラスが、悪魔……？ 俺が昔見た悪魔は、もっと普通の人の形をしていたが……」

「あたしたち天使とは違って、悪魔は地上に棲みついているんだよ！ 仮初の姿を取ってさ！ そのほうが人間により影響を及ぼすことが出来るからね！」

「なんて迷惑な奴らだ」

「より強大な力を持つ悪魔は、黒猫に化けるから、黒猫を見たら逃げなきゃだめだからね！」

まだ立ち上がれていない彼女に、悪魔はカァーカァーと鳴く。

「天使ルルノノめ！ やられ続けた同胞の命の代償を、きょうこそ貴様に払わせてやるぞ！」

「そ、そう簡単にあたしは負けないよ！ 人間さんにちよつかいばっかりかけてもう！」

「そう言われても、これは仕事なのだから仕方あるまい！ ケエツケツケツケ」

「……た、確かに、それはその通りだけど！ でも迷惑をかけるのはっ」

ルルノノの意気がわずかに鈍った隙に、悪魔は散弾銃のように仕掛けた。

「なによりも傍若無人に我々の仲間を狩り続けたお前のほうが、よ

つぽど迷惑だ！ 俺の友達だってお前にボコボコにされて、しばらく入院し、まだ青あざが取れないのだぞ！」

「うつ……ご、ごめんなさい」

「謝るのか！」

あまりにも思いやりがありすぎるのかなんなのか、良心の呵責に苛まれたルルノノにハクスイが驚く。謝ってしまったからか、悪魔はますます調子に乗ったようだった。

「仕事の最中に受けた傷だから労災が下りたものの、それでも一家を養う大黒柱が寝込むことが、家族にどれだけ不安な思いをさせるか、わかっているのか！ それが天使の行つ正義か！ 悪魔だって生きているんだぞ！」

カァーカァー、とカラスがわめくと、ルルノノは行き場のない視線を俯かせた。

「うつ、それはちょっと、これから手加減して優しく殴るからさ……」

……

「カァー！（それ見たことか！） カァー！（それ見たことか！）

これだから天使というやつは！」

悪魔はなによりも得意げだ。なんとその姿が徐々に人の形を取ってゆく。手には冥混沌で作られた漆黒の三叉槍を持っていた。

「少しでも悪いと思うのなら、仲間を呼ぶから、ボコられる！ さあボコられる！」

ハクスイは無表情で屈み、拳大の石を拾う。その感触を確かめるように何度か放り上げ、受け止めることを繰り返す。そうしてから、おもむろに振りがぶった。

カラスの真横を、石が凄まじい速さでかすめてゆく。

「うお！」

「ごちゃごちゃうるせーんだよ、テメエ」

ハクスイだ。彼はしらけた表情で石を拾っては、次々と悪魔に投げつけた。

「悪魔つーのは、そういう方向からチクチクと責めてくるんだな、参考になつたぜ」

「あ、危ないではないか！ 投石は古代人類文明では、立派な兵器であるぞ！」

慌てた悪魔が抗議するようにその場で羽ばたくと、黒い羽とともに冥混沌が舞い散る。

「それでも天使か！ 相手の言い分を無視して独善を貫くのか！ それ見たことか！ そんなことで人々を救えるとも思っているのか——うおう！」

まったく聞く耳を持たなかった。ハクスイは作業に従事するように石を投げ続ける。

「知らねーよ、帰れバカ、帰れ死ね、地獄に帰れ」

「な、なんだこの男は！ 俺の冥混沌攻撃が通用しないとは……機奨光を持っていないとも言うのか！ まさか同類！ 悪魔なのか——！」

恐怖に震える悪魔に、ハクスイはクラスメイトたちを怯えさせる暗黒の視線を突き刺す。

「れっきとした天使だよ。俺はな、悪魔が大嫌いなんだ。ルノに好き勝手言ってんじゃねえよ。羽もぐぞオラ」

「なななな、なんという恐ろしい男！」

ハクスイの怒気を受けて、悪魔は震え上がる。

「うう、ごめんよ、悪魔さん、ごめんよ……」

体育座りをして落ち込むルルノをかばうように、ハクスイは前に歩み出る。

「つか、黙って聞いてりゃ軟弱なことばかり言いやがってよ。傷つきたくねえんだったら、下界の人間に手出しするんじゃないよ。一生引きこもってる。それができねえんだったら、戦いに出た時点で死ぬくらい覚悟しやがれ。 teme 工らネガティブな一族なんだから死ぬまで戦って死ぬ」

「なんて悪い男なんだ！　こんなやつが現れたなど、上司と相談しなければ……エケエツ！」

「お、当たった」

飛び立つ瞬間に石の直撃を食らった悪魔は、フェンスから転げ落ち、それでも落下せずに飛び去ってゆく。ハクスイは舌打ちした。「チツ、逃したか……って、こうしている場合じゃねえか、おい、ルノ！」

ハクスイはルルノノに駆け寄った。頬に影を落とすルルノノは、まるで心細い家出少女のように膝を抱えて、縮こまりながらフェンスに寄りかかっていた。

「お、おい、大丈夫かよ、ルノ……」

先ほどまで笑っていたルルノノが、校舎裏のオブジェと化しているのだ。さすがに心配してしまう。普段から機奨光がゼロだからこそ、機奨光を失ってしまった天使がどんな病状に見舞われてしまうのか、わからない。ハクスイは焦りながらも、ルルノノの顔をのぞき込む。

「……う……」

そんなルルノノが、急に口を開いた。

「……だめだ……もう、だめだ……ホントにむり……歩けない……歩く気がおきない……あたしが歩いて、どうなるっていうんだろう」

……こんなあたしが世界にできることなんて、なにひとつないのに、生きているだけゴメンナサイ……なんだろう……あたしってば、なんのために生まれたんだろう……天使はどこからきて、どこに行くんだろう……ああ、辛い……」

その独白を飲み込むには瞬き10回では足りなかった。ハクスイは面喰らったまま聞き返す。

「……どう、したんだ？　これが、悪魔の所業なのか……？」

ハクスイはとりあえず衝動的にルルノの背をさする。

「しつかりしろよ、オイ」

「……だめ、もう死にまくりたい」

「しつかりしろ！」

一体これはどういうことなのか。ルルノは息も絶え絶えと言った風体だ。体育座りしている膝の隙間から、スカートの奥の白の下着が見えてしまい、ハクスイは思わず視線を逸らす。

もはや機奨光のかけらも残っていないルルノは俯いて、首を左右に振る。

「はあ……もう、疲れたよ……人間なんて応援して、なんになるっていうんだろ……」

「自分の仕事を否定すんなよ！」

豹変したルルノは、ハクスイの声も届いていないようだ。気づけば、フェンスの下、茂みに挟まれるようにして小さくなったルルノは、すっかりダウン系的美少女と化していた。

「うつ、お仕事、したくないな……一生、ニートで過ごしたいな……」

「なんでいきなりダメ人間になってんだよ、くそっ！」

ハクスイは立ち上がって機方舟に向かおうとする。だが、その裾がガッシと掴まれた。

「あ？ ああ、ルノ、ちよつと待ってな、今助けを——」

しかし頑なにハクスイのズボンから手を離そうとはしない。

「しばらく待つてたら……よくなるから……あるいは死ぬかもしれないけど……だから、誰にも、見せなくて、いい……死ぬう……」

「死ぬんだったらダメだろ！ 下らねえ意地張ってんなよ！」

ハクスイはもう少して破れそうなズボンを、自分の手で無理矢理引っ張る。ビリビリという音がしたところで、観念したのか、ルルノノがついに手を離れた。

「うう、にーさん……破れちゃうってば……」

「んなの、どうでもいいだろ。それより早く、通信で助けとか……って呼べねえのかよ！」

我に帰ったハクスイは、思わず叫んだ。光導輪や機方舟に限らず、光化製品の全ては機奨光がなければ動かない。ハクスイは無論のこと、今のルルノノでは扱えないのではないか。

ハクスイは頭を抱えた。ルルノノが元に戻らなければ帰れないということは、ハクスイひとりでルルノノのピンチをなんとかするしかないのだ。

「おい、ルノ、俺はどうすりゃいいんだよ！ どうすりゃお前の機奨光が戻るんだ。応援……すればいいのか？ だけど、俺が応援したって……余計こじれるだけだよ……！」

少女に吹いたラッパの音が、脳裏に蘇る。この状態のルルノノに吹いたら、なにもかも諦めてしまいかもしれない。気持ちだけが焦ってしまう。

暗闇に沈み込む地上を照らす光明が降り注いできたのは、その直後だった。

第一話・7

「お、おお？」

空を見上げると、今まさに、空から新たな機方舟が降りてくるどころだった。救援か、あるいは天の助けがやって来たのだ。ハクスイはルルノの肩を揺する。

「だ、誰かきたぞ、ルノ。助かった、んじゃねえかな……」

まもなく機方舟は地上に着艦した。ハッチが開いて降りてきたのは、小柄な少女だった。

背の低い彩光使だと思ったが、すぐにそれが間違いだと気づかされた。彼女がまっとっているのは、一昨年にハクスイたちが卒業したフィノーノ中学校の制服だったのだ。

「ねえねえっ」

降りてきた彼女は動揺を隠さず、まっすぐにルルノの元へと走ってゆく。

「あ、あー……ねえねえ、ねえねえ？　ねえねえ、ねえねえ」

連呼しながら、しゃがみ込んだ少女はルルノの頬を掴み、無理矢理に顔を上げさせた。涙の跡の残るくすんだ金色の瞳を覗き込み、それから眉根を寄せた。

「やっぱり……ひとりで地上に行ったって、ユメさんに聞いて、駆けつけて良かった」

少女が手を離すと、ルルノはマネキンのように力なく俯く。そこで少女は初めてハクスイに気づいたように立ち上がり、丁寧に頭

を下げた。

「あ、初めまして……あの、わたし、二二ノノと言いまして、妹です。その、ねえねえの」

「いや、まあ、なんとなくわかるよ……」

観察するまでもなく、彼女はルルノノによく似ていた。伸ばした金色の髪をひとつの大きな三つ編みにして縛っている。桁外れの機奨光を持っているようには見えなかったが、それでも十二分な美少女だ。身長は姉とはあまり変わらないようである。

年下の割には落ち着いている二二ノノは、足を内股気味に揃えて再び頭を下げてきた。

「唐突なお願いで申し訳ございませんが、その、姉のことは、内密にお願いします」

「内密って……この状態のこと、か？」

「はい、お願いします」

「いや、そりゃわざわざ言うようなことじゃねえし、全然構わねえんだけど……」

彼女の真剣な目に見つめられて、ハクスイは彼女に悪影響を及ぼさないように視線を外す。

「しかし、姉妹で彩光使、ってわけじゃないよな。姉が史上最年少の彩光使っつーんだから」

「ええ、違います。ついでにこの機方舟は知り合いの彩光使さんからの借り物で、わたしは渡航免状も持っていません。中学生ですし、自動操縦って便利ですよね」

「犯罪か！」

悪びれず語る二二ノノは、ハクスイの怒声も涼風程度にしか思っていないようだった。

「しかしねえねえを救うという大義の前では、それも霞みます」

この辺りで正統派な美少女の姉とはずいぶん違うなあ、とハクスイが思っていたところで、ニニノノは肅々と目を伏せた。

「このたびは、ねえねえがご迷惑をおかけしまして……ねえねえがひとりで地上に降りるだなんて、無茶な話だったんです」

「へ……？　だって、一人前の彩光使なんだろ？　ルノは」

ハクスイが戸惑うと、ニニノノは「それはそうなのですが」と前置きしてから続ける。

「ねえねえは、たまに、こうなっちゃうんです。ノリに乗っているときは敵なしなんです。痛いところを突かれたりすると、一気に弱っちゃうんです。打たれ弱くなるときがあるんです、ねえねえは優しすぎますから……あ、これは内緒なんです」

「聞いちまったけどな」

「他言無用でお願いします。だから、落ち込んだときには、その、軽く励ましてあげてください。そうすると、元気を取り戻しますから」

ルルノノの説明書を読み上げるような口調で語るニニノノに、ハクスイは「俺がするのは、気がひけるな……」と少女少女の例を思い出す。

「ね、ほら、ねえねえ、ファイト、ねえねえ、がんばれー」

「うっ……」

姉の手を両手で握り、ニニノノはつたない応援を繰り返す。彼女の口調はハクスイに向けられたものより、ずっと温かみを帯びていた。ハクスイは成り行きを見守ることにした。

「ちよつと疲れただけだね。ほら、誰も見ていないから、今は大丈夫だよ。でも少し休んだら、また、立ち上がる？　ね？」

「……あたしは、頑張れるかな…… 応援の女神さまが、まだ、微笑んでいてくれるかな……」

驚くべきことに、ルルノの瞳に輝きが戻りつつあった。

「応援の女神さまは、ねえねえだよ」

二二ノノは聖母のような微笑みで、そんなルルノの頭を撫でた。

「ねえねえの望むままに、世界は動くんだよ」

美少女姉妹の背景に、真っ白な百合の花が咲き誇って見えたのは、錯覚だろうか。

「べ、別にそんな、独裁者にはなりたくないけど……」

立ち直りかけたルルノの顔が引きつる。

「うん、ちょっと言い過ぎたよ。でも頑張って、ねえねえ。世の中には冥混沌に囚われて右も左も見えなくなっちゃっている人間がたくさんいるんだよ。ねえねえがへこたれていたら、その人たちを救ってあげられる天使は、ひとりもいなくなっちゃうんだよ」

「そうかな……」

信じきれない顔をしたルルノの手を取り、二二ノノは強く頷きながら断言する。

「そうだよ！」

「そっか……」

「うん、そう！」

ついには根負けしたかのように、ルルノも笑みをこぼす。

「そう、だね」

「うんうん」

そして、ルルノは立ち上がった。

「そっか！」

こうしてルルノは蘇った。完全復活だ。彼女の背後にキラキラ

キラーンと紅白の光が輪を描いて見えたのは、機奨光の影響によるものだろう。

「いやあ、こんなところで機奨光が切れちゃうとは予想外！ でももう大丈夫！ エンジェル平気！」

二二ノノはそんな姉を眩しそうに眺めながら、手を叩く。

「良かった、ねえねえ、元通りだね」

「えー……」

良かったのは間違いないのだが、ハクスイはなぜか釈然としなかった。世界にひとり取り残されたような気になり、本気で心配していた自分が恥ずかしかった。

「負けるな！ 自分に勝てー！」

「ねえねえ、頑張れー、可愛いー」

ルルノノと二二ノノは手を握り合いながら、ルルノノ号へと乗り込んでゆく。ちなみにこれはあとで聞いた話なのだが、彩光使の機方舟にも、バッテリーはついているようだ。それを使って帰れば良かったのだという。

〃

姉妹に手を引かれて機方舟に乗り込んだハクスイは、疲労感を覚えて座席に深く座り込む。

「濃い、一日だったな……」

ルルノノは二二ノノの乗ってきた借り物の機方舟を牽引して、天使たちは空に帰ってゆく。

「初めて地上に降りた感想は、どうかな、にーさん」

ハクスイの右隣に座っていたルルノノは、足を組み直しながら、落ち込んだことも忘れたような笑顔ではにかんでいた。左に座っていた二二ノノは、窓の外の文明の光に彩られた地上を見下ろしながら、ぼそりと水を差す。

「ねえねえが最後までしつかりしてたら、もつと良い思い出に残ったんでしょうけれどね」

「あははー、またまたー」

「そうだな……」

あながち冗談でもなかったが、ルルノノにバシバシと肩を叩かれながら、ハクスイは顎に手を当ててきょうを振り返る。クラス全員抜きから始まり、シュレエル先生の呼び出し、彩光使との出会い、それから初めての地上だ。さらに初めての機方舟、少年と少女の応援、悪魔との遭遇、落ち込んだルルノノと、二二ノノの犯罪行為。ハクスイは腕組みをして、総括する。

「大変だったけど、まあ、どれも学生じゃ滅多に体験できるもんじやねえからな……」

なによりも、彩光使の夢へと、ほんの少しだけ近づいたような気がしたのだ。それは機奨光がゼロのまま固定で、一切の手応えのない自分の人生において、限りなく小さな、そして非常に大きな一歩であるように思えた。運転を自動操縦に任せて、二二ノノとふたりで窓の外の景色をのぞき込んでいるルルノノに、ハクスイはわずかに頭を下げた。

「ありがとな、ルノ」

「えっ、なにがなにが？」

「いや、こっちの話だよ。明日からもまた、よろしくな、彩光使さん」

そうぶっきらぼうにつぶやくと、ルルノは満面の笑みを浮かべて、うなずいた。

「うん！」

人間が言う“天使のような笑顔”とは、このことかと、ハクスイは思った。

第一話 - 8

ルルノノ、二二ノノとともに天ツ雲に帰った頃には、もう日も暮れていた。

それぞれ機方舟を置いてくるというらしいので、ハクスイだけが先に学校に降ろされる。とりあえずシュレエルに挨拶をしてから、ハクスイはひとりがらんとした校内を歩く。

教室に寄って鞆を取ってくると、下駄箱を出てすぐのところ、ルルノノが校門に寄りかかりながら待っていてくれた。

「にーさん、あの……もしよかったら、い、一緒に帰らないかな？」
夕日に照らされてか、ルルノノの頬はわずかに朱が差しているように見えた。

「あ、ああ？ いいぞ」

ふたりは口数少なく、帰り道を辿る。ルルノノの家がどこにあるのかは知らなかったが、とりあえずは同じ方向に向かうようだ。

「……」

日の落ちた天ツ雲の並木道を、自動点灯の機奨光灯が照らしている。

大小の雲が連なった天ツ雲には、時々穴が開いてある場所もあり、そういったところは細い橋で繋がれている。飛べないハクスイにとっては、落ちた瞬間に下界へ真っ逆さまのデンジャラスゾーンだったりもする。

肩を並べて歩いていると、珍しく静かだったルルノノが、伏し目がちに尋ねてきた。

「きよ、きょうは楽しかった、かな？ にーさん」

「ああ、まあ……楽しかったってより、なんだろうな、色々とびつ

くりしたよ」

「そ、そっか、まあそうだよ。でも、いろんなことを学びながら、天使は大きくなっていくんだよね……！」

いくらほぼ初対面とはいえ、さすがに鈍いハクスイでも気づく。

ハクスイは立ち止まって、ルルノノに振り返る。

「なにか俺に言いたいことがあるんじゃないか？」

「えっ！」

ルルノノは胸を押さえながら後退りする。目をぎゅっと瞑って首を振る。

「す、鋭いよにーさん……さすが、さすがだよ……さすがのエンジンだよ……」

「……まあ、俺だって馬鹿じゃないからな」

天ツ雲ではいたるところに花が咲いている。天使の放つ機奨光が勝手に養分となり、水も土もないのに、四季問わず様々な花を育ててしまうらしい。色とりどりに並んだチューリップを眺めながらハクスイが待っていると、ルルノノは突如叫び出す。

「う、うつつ、勇氣！ 勇氣ー！ お願いゆっきー！」

「え？ な、なんだ？」

「心の中の勇氣さんに頼んだの！ 力を貸して、って！」

「そ、そうか」

到底、論理的ではない答えが返ってきたが、ハクスイは納得する。とにかく、なにかをしようとしているのだろう。

「あ、あのさ、悩みと言ったらさ、人の悩み事を聞いて解決するのも、機奨光の良い増強に繋がるんだよ。外界で人間を助けてくる、みたいなものでさ……」

「へえー、お前が言うならそうなんだろうな」

「だ、だからさ……だから、だからただけとさっ」

ルルノノは焦ったような口調で、ハクスイの前に拳を胸元で握りながら迫ってくる。

「い、いつこ、やってみないかな、にーさん！」

「突然だな……まあ、それはいいんだが、誰の相談を受ければいいんだ？ 誰か、知り合いで悩んでいるやつでもいるのか？」

「あ……あたし、とか」

「……ん？」

〃

ここはハクスイの部屋である。茶の置かれたテーブルを挟んで、ハクスイとルルノノが向かい合っていた。

「……それで、俺に？」

「……う、うん」

ぎこちなくうなづくルルノノは、なにやら思いつめたような表情で正座をしていた。

（そら、ほとんど初対面の俺に相談するくらいなんだから、相当切羽詰まってるだろうけどさ）

ハクスイの部屋は清潔に整えられているというよりも、単純に物が少なかつた。趣味も興味もない男の、つまらない部屋だと開き直り気味に自覚している。

それはそうと、ハクスイは腕組みをしながら、慎重に尋ねる。

「あのさ、他にもっと、人材はいなかったのか？」

「い、いないよ」

「即答かよ」

ンなわけねえだろ、と思う。なにを買いかぶられているのかもわからない。

「いや、だってさ、俺だぞ？ それよりもっと、彩光使の同僚とかあるいは先生とか、あの妹さんとか、誰だって俺よりはマシじゃねえか？」

「だってこんなこと……にーさん以外には、その、恥ずかしくて、話せないから……」

縮こまって首を振りながら、ルルノノは今までに見たことがないほど、赤面していた。耳を通り越して、うなじの辺りまで真っ赤になっている。白い肌だけに、その紅色が大きく目立っていた。

「恥ずかしい、って……緊張しちゃうじゃねえか、オイ」

ハクスイもまた、照れ隠しにそんなことをつぶやいてしまう。

なにを話されるのだろうかと待ち構えていると、ルルノノはようやく口を開いた。

「あ、あのね……お話してみたら、にーさんだって、決めてて……ほら、にーさんって、物怖じしないでしょ。初めて地上に行ったって、平然としてたし……多分、笑わないで聞いてくれるって、そう思うから……その、無茶な、お願いかも、しれないんだけど……」

「俺に、お願い、か」

少なくとも、下界に降りたときに平気そうだったというのは、彼女にはそう見えたただけだ。自分はいっぱいっばいで、慌てる暇すらなかったのだ。

本当は今だって、ルルノノの『お願い』とやらが自分の手に余るであろうことはわかっているのだ。だがそれでも、職務とは言え、こんな自分に一生懸命尽くしてくれているルルノノの信頼を裏切りたくはないと思う。

ルルノノは、こんな自分の目を見て話してくれる初めての天使だ

から。

スカートをぎゅっと握って、恥ずかしさに耐えているような顔を
しているルルノノに、ハクスイは「構わねえよ」とうなずいた。

「……ルノには、世話になりっぱなしだし、これからもうだろう
からな。俺にできることがあるなら、なんなりと言ってくれよ」

その紛れもない本心からの言葉に、俯いていたルルノノは嬉しそ
うに白い歯を見せた。

桃色に染まった頬を上げて、熱のこもった潤んだ視線でハクスイ
を見つめてくる。

「そう言ってくれと、すごい、嬉しい、あのさ」
ルルノノは手を合わせて、頭を下げた。

「お願い、にーさん！ あたしを、どうか、DMにしてくださいっ
！」

「……………あ？」

学校での衝撃、再び。

第一話・9「はじめての下界、はじめての出会い」

じつとりと汗ばんでしまうような長く辛い沈黙の後だ。まるでせきを切ったような勢いで、ルルノノが手をわたわたと動かしながらまくし立てた。

「べ、別に、そういう変な意味じゃなくて！ ほら、あたしってやつぱり落ち込んだじゃうわけで、今のところはたまたま上手くいって彩光使のみんなの前で機奨光がなくなったことはないけど、でもいつ悪魔に責められてまた暗くなっちゃうかわからないから、その前にどうにかして弱点を克服したいと思っているわけで、でも悪口に對して強くなったり心を鍛えるのってどうすればいいのかなって悩んだときに、下界でSとかMとかそういう話を聞いてああこれだってガッツポーズして、だってほらDMにもしなれたらどんな嫌なことを言われても気持ちイイって感じるようになるらしいから、それってほらすっごいエンジェルハッピーで一石二鳥でしょ！ ね！ ね！ ねっ！」

「あ、ああ、と、とりあえず座れ、な？」

テーブルを乗り越えてこちらの顔をのぞき込んでいたルルノノに、ハクスイは落ち着くよう諭す。身を引いてくれたルルノノの表情を伺いながら、ハクスイは頭をかく。

「ンでも、DMって、お前な……」

「あ、もしかして、にーさんってば、それがどんなものか知らなかったり、する……？」

「マゾヒストの略だろ？ 知っているけど……それって、アレだろ、痛いことされると喜んだり、人格を否定されると興奮するっていう……変態、だろ？」

「ち、違うよおっ！」

ルルノノは顔を真っ赤にしながら、強くテーブルを叩いた。湯のみがふたつ跳ねる。

「下界ではそうかもしれないけど、あたしにとっては悪魔の攻撃に対する完璧な防御法だよ！ だって傷つくこともなくて、その上楽しいんだから、ほら、無敵なんだよ！」

「いや、まあ、理屈じゃそうなのかもしれないけどさ……」

「だって、にーさんも、見た、でしょう……？」

ルルノノはそこで急に語意を弱めて、膝の上に手を戻した。

「あたしが、悪魔の囁きをまともに受けて……それで、行動不能になっちゃった場面を……あんなの、あのままじゃいけないと言わざるをえないよ……」

「まあ、そうだな……」

きょうはハクスイがいたからいいものを、あれがたったひとりの状況だったら、今頃ルルノノは大変な目に合っていただろう。最悪、殺されてしまうことすらあり得るのだ。シュレエルではないが、そんなことが起こったら天ツ雲フィノーノの損失に違いない。

ルルノノのことを考えれば——それが彼女のためになるのなら、諸手を上げて協力するべきだ。

（だから、って……ドM？ そんな解決策か……？ まあ他に心を強くする手段でどんなのがあるかと聞かれたら、すぐには出てこねえけどさ……）

「だ、だから、にーさん、お願いっ、あたしを、立派なドMに……」

「つか、一番の疑問はだな……」

ハクスイは茶をすすって、仏頂面になる。

「……なんでさ、お前、俺ならルノを立派なドMにできるだろうって、思いこんでんだよ」

「えっ、だって」

ルルノノにしてみれば、それは意外でもなんでもないことのようにだった。

「にーさんだよ！ できるに決まっているって！ むしろにーさんにできなきゃ、天ツ雲で誰ひとりとしてできないよ！」

「なんでだ！？」

「一目見たときに、ピンとしたんだもん！ あ、この人は心の底から、ドSだ、って！ ほら、目を、目を見ればわかるよ！ 誰だってわからざるをえないよ！」

「お前、そんな風に俺を見ていたのかよ……」

さすがに心外だ。できるわけがない、と思う。

「いや、つーかな、ルノ……」

「……」

ルルノノはじーっとこちらを見つめている。きらきらとした瞳がハクスイを捉えて放さない。どこから「おねがいっ、にーさん……」などと、小さなささやきのような声が漏れてきた。エフェクトを発生させるような機奨光の効果だろうが、それはさすがに反則だと思った。

「あ、あのな、お前……」

大体、ドSとドMの関係というのは、そういうことではないか。

健全な男子高校生が美少女のそんなお願いを断るのが、どれほど難しいことか。ハクスイは健全ではなかったが、れっきとした男子高校生なのだ。

「ど、どうしても……嫌……?」

ルルノの瞳にじわつと涙が浮かんでくる。ふたりの周囲の空間が滲み、まるでそこは海の底のように光が屈折して、綺麗な乱反射を描いた。

ハクスイは思わず顔に手を当てた。振り絞るようにしてつぶやく。
「……一日、時間をくれ」

「だ、だめだよ!」

「なんでだ!？」

「だ、だってそんなの、あたし、きょう寝れなくなっちゃうもん!」
「俺だって寝れねーよ!」

真っ赤な顔を突き合わせて怒鳴る。それからハクスイは大きなため息をついた。

「いや、つーか、まあ……くそう……」

言いたいことは空に浮かぶ雲の数ほどにあったが、ルルノが固く信じている以上、ハクスイにはどうしようもなかった。ハクスイは諦めたように首を振る。

「……他にいねえつーなら、まあ、やるよ、やってやるよ。ルノの助けになるなら、な!」

もう半ばヤケだった。

「に、にーさあゝん……」

はぐれた飼い主を見つけた子犬のような潤んだ瞳でこちらを見つめてくるルルノに、ハクスイは小さく溜め息をつく。もういい。決めたならもう、あとは徹底的にやるしかない。

「まずは試してみつか、ルノ。とりあえず、俺なりのやり方で虐めりゃいいんだろ……」

「わあい、エンジェル嬉しい!」

虐められると聞いて満面の笑みで手を叩いているこの時点で、ルノノはもう一人前のドMなのではないかとハクスイは思ったが、それはともかくとして続ける。

「それをどう受け止めるかは、お前次第だよ。嫌だったら、辞めりやいいしな。気に入ったんだったら、俺に続けさせりやいい。選ぶのはルノ、お前ってことにするからな」

「うん、それでいいよ！ 全然いいよ！ ありがとうにーさん！」

「あとは……そうだな、よくわかんねえから、上手にだとか、そういうのは期待すんなよ」

「あ、で、でも！ い、一応にーさんは一生悪口禁止だから、そういう心に刺さるのはナシでね！ あたし泣いちゃうんだから！」

「なんだと」

「い、痛いのかは、ちょっとは平気だけど、でもなるべく勘弁してほしいな……も、もちろん、これは、あの、言うまでもないかもしれないけど、え、え、えっちなのは、絶対にだめなんだから！

あたしまだ清楚純真な乙女なんだからね！ あ、あとは、まだまだ他にも——」

「……注文の多いドMなこって……」

第二話・1

「お・き・て」

耳に小鳥のさえずりのような声が注がれて、ハクスイはくすぐったそうに身じろぎをした。

機方舟に乗っているような感覚は、揺さぶられてるからだとわかった。さらに腰の辺りに、ちょうど人ひとり分ぐらいだろうか、妙な重量感がある。ハクスイは湯船から出るように、ゆっくりと目覚める。部屋には朝日が差し込んでいた。涙目をこすってから腕を伸ばす。

「……ん……ミスカ、か……なんだ、きょうは、やけに早いな……」
と、目を開けて、ハクスイは思考回路を停止する。

「おはよつ、えへへ、にーさんっ」

鼻と鼻が接触してしまいそうなほどの目の前に、ルルノノのひまわりのような笑顔があった。

「……」

どうやらルルノノはハクスイの上に女の子座りでまたがっているようだ。スカートから覗く素足の白さが、明光に反射してまぶしかった。念のために確認をすると、確かにここは物の少ないハクスイの部屋であった。もちろん、昨晚ルルノノと別れて帰ってからの記憶もすっかりと残っていた。

「え、えへ、起こしに、来たよっ」

照れたように微笑むルルノノは、制服姿だった。そうしてなぜか

頭の上で手を丸めた猫のようなポーズを取って、体をくねらせていた。

なにも言わないハクスイにじつと見つめられて、ルルノノは徐々にほつぺたを赤く染めてゆく。自分がなにかおかしいことをしている自覚があるのかもしれない。金色の髪がふわりと広がり、逆光に溶けて、琥珀のようにきらめいていた。

「あ、あのね……ほ、ほら、にーさん、し、幸せ……かな？」

まるで言い訳するように、ルルノノは上目遣いで問いかけてくる。「こ、こういうの、良いつて、その、トモダチに聞いてね……聞いたからには、ほら、やらざるをえないから。ね、ど、どうかな、ちょ、ちよつとは機奨光レベル、上昇したような感触があるかなっ？」ハクスイは目を閉じて、かぶりを振りながら、うめく。

「……なんてことだ……」

「な、なにさその反応っ」

態度一変、顔を真っ赤にしたルルノノがハクスイの首根っこを掴む。

「無断侵入者がいる……彩光使を呼ばなければ……」

「彩光使ならここにいて！ ていうか冷静すぎるよにーさん！ 他になにかないの！」

「重い」

「お、重くないよ！ 重いわけがないと言わざるをえないよ！ むしろ最近ではエンジェル軽くなったほうなんだからね！」

ルルノノはスカートの裾を翻しながら、ハクスイの上で駄々っ子のように手を振り回す。

「だ、大体おかしいよ！ 女の子が寝起きにベッドの上にいたら、もつと桃色の反応をするべきだと言わざるをえないよ！ それが真

つ当な天使のリアクションだって聞いたんだから！」

「俺にダメ出しされてもな……」

仰向けのまま、ハクスイはバンザイをした。

それからふと思いついて、ハクスイは前髪をかきあげながらルルノノに尋ねる。

「なあ、ルノ。今のお前は、彩光使としてのルノか？ それともただの女子か？」

「え？ あ、ど、どうかな。つつい来ちゃったのは、彩光使としての使命感からだけど、まだ学校も始まってないし……」

「なるほど」

ハクスイは身を起こす。ルルノノとの顔の距離は、息がかかるほどに近い。ハクスイはフローリングの床を指さしながらルルノノに言いつける。

「なら、どけ」

「うつ……」

ハクスイの瞳に冷たい光が宿ったのを見て、顔を赤らめながらもルルノノは素直にそれに従った。その姿を見て、ハクスイは右手を彼女に差し出す。

「ルノ、お手」

「なんで!？」

聞き返しながらも、ルルノノは小さな手のひらを乗せてきた。右手で髪をいじり回しながら、「うーうー」とうなっている。相当恥ずかしいのだろう。

（いや、それは俺もだけだな……）

S M 契約を結んだのが、昨日のことだ。

それからハクスイとルルノノは、いくつかの取り決めを定めていた。

ルルノノはハクスイが彩光使になれるよう、全面的に協力する。

同時に、ふたりきりのときにはハクスイもまた、ルルノノがドMになれるよう尽力する、ということだ。

『こ、これは、にーさんが彩光使になるために、そ、そう！ 自信をつけさせるためっていう目的もあるんだからね！ そこを勘違いしちゃだめだからね！』

と、ルルノノは言っていた。完全に建前である。

「ほれ、おかわり」

「う、うつつうつ……」

今度は反対側の手を差し伸べてくるルルノノに、ハクスイは神妙な顔で首を傾げる。ルルノノの所作は愛らしいものの、しっくりこない。

「なんかちげえな、これ……」

「え、SとかMとか、あんまり関係ないよねっ……」

ルルノノがハクスイに犬扱いされることに対しては、あまり抵抗がなさそうであった。互いのこそばゆいシチュエーションにこそ、恥ずかしがっているくらいもある。

「そうか……基本的には、ルノが嫌なことをしないとイケないんだな」

「な、なんだろ……？ す、スカートめくり、とか……？」

「高校生にもなつてやることかよ」

こわごわとこちらを見つめながらおしりを押さえるルルノノを冷ややかに眺めるハクスイ。その視線が壁にかかった時計を撫でる。もうそろそろ時間に余裕がなくなってくる頃だ。

「……とりあえず、次は学校から帰ってきてからだな。色々試してみろしかねえだろ。俺もルルノノも納得できるような、そんな感じのをさ」

「う、うん……」

ハクスイが立ち上がって伸びをすると、その裾をルルノノが小さく引つ張ってくる。

「あ、あの、にーさん……なんか、ごめんね、こんな、面倒かけちゃって……」

「ああ？ お前がそれを言うのかよ」

「えっ？」

ハクスイは頭をかきながら、ルルノノから視線を外す。

「お前だって、すまねえな。こんな0ポジの男に付き合わせちまつてよ。そっちにはなんにもメリットがねえのにさ。鬱陶しいだろ」

「そっ、そんなことないよ！」

両手を握り固めて真剣に否定してくるルルノノの頭に、ハクスイはポン、と手を置いた。

「サンキューな。だから、そういうことはもう、言いつこなしにしようぜ。俺は“やってみる”って決めたんだからさ」

「あっ」

ルルノノは慌てて頭を押さえる。それからしばらくハクスイを見つめていたかと思うと、顔を綻ばせた。目を線のように細めて、彼女は笑う。

「うんっ、ありがと、にーさん！」

〃

ルルノノを部屋の外に出して着替えを済ませたところで、ハクスイは朝に弱いミズ力を起こす。あの騒ぎでも目を覚まさなかったのだから、大物だ。

玄関に待たせておいたルルノノとともに家から出ると、隣の部屋からちようどヴィエが出てきたのが見えた。思わずハクスイは間の悪さを呪う。

(……いや、別に、悪いことはなんにもしてねえんだけどさ……) ハクスイたちが住んでいるのは、中央庁から与えられた共同住宅だ。自分の部屋のノブに鍵を差し込もうとするヴィエが振り返ってきて、朝から不幸せそうな顔で挨拶をしてくる。

「あら、ハクスイ……おはようなの」

「あ、ああ……」

ひきつった顔で返事をするハクスイの後ろから、美少女の笑顔でルルノノが現れた。ヴィエはぼろつと鍵を手のひらからこぼす。

「……あら、まあ」

ヴィエの切れ長の目が細められた。ハクスイはなぜだか不穏な気配を感じてしまう。錯覚なのだろうが、まるでカラスに睨まれているような……

「いや……これはな、ヴィエ……」

第二話 - 2

普段なら勘違いも全て放ってしまえばいいものだが、今度の相手は彩光使のルルノだ。自分と噂されたのでは、どんな不名誉な風評が立つてしまうかわからない。ハクスイが誤解を解く言葉を考えていたところで、ヴィエが先につぶやいた。

「……ハクスイの担当の彩光使さんって、るーちゃんだったんだ」
「あ、ヴィエちゃん、やつほー！　なんだ、隣ってヴィエちゃんの家だったんだねー」

「ああ？」

ハクスイを通り越して、ヴィエとルルノが挨拶を交わす。ハクスイはヴィエの落とした鍵を拾い、彼女に手渡す。

「えーっと……お前ら、知り合いなのか？」

「親友だよ！　ね！　えへへ！」

ルルノが微笑みかけると、ヴィエも小さくうなずいた。

「う、うん……そう、お友達……最近なかなか会えなかったけれど、仲良しなのよ」

「でも俺、お前たちが並んで喋っているところ、見たことねえぞ？」

ヴィエは顔を伏せて自らの身体を抱く。

「だって、るーちゃんとわたしが学校で話しているところが、他の誰かに見られたら、るーちゃんの株が下がっちゃうから……だから、ずっと、学校では我慢してたのに……」

「そんなこと思ってたんだヴィエちゃん！　確かに避けられている

ような気がしたけど！」

「無駄すぎるだろ、その努力……」

外に出ると、まるでルルノノの笑顔のように突き抜けた蒼い空が広がっていた。太陽光線が眩しいほどに降り注いでいる。学校へと向かいながら、ヴィエとルルノノは互いの近況などを語り合っていた。

「でも、せつかくのーちゃんの頑張りを否定するのは申し訳ないけれど」

ヴィエは顔を曇らせる。

「ハクスイの機奨光を上昇させるのなんて、女神さまでも不可能だと思う」

「え、ど、どうしてさ！ 無理じゃないよ、きっとできるよ！」

「本当だよ。いきなりなに言ってくるんだよ、この三白眼女は……」

「だって、ないものはないのよ」

「その胸のようにな」

「……」

「……いてえよ、無言で蹴るなよ。先に言ったのはヴィエだろ」

「鬱死してしまえばいいの」

「俺に言つとシャレにならねえな、それ……ん？」

そこでハクスイたちはルルノノが立ち止まっていることに気づく。振り返ると、ルルノノは肩をぶるぶると震わせて、俯いていた。長い前髪の隙間から目は見えない。

「どうした、ルノ……」

問いかけたその瞬間、金色の目を光らせながらルルノノが腕を交

差しながら顔を挙げた。

「ダメだよ！ ダメ！ エンジェルタブー！」

ルルノノは指を鳴らし、警告いち、と言ったふうにこちらを指さしてくる。

「あのね、そんなんじゃないだよ！ 悪口言ったびに、機奨光が減っちゃうよ！」

突然のいちゃもんに、ハクスイとヴィエはどちらも戸惑う。

「悪口、っていうか」

「いつもの……？ なにかしら、挨拶みたいなもの？」

機奨光を燃やし、メラメラという炎じみた光を放ちながら、ルルノノがピシヤリと言い放つ。

「でもダメ！ 退廃的な発言はよくないんだよ！ 機奨光が逃げちゃうんだからね！ ダイエットしようとしている子が、夜にラーメンを食べるみたいなものだよ！」

「身近な例えだな、だめだぞルノ」

「うん、精一杯我慢しているんだからね、偉いでしょ！ って違うよ！ これから、にーさんは悪口禁止！ 一生禁止！ 死ぬまで禁止！ むしろ事あるごとに、人を全力で褒めよう！」

「なんと……」

「無茶なの。ハクスイなんかが、絶対無理なの」

ヴィエこそが、とんでもできないとばかりに手のひらを扇がせる。

しかしその一方で、ハクスイは手を顎に当てて考え込んでいた。

「……しかし、彩光使の言うことだもんな……間違ってはいねえんだろうし……よし、わかった。すぐにできるかどうかはわからないが、なんとか、心がける」

「その意気その意気！ あたしもバリバリ応援するから！」

「……へえ」

そのとき、ヴィエの目が光ったような気がした。ハクスイは背筋に悪寒を感じてしまう。

「大変ね、ハクスイ。でも、彩光使になるために、頑張って」

「お、おう」

つか、お前も目指しているんじゃないのかよ、とハクスイは言いたげだ。

「そんなブラックホールみたいな目をした限りなく悪魔に近いハクスイが、どうにかしてもがく姿を、見守っていてあげるから。アリの行列を観察するような気持ちで、ね」

ヴィエのなにかのスイッチが入ってしまったようだ。

「デメエな……」

拳を握り固めるハクスイに、ルルノの視線が矢のような鋭さで刺さる。

「悪口禁止だよ、にーさん」

「……ああ、わかってる」

「あら、わたしは協力してあげているの。ハクスイが穏やかな心を持っていられるように」

そんなうわべだけの発言を、しかしルルノは有り余る善良さで前向きに捉えてしまった。

「神様の試練みたいだね！ 良かったね、にーさん！ これに耐え抜けば、強靱な心が手に入ると言わざるをえないよ！ ほら、ヴィエちゃんに感謝の念！」

「……ありがとよ、優しいな、ヴィエは」

ヴィエは手の甲を自分の口元に寄せて、淑女のような高潔な仕草でうつすら微笑む。

「どういたしまして、ハクスイ。でもあなたに褒められると、全身

に怖気が走りまわって、とてもじゃないけれど安らぎとは無縁な気持ちになるの。気持ち悪くて、今すぐ病院に駆け込みたくなるんだけど、そのことについて自分でどう思っているのかお聞かせ願いたいの」

「あんま調子に乗んなよヴィエ——ってうえええい！」

ハクスイの眼前を輝く槍が貫いていた。

「リラックス、リラックス、にーさん。何事にも動じず、寛容な心を持つんだよ」

「お前の光輝武装を突きつけられて、落ち着いていられるか！」

ルルノが両手で構えていたのは、電火を発する『光の戦斧』^{ハルバード}だ。悪魔に対抗するための装備だが、天使にとっても無害というわけではない。地面が抉れていたりする。

「そうなのよ、ハクスイ。そんなにカッカしないで」

「なんかお前は今まで見たこともないくらい楽しそうだな……」

罵られて脱力していたハクスイも、普段はクールなヴィエが童女のように目を細めて笑う姿を見て、「まあいいか……」と若干溜飲を下げた。そんなヴィエの白い肌から、光がこぼれているような気がする。というよりも、事実、機奨光が薄く放出されていた。

「あつ、ホントだ！」

そこで光輝武装をしまったルルノがポケットから取り出した機械を見て、歓声を上げた。

「あ、なんだ？」

「ヴィエちゃんの機奨光、上がっているよ！ ほらこれ、昨日の夜に借りてきた、新品の携帯型機奨光測定マシンなんだけどさ」

「えっ」

ヴィエもまた、その電卓のような装置を覗き込む。数値を見ると、

機奨光の反応は確かに上昇傾向を示していた。もともと32だった
ヴィエの値が34ポジまで伸びて、さらに上がり続けている。

「ホント……」

ヴィエが胸を抱いて、ハクスイを見つめる。その目がわずかに潤
んでいた。

「良かった、わたし……良かった、これからも、ハクスイを罵倒し
続ける……っ」

「頑張つて、ヴィエちゃん！」

「……」

手を組む女性陣に、ハクスイが密かにため息をついていると、そ
の肩をルルノノに叩かれた。

「そんな顔をしなくても、大丈夫大丈夫！ にーさんも機奨光が溢
れてきたら、どんな悪口を言われても気にならないからさ！」

「……そう、なのかね」

確かに罵詈雑言を武器にする悪魔と戦う以上、彩光使には寛容な
心が求められるのかも知れない。しかしハクスイが思い出していた
のは、ネガティブ化したルルノノである。フェンスの陰にうずくま
って体育座りを続けていたルルノノの暗い顔が、彼の脳裏をよぎっ
ていたのだった。

第二話 - 3

学校が始まり、午前の機奨光学の授業中、どこにでもある一クラス
の授業風景……のはずだった。

しかしハクスイは、彩光使ルルノノの一度決めたらやり遂げなくては
気が済まないという、義理堅さを知らなかったのだ。

「えーそれじゃ、次を答えてもらおうか……えーと、ハクスイくん
……に頼もうかと思うが」
「はい」

一番後ろの窓側の席に座るハクスイが返事をすると同時に、横手
から「にーさん頑張つてっ」の声援が飛ぶ。もう明らかにおかしい
のだが、ルルノノが自分のクラスから椅子だけ持ってきて、ハクス
イと並んで座っているのである。まるでカップルシートのようなのだ。

さすがに、言及しないわけにはいかないのだろう、受け持ちは機
奨光学のシュレエルが顔をひきつらせながら尋ねる。

「その前に……どうして、ここにいらっしゃるんだ、ルルノノくん……」

「えっ！」

机に頬杖をつき、ロマンチックな夜景を見つめるような潤んだ瞳
でハクスイの横顔を見守っていたルルノノが、信じられないといっ
た調子で振り返った。

「あたしは一彩光使として任務の最中なんです！ にーさんを任意
観察し、機奨光の育成に励んでいるんです！ シュレエル先生にも

邪魔されたら困ると言わざるをえません！」

どんっ、とハクスイの机を叩くと、シュレエルは冷や汗を流した。

「そ、そうか……な、なるほど……よく、わかった……いや、彩光使の言うことなら、聞くとも……しかし、ハクスイは、それでいいのか……そんな、横でずっと、ずっとか？」

「朝からずっとなの」

代わりに答えたのは、不満そうにシャーペンを唇の下に押し当てていたヴィエだった。

「……どちらかと言えば、さすがに、周りのわたしたちのほうが気になりますの」

確かに、クラスに彩光使が居座っているというプレッシャーは凄まじいものがあつた。クラスが未だかつてないほどに静まり返っているのは、そういう理由なのだ。

「だ、だそうだぞ、ルルノくん」

「全力で申し訳ないと思っているね！ エンジェルご勘弁！」

「思っではいるのか……」

シュレエルは職務を放棄したくなる。それで話は終わったとばかりに、ルルノはハクスイに向き直り、はちみつが注がれているような甘い声色ではやし立てる。

「ほら、にーさん頑張つて！ みんなに良いところを見せるチャンスだよ！ 正解して、みんなに頭良いって思われると、それが自信にも繋がるからね！ ふふっ、全力で頑張つて！」

「毎回こんなことを横で言われ続けているんだろ？ 辛くないのか？」

沈黙を保ったまま、ハクスイは教科書を持って静かに立ち上がる。

「……『機奨光は、人々の希望によって空に立ち上り、天使の力となる』です」

ハクスイが再び無言で着席すると、なにもおかしいことはしていないはずなのに、教室には妙な雰囲気立ち込める。そんな中、授業を進めようとシュレエルがうなずいた。

「……正解だ」

その直後、拍手が鳴り響いた。ルルノノのひとりスタンディングオベーションだ。

「す、すごいやにーさん！ そんなに難しい問題！ さすがだよにーさん、ブラボー、すごいよ、カッコイイ！ エンジェル素敵だよにーさん！」

「……ずっとこんな調子なのか？」

「そうです」

シュレエルに答えるヴィエは、やはり不機嫌そうだった。

「本当に辛くないのかハクスイ。なにか、弱みを握られていたりしないのか？」

「なにを心配しているんすか」

ハクスイは透き通るような穏やかな顔で、まぶたを閉じる。

「……俺は頼んでいる立場ですから、感謝こそすれ、なにひとつ嫌な思いはしていません」

「は、ハクスイ！」

シュレエルが目を剥いた。

「どうしたんだお前、たった一日でその変わり具合は！ なにかあったんだハクスイ！」

ルルノノにじつと見られているハクスイは、まるで喉元に剣を突きつけられているような気持ちだった。あながち比喩でもない。

「ただ、俺は全ての人に、感謝の念を抱いているだけです」

「……そんなめちゃくちゃ暗い目で言われても、先生も反応に困るの」

「ふふふふつ、でもね、先生、これを見てよ！」

叫びながら立ち上がるルルノ。もはや学級崩壊の有様であったが、その手に握られていたのは、登校途中で披露したあの簡易機奨光測定器であった。

「にーさんの、ほら、この、メーター！」

ルルノはハクスイの頬に測定器をぐいぐい押しつけて、嬉しそうにめり込ませる。その蛮勇はともかく、誰もが値には興味をそそられたようだ。ハクスイとヴィエとシュレエルと、さらにクラス中の視線が集中する。

「ごくわずか、ほんのちよっぴりだが、なんと、測定器が反応しているのである。」

『——なっ！』

ルルノを除く、クラス全体がひとつになった瞬間であった。ハクスイもまた、驚きに目を見張る。

「俺に……機奨光が……？」

ルルノは鬼の首を取ったかのように、あるいは伝説の剣を抜いた勇者のように、誇り高い笑顔で測定器を振り回す。

「2！ にだよ！ ツー！ にーさんにね、2の機奨光が芽生えているんだよ！ 天使にはちっぴけな機奨光だけど、にーさんにはあまりにも大きすぎる一歩だと思わないかな！」

クラスメイトまでもざわめく中、ハクスイはひとりで自分の手のひらを見つめていた。

「……2、か……」

その口元がわずかにほころんでいたことに気づいたのは、ヴィエだけだった。

第二話 - 4

彩光使養成学校であるフィノーノ高校が、他の高校と違っているところは、大きく分けてふたつある。

まず第一に、彩光使としての技能を習得するべく、武術、機奨光による光輝武装、あるいは上位学年にもなると、機方舟の操縦方法や、光導輪による専門技術を学ぶことができる点。

さらにもうひとつは、天使の社会としては珍しい競争制度を採用しているところにあり、これには未熟な生徒を彩光使にすることによって、悪魔による犠牲が増加することを防ぐ役割があった。そのため、彩光使になれるのは学校を卒業しても直、狭き門である。

とはいえ、生徒たちの意識はさほど変わらない。昼休みは嬉しいものだし、お昼ごはんを学食で食べる時間は幸せなのだった。

混雑するプールのような人のひしめく食堂にて、なぜかその周囲だけはやけに風通しの良い状況になっているハクスイの前に座るヴィエが、納得いかないとはかりに首を傾げていた。

「わたしはともかく……まさか、ハクスイにまで、本当に効果があるなんて……」

「俺も未だに信じられない」

カレーのライスとルーをひたすらにかき混ぜる動作を繰り返しながら、ハクスイはどこか心ここにあらずといった感じた。これが夢かも知れないと疑っているのだろう。

「なんつっても、ずっと諦めてたことだしな……それを叶えてくれたのは、正直、どれだけ感謝しても、足りねーっつーか……」

「……るーちゃん、ね……」

きつねうどんの麺を箸で持ち上げたまま、ヴィエは視線を俯かせる。そうこうしていると、混雑の波間をすりすりとは抜けながら、話題の主が戦果を手に帰ってくる。

「おまたせー！」

ルルノノはサラダ冷麺を乗せた盆を手に、颯爽とヴィエの隣の席につく。

「いやあ、あたしの列は混んでてさー、やっぱり夏はこれだよねー！」

「そついや、下界はもう夏だっけか？　うちは一年中制服変わらねえから、たまに忘れるよな」

「上にいると季節感ないものねえ……たまに積乱雲の中に入っちゃって、大雨が降るときに遭遇するくらいかしら……」

「太陽が普段よりご機嫌にペカペカーってして見えたりしない？」
「しねえなあ」

ハクスイが否定すると、ルルノノは「そっかなー」とつぶやきながら割り箸をペキンと割った。ハクスイはヴィエが制服のポケットから小さな単語帳を取り出して、めくっていることに気づく。

「それ、シュレエル先生の宿題か？　こんなときにまでかよ、大変だな」

「そう、質より量の、ね。普通にやったんじゃ終わらないから、休みナシよ、もう。あれってあながち冗談じゃなかったと思うの」

「何の話？」

ハクスイが代わりに事情を説明すると、ルルノノは大層な勢いで

うなずいていた。

「すっごいね、ヴィエちゃんも、頑張っているんだね！」

「うん、まあ、ね……実っていない努力だけどね……」

「一言付け加えないと気が済まないのかお前は」

「まあ、どうせ家にいても暇だし……わたしって趣味もなんにもないから……」

「暗い、暗いよヴィエちゃん！」

「何が書いてあるんだ？」

「見る？ 女神さまの語録なの」

ハクスイが受け取ってめくると、見出しには女神ヴィルシアの項目、と書いてあった。

「ヴィルシアさまって、ああ、お前の母さんか」

「ええ、雪と美の女神なのよ」

「力ある言葉を読み上げて、自信を高めよう、か……なに……『美意識を意識』、『キレイが勝ち』、『センスを磨いて、自分力を高めよう』、『女子力アップは機奨光アップ』、『スイーツは頑張った自分へのご褒美』……ルノ、これ分かるか？」

「うーん……未熟なあたしには、まだ難しいと言わざるをえないかな……！」

「なんか、すげえな。一種独特っつーか、その一族じゃねえと理解できない領域っつーか」

「……人のママを、バカにしないでくれる？」

ヴィエはハクスイから単語帳を奪い返すと、頬を膨らませた。

「あ、そうだ、なあルノ」

斜め前の席のルルノに、ハクスイはルーのついたスプーンの先を向ける。

「きょうみたいなの朝起こしに来るのとか、ちと勘弁してもらいた
いんだけどよ、無理か？」

「え、全然無理じゃないよ、にーさんが嫌なら、一生やらないよっ」
朝起こしに、の辺りでヴィエの手が一瞬びくりと反応をしていた
が、誰も気づかない。ハクスイは言葉を選ぶように虚空を眺めてか
ら、ルルノノに視線を戻す。

「嫌っつーか……ほら、俺って家族と一緒に住んでっからさ。いき
なり入ってきたら、さすがに驚くだろうしよ。いや、前もって言っ
てくれたら、全然構わないし、ありがたいんだが」

「ミズカちゃんね」

「ミズカちゃん？」

「ハクスイの三つ下のコなの」

「へえー、にーさんってやっぱりちゃんとにーさんだったんだね」

「全然ちゃんとしてないの。こっちはクズよ。ただの出がらしね」
水に色すらつかないもの。中学二年のミズカちゃんのほうが、断然
しつかりものなの

「クズで」

「おー、そうなんだ！ うちにも妹がいるんだよ！ こっちも三個
下なんだけどさ、もうどっちがお姉ちゃんかわからないって感じで、
あははー」

ハクスイは思い出す。確かに背格好は同じくらいだったが、二二
ノノのほうが断然落ち着いていた。

「それにミズカちゃんはすごく可愛い。ね、ハクスイ」

「お前にはやらねえぞ。貸さねーし見せねーし、ゼッテー触らせね
え」

目を尖らせるハクスイを指差しながら、ヴィエは気安い態度で友
達に意見を求める。

「この人、こんな一点の光沢もないような暗い目をして、凄まじい兄バカなの。るーちゃんはどう思う？」

「家族の仲が良いことは素晴らしいことだよ！ 愛だね！ ラブア
ンドピース！」

きょう午前中と一緒に過ごして、ハクスイは思う。彩光使の衣装に身を包んでいなければ、彼女はごく普通の女子高生に見えた。むしろ、実に魅力的な美少女だった。

心底幸せそうに冷麺を頬張っていたルルノノは、突然身動きを止めて、右腕を持ち上げた。

「って、あつ、着信！」

ルルノノが手首に巻いていた小さな輪がカラフルに輝いていた。光導輪である。その通話機能をオンにし、ルルノノは手首を耳元に近づける。

「はい、ルルノノです！」

ふたりは何となしに彼女を見守る。元気よく返事したルルノノの顔色はすぐに曇った。

「え、呼び出し……？ あ、ホント？ 悪魔が、うん、わかった！
すぐ行くよ！ え？ 迎えに？」

言うや否やである。学食の入り口のほうから大きく手を振ってくる娘の姿があった。

「ルルノノさんー！」

その素性は一発で明らかとなる。彼女のまとう真っ白なローブは

あまりにも目立った。ハクスイが先日見たのと同様、彩光使の証だ。彼女は踊るような足取りでこちらに向かってくる。

「ユメちゃん！」

通話を切ったルルノが、立ち上がりながら名を呼ぶと、件の彼女は両手を広げて声を招き入れるようなポーズとともに、笑顔振りまいた。

「ユメちゃんでーす！」

ピンクの髪をポニーテールに結んだ少女は、学食を優雅にデコレーションするように、ピカピカの機奨光を散布した。光子はカラフルに弾け、彼女の周囲で花火のような輝きを放った。

「フィノーノ高校の三年生！ 生徒たちの人気者！ かつて最年少彩光使として名を馳せたけど、二ヶ月であっさりルルノさんに抜かれた大新星！ “いつも誰かのヒロイン” がキャッチコピーの、ユメちゃんでーす！」

底抜けに明るいその笑顔が、彼女自身の機奨光によってさらに可愛らしく彩られる。ある意味で素晴らしいその機奨光の使いこなしっぷりは、まさに彩光使の実力と言ったところか。

「自虐なのか、明るいのか、わからないの……」

「開き直ってんじゃねえのか？」

「三年生の余裕と言ってもらいたいですね」

素直な感想を述べた下級生のヴィエとハクスイに、ふふん、とユメは自信ありげな笑みを浮かべる。

彼女には華やかさがあつた。それは外套の上からでもポリウムを感じられる大きな胸など、抜群のプロポーションによるところかもしれない。マスコットの魅力を併せ持つルルノに比べれば、ユメはとても彩光使らしいスタイリッシュな美少女であつた。彼女の大きな垂れ目が、ウィンクを繰り返す。そのたびにデフォルメさ

れた星光が食堂を飛び回る。

「あ、でもユメちゃん、迎えてさ、きょう機方舟持ってきたの？」
ルルノノの言葉に、ユメは「チツチツチツ」と芝居がかった仕草で、指を振った。

「遅刻しそうな日は、迷わずですよ！」

「だめだよユメちゃん！ 彩光使が支給されたものを私物扱いするのは！ 黙ってたらいいいけど、公衆で叫んじゃバレちゃうからだめなんだよ！」

「うふふ、しかしそれが役に立つときもあるのですルルノノさん！ きょうだつてそれで、下界に直行できるんですからね！ 人生は綺麗事だけじゃ渡っていきませんよ！」

「た、確かに……ユメちゃんの言う事は、大抵正しいけれど……」
「言いくるめられているぞ」

ユメはルルノノの手を掴んで、まるでミュージカルのような動作で、天井に向かって掲げる。

「というわけで、向かいましょう！ 悪魔のつごめく下界へ！」

第二話・5

「う、うん……あ、そうだ！」

ルルノは良いことを思いついたとばかりの笑顔で、振り返ってくる。

「ねえ、にーさん、また一緒に来ない？」

「お？」

「こないだはにーさんにも格好悪いところ見せちゃったからね！
彩光使が華麗に悪魔を成敗するところ、見てってよ！ あ、そだ、
もし良かったら、ヴィエちゃんもさ！」

ふいに声をかけられたヴィエは、もはや自分に関わる話は終わったと安心していたのか、小さく口を開けて、お揚げをかじろうとしたポーズのまま止まる。

「……え？ わたし？」

「シユレエル先生から、彩光使を目指して、すごく頑張っているって、聞いているよ！」

「う、うんまあ、どうかしら……結果が出ていないのに、頑張っているってというのは……」

「それににーさんと同じく、武道で一クラス抜きを果たしたんでしょ！ それなら実績は十分だもの、ヴィエちゃんが良ければ、一緒に地上に行ってみない？」

彩光使に認められた女性として、周囲のギャラリーが油揚げを口にくわえているヴィエに賞賛の視線を向けていた。だが、そんな風に注目を集めながらも、ヴィエの顔色は優れなかった。

「で、でも……あ、悪魔……でしょ？」

ヴィエが視線を弱々しく泳がせる。それを見たハクスイは、すぐに手を挙げた。

「じゃあ、俺だけ連れていってくれ」

「うん、もちろん！　って、え？　ヴィエちゃんは？」

ハクスイは押し黙るヴィエに代わって、口を開く。

「あー……ヴィエは、シュレエル先生の元で、機奨光の補講があつからな。だから、一緒に行けないんだ。だよな？」

「え、あ……う、うん……そ、そう、なの」

ヴィエは視線を伏せて、俯きながら、さらに頭を下げた。

「だから、ごめんなさい、るーちゃん……あの、また今度、誘ってくださいの」

「んー、そつかー！　わかった、残念だけど、次だね！　一日も早く彩光使になれるように、応援しているからさ！」

親指を突き出してくるルルノノに、ヴィエは、「……ありがとう」と小さくつぶやいた。

「……ま、いきなりはキツイよな」

ヴィエの後頭部に軽く手を当てると、彼女がほんの少しうなずいたような気がした。

三人はヴィエを残し、学食を出る。すると、廊下を早歩きしながらも、ユメが我慢できないとばかりに好奇心に彩られた視線を向けてくる。

「というか、ルルノノさん、ところでそちらの御仁が、ハクスイさんですね？」

「もちろんそうだよ！」

「なにがもちろんなのかわからないが……あれ？　つか、俺の名前

を？」

「ええ、ルルノさんから噂はかねがね。学年にすごく強い人がいるって聞いていますよ」

「つかあの、ユメ、さん？　一応俺の先輩なんだからさ、別に敬語はいらねーっすよ」

「うふふ、ユメちゃんのモットーは礼儀正しく、ですからね。以前、ボランティアでお手伝いにいった保育園でも、最後まで徹頭徹尾、園児に敬語を貫きましたから、それに比べたらハクスイさんに礼を尽くすのは、いともたやすいものです」

「比べる基準がおかしくねえかな？」

ユメの不遜な物言いに、思わず語尾を荒くしてしまう。

校舎を出た三人は、職員用ポートの白線を斜めに横切つて雑に止められている機方舟に乗り込んだ。ハクスイはなんとなくシュレエルの苦悩の表情を思い出す。社会的な地位も上の彩光使には、生徒であろうがなにも注意できないのではないかと、シートベルトをつけながら思ってしまう。一方で、この機方舟のフォルムには見覚えがあった。

「これ、こないだ妹さんが乗ってきた船か……」

知り合いらしいことを言っていたから、ニノノはユメから借りてきたのだろう。中学生相手に咎めないところが、実にユメらしいと思った。ユメは早速操縦席に陣取り、適当な手つきで鼻歌を歌いながらパネルを操作し始める。

「フンフン……小隊のみんなは、各自それぞれの悪魔の発生場所に向かってるみたいですからねー、ユメちゃんたちも、急ぎましよう。ん、まあ大体こんな感じですかね」

「ユメちゃんは、本当に細かいことは気にしない性格なんだな」

「え、惚れちゃいました？ うふふ、だめですよ、ユメちゃんはみんなのヒロインなんですから、誰かひとりのものにはなれませんからね、うふふ」

「ユメちゃんは、本当に毎日幸せそうだな」

それが彩光使になるための資質のひとりであることは、もはや疑う余地もなかった。

誰よりも楽しそうな美少女が、隣からハクスイに微笑みかけてくる。

「そうそう、にーさん！ 彩光使はいくつかの分隊に分けられていてね」

「ああ、うん、習ったよ。愛徳、勇徳、知徳の、三位一隊トリニティだろ？」

「さ、さすがにーさん、知識が溢れて泉になりそうだね……す、すてき……」

「いや、だから、授業で習うだろ……」

「はっ、にーさんの格好良さに目を奪われていた……そ、それでね、あたしとユメちゃんは、悪魔との戦いに重点を置いて、下界での活動を主に引き受ける勇徳分隊バワースなんだよ。だからね、にーさんと一緒に地上に行くときは、他の隊より荒事が多いかもしれないけれど、それは覚悟していてね！」

「ああ、それは俺の目標とも合っているからさ、むしろ助かるってもんだ」

ハクスイたちの後ろの座席に寝転んで、ファッション雑誌をめくっていたユメが、一応話は聞いていたらしく補足してくる。

「ルルノさんは、小隊の隊長さんですからねー。すごいんですよ、あつという間にやってきて、ユメちゃんの上司ですからね」

「へえ……お前、偉かったんだな……」

てつきり誉められて有頂天になるかと思いきや、ルルノの反応

は謙虚なものだった。

「いやあ、なんでだろうね。評価してもらって、ありがたい限りだよねえ」

「うふふ……ルルノさんが彩光使に抜擢されなければ、今頃ユメちゃんが小隊長に着任していたんですけれどね……うふふ……」
「もしかしてお前、ホントはルノのこと嫌いなんじゃないか？」

ついにはユメをもお前呼ばわりのハクスイである。足を揺らしながらくつろぎまくっているユメが、窓の外を一瞥して、その風景の流れる早さに感嘆を漏らした。

「はやーい、さっすがルルノさんの機奨光ですね。一小隊で頑張るより早いですねー」

ユメの白銀の機方舟は雲を突き抜けて、地上へと降りてゆく。

〃

「あ、あの……瞬、くん……？」

「え、あ、な、なになぁ！」

地上では休日のある日中だ。どこかで見たことのあるような初々しいカップルは、公園のベンチに並んで腰を下ろしていた。だが、ふたりその間には微妙な隙間がある。

座る少女は手を膝の上に置いたり握ったり、忙しない。少年のほうも、顔はまっすぐ前を向いたまま闇雲に目を泳がせて、少女を見ようとしなかった。ふたりに共通しているのはその思いであり、手を繋ぎたいのだが繋げない、というもどかしさであった。

そんな幸せな光景を黒く塗り潰すかのように、気づけば、カラスの大群が正面の電線に止まっていた。そしてその全てが向きを揃えて、じーーーーっとこっちを見つめているのだ。

「うわ、なんだあれ、気持ち悪っ！」

少年の言葉に反論するように、カラスたちは、カァー、カァー、と一斉に鳴き出していた。

「ほんとだ、いつのまに……なんだか出て行けって睨まれているような気が……あっ」

「えっ、ど、どうしたの、美月ちゃん」

「うっん……わたし、なんだか、自意識過剰で……思い上がったやつたなつて……こんなわたしを、誰も見るわけないのに……うっ、わたしって嫌な女の子だわ……ああ、もうわたしはだめ……だめ、だめだめなの……だめなの……」

「あ、あれ、なんかこの前も、こんな美月ちゃん見たような！」

少年は頭を抱えた。それとともに、気分が急降下で落ち込んでゆく。まるで深い闇に引きずり込まれるような気分だった。

「ああ、だめだ、僕と一緒にいたって、美月ちゃんが楽しいわけないんだ……美月ちゃんと付き合うなんて、世界で一番幸せなことをしていたから、僕にバチが当たったんだ……これから僕は人生で一度も良いことなんて起こらずに死ぬんだ……ああっ、枯れて死ぬんだ……！」

「うっ、ごめんね瞬くん……わたしごときが瞬くんと付き合うなんて、大それた夢を見るから、こんなことに……ごめんね、瞬くん……ごめんね……しくしく……」

少年と少女はそれぞれ別の方向を向いて、何度も謝る。その体か

ら真つ黒な霧が吹き出しているのを、カラスたちは嬉しそうに鳴きながら眺めていた。

第二話 - 6

「ワハハハ、見ろ、くだらん人間たちがわめいておるぞ」「愉快痛快！」「やつら、希望を持って行動しておるから、このようなくだらん結果となるのだ」「カー！（それ見たことか）カー！（それ見たことか）」「我らより落ち込んでいる人間を見るのは、気分が良いものだ！　ワハハハ！」

悪魔たちは三々五々にわめき合う。そうして、彼らは祝宴をあげるように、人間の吹き出した冥混沌を吸い取るって、楽しむのだ。

「旨い！　人間の不幸は蜜の味だ！」「これで我らの力がますます高まるというものだ！　さて、やつらの不幸をしゃぶり尽くした後には、新たな冥混沌の培養者を探そうではないか！」

『ワハハハ！』

そのとき、悪魔の笑い声を切り裂くように、雲間からひとつの閃光が差してくる。悪魔はまるで狂ったように騒ぎ始めた。

「見ろ！」「何やつだ！」「あれは……まさか、天使の船か！」

天敵の存在を嗅ぎ取って叫ぶ悪魔の声が響く中、白銀の機方舟は飛行機雲をたなびいて駆ける。翼の生えた丸いフォルムの上に、輝ける何かが仁王立ちをしていることに、悪魔の一羽が気づく。その直後、少女の笑い声が天から公園に降り注いだ。

「あーっはっはっはっは！」

機方舟の上に立つ幼い顔をした少女の背には光の翼。高校の制服に身を包み、その手に持つは黄金のハルバードである。

「人の心が闇に染まるとき、悲しみに沈む呼び声が今聞こえるっ！」「ルルノノが翼を広げて宙に浮かぶと、カラスたちは次々と人型へと変容してゆく。真っ黒な肌を持ち、カラスの羽を生やした、黒髪の男たちだ。カラスの毛皮を羽織っている。それぞれに巨大なフォークのような槍を持っていた。

「赤い血まみれの尖兵が！」「希望がなければ、人は不幸に落ちることもないのだぞ！」「貴様らのしていることは、人に絶望の種を撒くことに過ぎぬのだと、何万年もなぜわからぬ！失われた幸せは、より深い悲しみを呼ぶのだ！」「それ見たことか！それ見たことか！」

カラスたちの叫びを、ルルノノは一笑に付す。若き天使は悪魔たちからの冥混沌を弾くようにハルバードを振り回し、加速し、そして落下した。

「はっは！それでも人は光に向かわざるをえないのさ！」

）
）

ユメが公園に機方舟を着地させたのは、ルルノノは悪魔の大半を

蹴散らしたあとであった。その一騎当千の有様をモニターで眺めていたハクスイは、ハッチから降りながら、二度目の地上に足を下ろしたところで、感嘆のため息をついた。

「すっげえなあ」

なまじ武術の鍛錬をしているだけあって、ルルノの腕が並外れているというのはよくわかる。伸縮自在で一撃必殺の威力を持つハルバードを振り回すルルノが、有り余る機奨光によって、凄まじい速さで飛翔しているのだ。巨大な戦斧をかくぐり、運良く彼女と接近戦を繰り広げられた悪魔も、翼から破壊力を伴なう機奨光を一気に放出する光輝武装——『ボテナロク光波爆天』により、一網打尽とさせられた。

ハクスイの後ろから、ユメは伸びをしながらやってきた。横に並んできたユメは、ほくそ笑んで、ハクスイの顔をのぞき込んでくる。「うふふ、ユメちゃんたちの隊長の実力、驚いたでしょう」

「ああ……あの口上も、かっけえな」

「おやおや、ハクスイさんもひょっとして、ああいうヒーローモノお好きなんですか？」

「……そうだな、俺は意外と熱血が好きだ。自分にはないものだからな」

高跳びの棒よろしくしなるハルバードは、次々と悪魔を切り伏せてゆく。

悪魔はそもそも天使を狩りやすい。天使の機奨光による武器は、悪魔に有効であるが、悪魔の冥混沌は言葉ひとつで容易に天使を行動不能に陥れるからだ。一匹の悪魔を倒すためには、三人の天使が必要だと、一般には教えられている。だが、ルルノが相手にしていたのは、二十を超える悪魔の群れである。

「……まったく、すげえな、彩光使つてのは」

クラス抜きを果たして喜んでなどはいられない。

「うふふ、そうでしょうそうですね」

なぜユメが満面の笑みなのかはわからなかったが、とにかく彼女は自分の隊長を誇らしく思っているようだった。だがその後、状況が変わった。ルルノノはその凄まじすぎる実力により、悪魔たちから非難を浴びせられていたのだ。

「なんてやつだ!」「見せ場も作らせないまま悪魔を撃破していきやがる!」「こんなぞんざいな扱われ方をするなんて、あんまりだ!」

「えっ、えっ、えっ」

効果はてきめんで、彼女の足は驚くほど鈍った。悪魔に責められ、ルルノノは空に浮かびながらあたふたと辺りを見回す。

「そ、そんなこと言われても、これがあたしの仕事だし!」

ハルバードを振り回すと、悪魔たちは大げさな叫び声をあげて吹き飛んでゆく。

「うあああ酷いいいい」「ぎゃああ死ぬうううう」「痛いよう、痛いよう!」

「そ、そんな! そんなに強く叩いてないしっ!」

ルルノノは胸元に戦斧を抱きながら、慌てて悪魔に釈明をする。

「おい、ユメちゃん、あれ……」

「うーん……雲行きが怪しくなってきましたね……」

「……あいつ、いつもあんななのかよ」

「人が良いというか、生真面目というかなんというか……うーん、このままじゃ、危ないですね。ユメちゃんも、ちょっと行ってきますね!」

「あ、ああ、氣いつけてな」

ユメもまた、羽ばたいてゆく。ふたりだけで平気なのかと見守っている、ユメも伊達に学生彩光使をやっているわけではないようだ。『光の弓』で、ルルノを糾弾する悪魔から率先して次から次へと撃ち落としてゆく。そうしている間に、応援の機方舟が到着し出した。公園に着地した機方舟からたくさんの彩光使たちがやってくる。悪魔もまた、援軍の数では負けてはいなかった。町中のカラスが集まっているかのようにだった。

天使と悪魔の戦いはますます激化してゆく。だがそれでも、個々の実力差は如何ともし難かったらしい。ルルノを筆頭にした天使軍が悪魔を制圧したのは、二時間後のこと。

フィノーノ中の彩光使が集まった激戦は、天使軍の大勝利で幕を閉じた。

〃

帰りの機方舟で、ハクスイはユメに耳元で囁かれる。

「知っていますか、フィノーノで一番強い彩光使なんですよ、ルルノさんは」

「すげえな…… 300万ポジだもんな」

天ツ雲を浮かべるだけの機奨光を全て攻撃力に回せるのだ。歩く戦略兵器のような女だ。自分とはんでもない天使に目をかけてもらったのだと、ハクスイは実感した。だが、それだけに、ハクスイは二二ノノが言った言葉が気になっていた。力を使い果たして疲れた

のか、座席にもたれかかって桜色の唇から細い寝息を立てているルノノの、無防備な横顔を眺めて、思う。

（たまに落ち込んで、機奨光がカラになるときがある、か……）

あの憂鬱そうなルノノの姿をなかつたことにするために、彼女をDMにしなければならぬのだ。ハクスイは誰にも気づかれないように、静かにため息をついた。

第二話・7「そして始まるふたりの物語」

「きょうは数カ月ぶりの大きな交戦でしたからねー、中央庁に行つて、報告書を提出しなければいけないのが、ええもつ、本当に面倒で面倒で……うふふ……」などと笑っていたユメと別れて、ハクスイとルルノノは場所を移す。

昨晚と同様に——本日も、ハクスイの家である。

途中、本屋に寄ってからハクスイの家にやってきたルルノノは、部屋に来るやいなや紙袋を差し出してくる。低頭である。

「こ、こちらをお納めください、にーさん！」
「……」

それは『はじめてのS M』と書かれたマニュアル本だった。一体天使の国のどこにそんな需要があつたのかは知らないが、女子高生が簡単に入手できるのは問題ではないだろうか、などと思いつつ、受け取る。

「……なんだこれは」

「あ、あたしたちには、きつと役立つはずでしょ!？」

「まあ、そうだな……」

教本はあつたほうがいい。料理にも何事にも。なんとかして自分を納得させると、ハクスイは本をばらばらとめくつた。

かなり過激な内容が多かった、というか。

(むしろ、“ソレ”向けの本じゃねえのか、これ……)

なんというかこう、倦怠期を迎えたカップルが手を出してしまった劇薬のような、そんな匂いを感じた。

ちらりとルルノノを見やる。彼女は緊張している素振りを見せながらも、不安げではないようだった。その態度から、絶対に中身を見ていない、とハクスイは確信する。

「……さ、参考にはさせてもらう」

せっかくのルルノノの好意を無駄にするわけにはいかず、ハクスイはそう言って横に置く。

「えっ、ちゃんと読んでよ、にーさん！」

「わ、わかったわかった、お前が帰ったあとでじっくり読むって」

「どうして今すぐじゃだめなの？ なんでもほら、思い立ったが吉日なんだよ！ きょうやれることは、きょうやらなきゃ！」

拳を握りながらテーブルを乗り越えて接近してくるルルノノに、ハクスイは本をかばいながら怒鳴る。

「ちょ、ちよつと待て、こつち来るんじゃねえ！」

「いいからいいから、じゃあ一緒に読もうって——」

伸ばしてきた右手を払いのけると、その勢いが強すぎてしまったようだ。ルルノノはテーブルの上でバランスを崩す。その向かう先は、ハクスイ。

「ちょ、お前、」

「わ、ひゃあ！」

フィノーノ一位の彩光使が怪我でもしたら大変なことになる。ハクスイは全身を使って倒れてきたルルノノをかばう。柔らかな身体に押し倒される形となり、したたかに後頭部を打ってしまった。

「いつつ……」

「わ、わ、ご、ごめんなさい、にーさん！」

胸元から顔を覗き込んでくるルルノ。金色の髪が揺れて、ハクスイの鼻孔にひまわりのような香りを落とす。思わず、どきりとしてしまった。

「いや、大丈夫だ……意外と、その、思っていたよりは意外と重くなかった」

「も、もう！　せつかく心配してたのに！」

頬を膨らませるルルノの視線が、倒れたハクスイの右上辺りで固定されていた。寝転がりながらも、顔をそちらに向けると。

『はじめてのS M』の、開いたページがあらわになっていた。

手や足をベルトのような拘束具で縛られた女性が、全裸であられもないポーズをしているような、そんな。

ぼんつ、と音がした。冷や汗を浮かべながら見れば、ルルノの頭の上から機奨光の蒸気を噴き出していた。トマトと変わりない顔色の彼女はそのまま、録画したビデオを逆回しするような動きで、元の位置へと戻ってゆく。

再び、テーブルを挟んでハクスイとルルノ。

ハクスイは後頭部に手を当てながら、壁を向いてつぶやく。

「……だから、言わんこつちやねえ……」

「……す、スイマセン……」

なぜだか正座をしたまま肩を竦めるルルノ。そのまま小さくなって消えてしまいそうな声であった。

どうしよう。ものすごく空気が重い。

「うーむ」とハクスイがマニュアルをぺらぺらとめくっていると、ルルノノが慌てて両手を広げながら努めて明るい声をあげた。

「あ、あのさっ！」

「ど、どうした？」

視線を合わせると、頬を赤らめて一瞬だけ硬直するルルノノ。彼女は少しずつ目を背けながら、言葉を紡ぐ。

「に、にーさんとヴィエちゃんって、どんな関係かな、って！」

「え？ いや、えーっと……」

ハクスイ自身はあまり『悪い雰囲気』などに影響を受けるタチではないが、それでもルルノノが居づらそうにしていたため、それに乗っかることにした。

言葉を選びながら、告げる。

「つか、まあ……どんな関係って、言われてもな、ただの友達ってわけじゃあねえけど……本当に、腐れ縁なんだよ。俺が覚えている限りは、悪魔の大襲来——フィノーノの危機、以来の、かね」

「アリギエーリ “大襲来”……」

それは、ハクスイの世代の天使ならば誰もが覚えている大事件の名前だった。

「八年前の事件だな。あんとときさ、フィノーノまで根性で悪魔が登ってきただろ？ まあそこで、俺たちのいた小学校が悪魔に襲われてさ、それまでは一緒のクラスだったことも知らなかったんだが、ヴィエがすっげー覚えててな。以来、なにかあったら付きまとってくるし、そばをうるちよろしてきてさ。あいつ、外面とか顔は良いくせに、泣き虫だったり悲観的だったりするからよ、なんか放っておけねえんだよな」

ルルノノは何か言いたげに口を開閉していたが、結局言葉が思い浮かばなかったようだ。

「だから、言ってしまうえば友達ってより、ヴィエは手のかかる妹みたいなもんだな。すっげーたまには可愛いと思うときもあるけど、ほとんども憎たらしい限りだぜ。つーか、お前も、おかしいことを聞くよな、俺とヴィエの関係なんて」

「な、なにを言うのさっ」

ルルノノは頬を赤く染めながら、堂々と両手を広げて宣言する。

「コイバナが嫌いな天使なんていないんだよ！」

「そ、そうなのか？」

「うん！ 機奨光の半分はね、恋愛でできているんだからね！」

「初耳だ……でも、俺とヴィエは全然そんなじゃねえから、期待に添えなくて悪いな。あつちだつて俺のこと、気を使わなくて良い楽な相手、ぐらいにしか思ってたねえだろ」

「……にーさんはそう思ってたも、ヴィエちゃんの方は、どうかな……」

「ん？ なんか言ったか？」

「う、ううん！ で、でもさ、ほら！ まだまだ上を目指すっていう意味では、まだまだ人の恋愛に積極的に首を突っ込んで行かないといけないからさっ」

「ド迷惑だなオイ……つかこれ以上、一体なにになるつもりなんだ、お前は」

ハクスイは改めてルルノノを眺める。凄まじく顔が良く、運動神経も抜群で、天ツ雲を浮かべるほどの機奨光を持ち、最年少で彩光使試験に合格。さらに性格も明るく社交的。常に回りには笑顔が絶えず、誰からも愛される。

ハクスイから見たら、彼女は誰よりも完璧な天使だ。他人が羨むべきであろう何もかもを持っている。だが――

「……まあ、でもお前も、人知れず悩んでいるんだもんな」

「う、うん……な、なんか恥ずかしいな」

所在無さげに髪を指でいじるルルノ。

なんとなく、きょうは「このままSMを」というムードというわけではなく、たような気がする。

「とりあえず、疲れちまったしさ。俺も考えてみるから、きょうはお開きってことで、どうかね」

「あ、うん……に、にーさんがそう言うなら……」

残念そうではあるものの、うなづくルルノ。

「俺は俺で色々考えてみるからさ」

今後の方針や、どうするのが一番ルルノのためになるか、など。

「正直俺の手に余る部分が多いかもしれねえけど」

「うっん、そんなことないよ、にーさん！」

熱狂的な否定の声に、少しだけ驚いてしまう。

「……なんか俺よりも、お前のほうがよっぽど俺を信頼しているみたいだよな」

「だって、にーさんだもん、当たり前だよ」

頬をかく。真っ直ぐな視線を浴びて、悪い気はしない。

「……じゃあ、またな、ルルノ」

「うん、きょうもありがとね、にーさん」

相変わらずの笑顔で手を振り、ルルノは立ち上がった。だが、それから玄関から出る間際、扉の隙間からこちらを覗き込みながら、

小さくつぶやいてきた。

「……くれぐれも、え、えっちなことは、禁止だからね……！」
ハクスイは犬を払うように、さっさと帰れ、と手を振る。

「さて、と」

授業の勉強の代わりに、ハクスイは部屋でひとり机に向かいながら、先ほどのマニュアル本を広げる。

「さすがにもう、恥ずかしがっている場合じゃないよな……」

昼夜問わず現役の彩光使から手助けをもらい、二度も下界に連れていってもらった。さらに、悪魔と戦い続けるルルノの危険も十分にわかっている。

その上、自分を完全に信じきっているルルノの頼みだ。これでどうにかできないのなら、天使として生み出された意味がないというものだ。

「任せとけよ……俺に……」

ルルノのために、そして他ならぬ自分のために。
一部の慈悲もない、完全なドSになるのだ。

第三話 - 1

ドM契約を結んでから、翌週の休日である。ハクスイは住宅地を離れて、フィノーノ中心街にやってきていた。目的地は、フィノーノで最も大きな総合病院である。

三十分ほど検査を受けてきた後で、機奨光内科の診察室に通されたハクスイを待っていたのは、スーツの上から白衣を身につけた黒髪の女医であった。彼女とは長い付き合いだ。女医はハクスイに気づくと、椅子を回して向きを調節し、軽く手を挙げて女つ気の薄い挨拶をしてきた。

「やあ、少年、久しぶりさ」

誰かを想像させるような爽やかな笑みを浮かべる彼女は、アマド。ハクスイの主治医だ。

「どうも先生、いつもすみません」

彼女はまだ若く、学生を終えたばかりのようにも思えた。物腰が落ち着いてくれば、それに伴って容姿も大人びてゆく天使にとつて、外見年齢とはすなわち精神年齢に値する。そういった視点で眺めると、女医は爽快な印象もあいまって、とても子供っぽく思えた。身長こそは長身のヴィエに並ぶであろうが、笑うと大きな瞳が線になるような様が非常に愛らしかった。

編んだ黒髪を頭の後ろでアップにしたアマドは、資料に目を落としながら、長い脚を組み替える。彼女が浮かべた笑みは、つばみも花咲くような可憐なものだった。

「相変わらずかい？ 少年」

「ええ、まあ」

Tシャツにジーパン姿のハクスイの前で、アマドは先ほどの検査の結果を読み上げる。

「んーと……やはり、体調に異常は見受けられない。心身ともに健康そのもの……まあ、これはいいことなだけだね。でも、まだ症状は不明、原因も不明。きみの“無光病”は、大きくなってくれば自然に回復すると思っていたんだけどさねえ……」

先例も類型もなかったため、とりあえずハクスイに付けられた病名、それが無光病であった。名付けたのは、八年前の当時からハクスイを担当していたアマドである。

アマドはしばしカルテを目でなぞった後に、あっけらかんと話を変えた。

「こないだね、久々に天ツ雲・グランレープスに帰ってさ、奇蹟^{ボブ}核に関する新しい論文が発表されたからって、学会に参加してきたんだけどさ」

「はあ」

グランレープスとは、天ツ雲の中でももっとも栄えている、いわば首都のような場所だ。原初の天使を生み出したとされている、父神の住まう天ツ雲である。

「機奨光がゼロなのに生き続けている天使は、論理的には存在していないってことが、とうとうと語られていたよ。私はなにも言わなかったけどさね、少年はこの世の理論ではどうも、なかなか存在しにくい状態のようだよ」

「まるで早く死ぬのが正しいって言われているみたいだ……」

ひとつやふたつの冗談で傷つくような関係ではなかったが、さすがに首を傾げてしまう。

アマドはまるで陽だまりに寝そべる老猫のように、穏やかに目を細めて笑ってみせた。

「ま、焦らずにやっついていこうさ。医学も日々進歩しているから。はっは、のんびりのんびり」

「……ンなこと言いながら、先生だって、奇蹟核とか機奨光について、新たな説が出るたびに、あちこち飛び回っているじゃないですか」

ハクスイがそう返すと、アマドはカルテで顔の下半分を隠しながら、視線を斜め下に向けた。

「……べ、別に、少年のために頑張って勉強しているわけじゃないんだからねっ」

「いや、いっすから、そういうの。いちいち茶化さないでも、感謝してますから」

「むむ、素直にそう言われたら、恥ずかしいじゃないか」

演技を止めてから、素のアマドはわずかに頬を染めてそっぽを向く。

医使たちの話では、アマドはフィノーノにいるのがおかしいくらいの、優れた学者なのだという。そんな彼女がこの病院に居続いている理由を、ハクスイは知らない。まさか自分のためだと思いつくほど、ハクスイは自惚れてはいない。

そんな彼女がまたふざけないように、ハクスイは真面目に尋ねた。
「そもそも、機奨光ってなんなんすかね」

「機奨光かあ。なかなか奥深い質問をするさね、少年。それを解き

明かしたときには、グランレープシスから銅像を作ってもらえると思うさ」

「別にそんな高尚な答えを求めているわけじゃなくてですね」

「機奨光は人間と天使を分ける能力さ」

「え？」

「翼も光輝武装も、奇跡だってそうさ。全て天使だけのものだろう？ 機奨光を持たない天使は、ほとんど人間と変わらないだろうさ。ただし、少年も知っている通り、人間は泥で作られているから勝手に死ぬことはないさね。それに対し、天使は不安定な火というエネルギーで作られている。燃え尽きちゃえばなにもなくなっておしまいさよ？ だからこそ機奨光でその存在を固めておけるのさ」

「……まあ、どれだけ俺が不安定な命かってのは、自覚しているつもりですが」

「なんだか怖くなってくる。」

「しかし現に、少年のように命を繋ぎ止める機奨光がゼロでも生きている天使がいるからこそ、奇蹟核っていう新たな概念が生み出されたんだけどね」

「その研究が進めば、俺の無光病の治療法が見つかるかもしれないんすよね」

「理論ではね。今のところは研究しようと思っても、手も触れられない、目にも見えない、はっは、お手上げなのさ」

「それが専門家の言うことっすか……？」

「はっは、今だけはひとりの女性として、少年と話しているからね」
「頼みますから、俺の前では医使として話してください」

「なにやらカルテに記入していたアマドが、ぽつりとつぶやく。」

「しかし、少年を産んだ女神様も、心配しているだろうにねえ」

「……そう、なんすかね」

「そりゃそうさよ。私だったら心配するからさ」

「アマド先生は女神じゃないでしょうし……あ、でも変わったことと言えば、一個だけ」

一応報告をしようと思って、ハクスイはルルノの顔を思い浮かべながらさりと語る。

「俺、こないだ計ったら、機奨光が2ポジになってたんすよ」

その瞬間だった。がたがたがた、と椅子を蹴り飛ばしてアマドが立ち上がった。その表情は、驚きに目を見張っている。ハクスイはアマドのそんな動揺した表情を初めて見た。

「ま、まさかそんな！ ホントかい！」

「は、はい、マジです」

「ど、どうやって回復したのさ？ え、なにがあったの？ ちょ、ちょっと先生に話してみ」

「えーと……うちのの学校に史上最年少彩光使がいて、ですね」

アマドの勢いに押されながらも、それは大事なことなのだろうと思ひ、ハクスイはルルノと知り合った過程から昨日の話までを丁寧に説明する。

「ははあ、なるほどねえ……彩光使さんと地上にいたりね……なるほど、なるほど、なるほど……うん、私もちょっとその子のことを調べてみようかな」

「調べるって、なにをですか？」

アマドはそう意識せずに女医としての雰囲気をもとい出す。

「色々、さ。私はね、奇蹟核つてのは天使の心なんじゃないかと

思っているんだよ。だったら非常に繊細だろう？ 少年が彩光使に特別な感情を持っているから機奨光が生まれたのかもしれないし、他に原因があるのかもしれない。だからね、色んな可能性を検証しないといけないのさ。これはどうやらちよつと、やることができてむしろ嬉しいくらいだね」

アマドは嬉々として語り、それからイタズラっぽい視線を向けてくる。

「そういえばさ、手っ取り早く機奨光を復活させる手段もあるんだけどね、これはオススメできないけど、一応聞いてみる？」

「じゃあ、聞いてみるだけ」

知識は無駄にはならない。それも本当は有識者なアマドの言葉だったらなおさらだ。

「ええと、それはね……心がとても耐えきれないほどの衝撃を受けることなんだよ。奇蹟核の中にある機奨光は無限だ。だから生命の危機に瀕した奇蹟核が、びっくりして今までにない量の機奨光を吐き出すだろう、っていうのは、私の理論なんだけどさ」

得意げに言ったアマドに、ハクスイは半眼を向ける。

「教えてもらったことがある気がします、けど……それ、下手したら死ぬって昔、言っていましたよね」

「はっは、機奨光がないくせに奇蹟核まで潰れたら、そら完全に死ぬってば」

「……」

ルルノノやヴィエと違って、どこまでが本気でどこまでが嘘かわからない。それこそが年の功であろうかと、ハクスイは言葉には出さず思っていた。

第三話・2

病院からの帰り道に、中央街に出たついでということで、ハクスイは少し買い物に寄ってきた。紙袋を手には、夕焼け空の下、ハクスイは肩を落しながら伸びた影を追うように帰路を辿る。ハクスイは、アマドの言葉を何度か反芻していた。

（ルルノノに、特別な感情、ねえ……）

ある意味で、自分がフィノーノで最も強い彩光使、ルルノノの命運を握っているのだと思うと、慎重にならざるをえないのは確かだ。そついった意味では、人生で今がもっとも他人のことを気にしていると云っても過言ではないだろう。

（まあ、わからねえんだったら、色々試してみるしか、ねえよな）
ハクスイは自分が前向きだとは思っていない。その代わり、できることがあるなら何でも挑戦してみるつもりがあった。そういう意味では物怖じしないというルルノノの言葉は正しい。

そんな中、ハクスイは自宅近くの公園で、見慣れた長い銀髪の女性性の姿を見つける。

「……ん？ なにやってんだ、あいつ……？」

フリルのついた紺色のキャミソールに、スパッツを履いた清潔感

のあるラフな格好をした彼女は、ベンチに荷物を置いて、本を片手になにやら身振り手振りをしていた。人気の少ない寂れた公園だ。ハクスイはのんびりと近づいて、声をかけてみる。

「よう、ヴィエ」

「あつ……は、ハクスイ……な、なんで？ ど、どうしてここに？」
驚いて振り返ってくるヴィエは、本を後ろ手に隠しながら、戸惑っているようだった。

「いんや、ただの帰り道だよ」

「……そ、そつか……それはそうよね、わたしの家の近くってことは、ハクスイの家の近くだもんね……やだ、なんで当たり前のこと言っているの、わたし……」

なぜだか気まずそうに細い身体を揺らすヴィエは、またなにか悪いことを考えていたのか、少しの間を置いてから、なぜだか遠慮がちに尋ねてくる。

「……また、るーちゃんど？」

「うんにゃ。ひとりで買い物だよ」

紙袋を掲げてみせると、ヴィエは「そう……」とつぶやいて、再び俯く。

その隙にハクスイは軽い足取りでステップを踏み、ヴィエの後ろ手から本を奪い取った。

「ん、やつぱ機奨光の宿題か」

「あつ、ハクスイっ、ちよつと、勝手に、読まないのっ」

ハクスイはヴィエの手をすり抜ける。

「『広いお外で斉唱しましょう。わたしはできる！ できる！』と……なんだこれ……」

「ハクスイっ、バカあ！ 格好悪いじゃないのっ、だから見られたくなかったのにつ」

「いや、別に、こういうの、恥ずかしいとは思わねえけどさ」

そう言って向き直ると、むくれたヴィエは口を尖らせながら睨んできていた。

「前は、苦手だったが……でも、頑張っってこういうのも、解消していかねえとって、思うよ」

ヴィエはプラチナブロンドの髪を耳にかけて、ハクスイから受け取った本を胸に抱きながら、彼らしからぬ言葉を真摯に受け止める。
「ハクスイの口から、『頑張っって』なんて言葉が出るなんて……天ツ雲が落下する前兆なの」

「でも、すげーのは、むしろヴィエだよ」

「え？」

顔を上げたヴィエの青い瞳に、ハクスイの不器用な表情が映る。

「俺は好きなことがない代わりに、苦手なもんもほとんどないから、お前の気持ちはよくわからないんだがさ。悪魔を憎んでいるのだから、あいつらがミズ力を傷つけたからに他ならないわけだしな。でも、ヴィエは自分の怖いものを克服しようとしているわけだろ？」

「う、うん……」

「それって、俺よりよっぽどすげえことだと思うよ。八年前の事件で、クラスメイトもミズ力とかも怪我して、それで震えるほど悪魔を嫌がっってんのに、なのに立ち向かうための高校にまで入るってんだから、すごすぎだよ。だから、機奨光は他のやつより少ないかもしれないけど、俺から見たら、ヴィエは立派な天使だよ」

「ハクスイ……あつ、えつ、と、」

ヴィエはじつと上目遣いで、少しの間ハクスイの顔を凝視していた。だがそれからすぐに気づいたように、すらりと伸びた長い脚でハクスイの向こう脛を軽く蹴った。

「べ、別に、ハクスイにそんなこと言われにやけても、わらしはちやんとした天使なの。機奨光ゼ口の人に、励まされても、仕方ないのらよっ」

「いてえな、つか、なんで唐突にテンパってんだ？」

「ふい、とそつぽを向くヴィエに、ハクスイはよくわからないといった風に眉をひそめた。それからハクスイはすぐには立ち去ろうとせず、ベンチに近づいて、積み重ねられている本の一冊に手を伸ばす。今度はヴィエも止めてこようとはしなかった。

「機奨光の勉強が、こういうのもやらなきゃいけないんだろっなあ。効果あつたのか？」

「え、えつとね……嫌な気持ちになったときでもね、わたしはただど、言葉に出すとちよつと変わる気がするっていうか、無理矢理だけど、切り替えられるような気がするのよ」

「へえ……やっぱ、自主トレとかもしなきゃいけないかな。こういう系は、学校だと人の目があるっていうのが、ちよつと尻込みしちまう原因のひとつかもしれないな」

「あ、それなら」

ヴィエは丁度良いとばかりに手を叩く。ベンチに置いてあつた本の一冊を引き抜いて、ハクスイの前に掲げてみせた。

「これね、シュレエル先生が用意してくれたものなんだけど、ふたり一組で行うタイプの実践本みたいな。まだ中は見ていないんだけど、暇だったら、一緒にやっていく？」

「お、悪いな。ならちよつと、邪魔させてもらうかね」

「邪魔だなんて。大丈夫なの、世界中のみんながハクスイを邪見にして、石を投げてきて、ミズカちゃんもとても一緒の空気は吸えないって家から飛び出していても、わたしだけは今まで通り距離を

置いた友人として、相手をしてあげるから」

「お前ミズカの名前を出すのは止めるよ。マジで心に刺さっからな」
普段の調子に戻って、からからと朗らかに笑うヴィエに、ハクス
イは半眼を向ける。

「それじゃあ、ちゃんと一番最初から、やっていくのよ」

と、大体50ページくらいの薄い問題集をパラパラめくるヴィエ
の動きが止まった。

「あ？ どした？」

ヴィエは武術の授業で槍を振るような凄まじい速さで問題集を
閉じ、表紙を凝視する。その肩越しにハクスイも問題集を眺めると、
そこにはこう書いてあった。

「『本気の恋で機奨光を高めよう！ 男女一組ですぐにできるシチ
ユエーション集！ 大人気、恋愛ごっこシリーズ2011年度版』

……？」

「な、な、な、なんなの、これ……なんで、なんで？ え、ってい
うか、なんで？」

「あー、なんか、機奨光の半分はコイバナでできているって、ルノ
も言ってたな……」

「え、そうなの？ 大人気って書いてあるけど、これ、本当なの？」
わなわなと震えながら振り向いて尋ねてくるヴィエに、ハクスイ
は「らしいぞ」とうなずく。

「そ、そう……じゃあ、や、やる？」

「なんで俺に聞いてくるんだ？ つか、宿題だろ？ やらねえとダ
メだろ」

「そうよね……それは、そうよね……だから、仕方ないのよね……
相手がハクスイなもの、ただの偶然なのよね……す、すっごい、抵
抗あるけど……し、仕方ないのよね……」

ヴィエは手を小刻みに痙攣させながら、こちらが心配になるような真つ赤な顔色で問題集をめくった。ヴィエの言葉を額面通りに受け取るしかないハクスイは、「そこまで嫌なのか……」とさすがに複雑な表情をしていた。

第三話・3

「……えっと、じゃあ、読むの。『これらは男女一組で演じるシリーズです。心の底から人物の気持ちになりきって、本気で演じてください。そうでなければ効果はありません』」

「さすが機奨光の本だ。いきなり無茶な精神論での前置きだな……」

「『演習問題一』……えーっと、『女性——別れ話を切り出す側』……これは、わたしね」

「別れ話ってことは、俺たちは付き合ってたのか」

「……つ、付き合ってたないの！」

「いや、演習問題一の話だぞ」

「……あ、ああ、そ、そうね……そ、そんなことわかってるのよ……じゃ、じゃあ、えっと、次、男性ね、『男性——必死に食い下がり、女性を引き止める側』、だって」

「つまり、ヴィエが別れたがって、俺が別れたくないって言えばいいんだな」

「……み、みたいね……」

「？　なんか、お前、顔がトマトみたいな色になってねえか？」

「夕焼けの光加減なの！　は、早くやるのよ！」

ヴィエの勢いに、ハクスイは「あ、ああ」とうなずく。しばらく短い範囲を丸く歩き続けて、それから立ち止まったヴィエは、覚悟を決めたかのように咳払いをした。指を突きつけてくる。

「も、もう……あなたとは、これ以上、お付き合い、できないの」
ハクスイは彼女の目を見て、ゆっくりはつきりと大きな声で答え

た。

「嫌だ、ヴィエ。俺はヴィエと別れたくない」

側頭部に凄まじい衝撃を受けたように、ヴィエは仰け反った。倒れそうなくらいに傾くと、震える手で横顔を押さえる。

「ど、どうしたんだお前、だ、大丈夫か？」

「へーき、へーき」

「そうは見えないんだが、そうか……？ 具合悪いなら、今すぐ帰ったほうがいいと思うぞ」

内心はともかく、とりあえずプラチナブロンドを撫でて、外見だけは取り繕ったヴィエが、「えと、」とつぶやいてから、視線を斜め下に落とす。

「だめなの、えと、わたし、その……そう、その、他に、好きな人が、できたの」

今度はヴィエの二の腕を掴んで顔を近づけながら、乱暴な言葉遣いで問いつめる。

「ふざけんなよ、ヴィエが俺以上に好きになるようなやつなんて、いるわけねえだろ」

「ごめんちよつとハクスイお願いだから名前はやめて名前はやめて」

「あ？ ああ？ わかった」

すがりつくような早口で懇願してくるヴィエに、ハクスイはうなずき、言い直した。

「お前が、俺より好きになるような男は、いねえだろ」
「……………」

「今度はどうした、ヴィエ」

「えっ、あ、えっ、あっ？ えっ、ああ、あの、そ、そうにゃの、わらしの台詞ねっ」

「お前今度はなんか、足が見たこともないくらいの勢いで震えているぞ。マジで大丈夫か？」

「……………え、えっと……………だ、だって、だってハクスイは、わらしなんて、いっつも、ないがしろにしていりゅしっ」

「そんなことはない。俺はいつでもお前を想っている」

「……………く、口ばかりでは、なんとも言えりゅの、ら、らって、ハクスイ、いっつも、他の女の子と、一緒に、遊んでるしっ」

「ンなの、俺がお前を好きな気持ちとは、関係ねえだろ……………バカだな、お前、ほら知ってんだぞ、お前の弱点さ」

「えっ、あっ……………」

ハクスイはゆっくりとヴィエの背中に手を回し、自分の方に引き寄せた。抱きしめられたヴィエは驚きに目を見張り、ハクスイの顔を間近に見上げて、首を振った。

「や、やだ……………やだ、やらあ……………こんな、ハクスイ、らめ、突然、そんな……………」

「良いから、おとなしくしてろよ。すぐに悪い考えはなくなっちまうだろ」

「ハクスイ……………ハクスイ、こんな、やらあ……………ハクスイ、わらしのこと、好き、なの……………？」

「あ、ああ」

胸元で濡れた瞳を輝かせるヴィエに、（なんかすげえな……………ちょっと可愛いんじゃないかねえかな、ヴィエ……………）などと思いながら、ハクスイはうなずく。

「……………わらし、だって、その、ハクスイのこと、いっつも、ばかにしたり、素直じゃないし、可愛くないし……………意地っ張りだし……………」

……………」

「いや、そんなところも含めて、お前は可愛いよ。綺麗だし、なにより」

ヴィエがハクスイの心まで覗き込むような瞳をしていた。少しだけ緊張しながらも、堂々とハクスイは続けた。

「お前は俺のものだしな」

ぎゅっ……と、ヴィエがハクスイを抱きしめ返してくる。まるで本当の恋人にそうするように、胸板に頬をすり寄せてきた。

「ハクスイ……わらし、そうなの……ハクスイの、ハクスイの、なの……ハクスイのものなの……っ」

それを見て、誰が演技と思うだろうか。それほどに真に迫ったヴィエの態度であつた。ヴィエを抱きしめたまま、ハクスイは目をつむり、そうして、しばらく経ってヴィエの柔らかい身体がぐったりとしてきたのに気づいて、目を開いた。

「……ん？ ヴィエ？」

彼女はまるで茹で上がったパスタのような顔で、目を回していた。
「きゅ……」

「……お、おい！ どうしたんだよ、大丈夫か、ヴィエ！」

ハクスイはヴィエの頬を揉むが、彼女は結局しばらく意識を取り戻すことはなかった。卒倒したヴィエとその問題集を届けるために、ハクスイは公園と自宅を二往復することとなった。

〃

「病院行って、買い物して、ヴィエを送って……まあ、すっかり、

遅くなっちまったな……」

ハクスイはリビングを抜けて自分の部屋に向かう。ハクスイのシヤツの胸元には、ヴィエのつけた涙のシミが残っていた。

自宅で目を覚ましたヴィエの、その後がすごかった。なにがあつたのか、まるで発狂したように、ガンガンと壁に頭を打ち据えて喚きだしたのだ。あれは怖かった。確かに恥ずかしい思いをしたが、あそこまで猛省するほどに、相手役が自分なのは嫌だったのだろうか。

ヴィエをなだめすかせてから自宅に帰った頃には、ハクスイはすっかり疲れていた。

「つか、やっぱ、アレだな」

自室のドアを開いて、ハクスイは茶色の紙袋を机の上に置き、嘆息する。

「最近どうやってドMを作るかばかり考えているから、あんな風になっちまうんだろうな」

演技中の自分を思い出すと、無味乾燥したハクスイですら、頬が赤くなるような気がした。ハクスイはつぶやきながら、押し入れのふすまを開く。

「なあ、ルノ、悪いな、遅くなっちまった」

そこには、手足をがんじがらめにガムテープで縛られて、なんにも喋れないようにさるぐつわをかまされた芋虫状態の女子高生——ルルノノが、押し込められていた。

第三話 - 4

「んー！ んー！ んー！」

口を塞がれたルルノノは、首を振りながら大きな金色の瞳でなにかを訴えてくる。

「いい子にしてたか？ ほら、おかえりなさいはどうした？」

「んー！ んんー！ んんんんー！」

「何言つてつか全然わかんねえぞ。しゃあねえな、ほれ」

ハクスイが唾液で濡れたさるぐつわを外すと、ルルノノは大きく深呼吸を繰り返した後に、きつ、と非難がましい目つきを向けてくる。

「に、にーさあん……」

はぁ、はぁ、と息が切れている。紅潮した頬がゆっくりと動いていた。手足はまだ縛られたままのルルノノが、身動きを繰り返す。

「これ、なんか、心細いよお……」

「かなり長いこと放つたらかしにしてたからな。でも、俺が帰ってきて押し入れを開けたとき、嬉しかっただろ？」

「そ、そんなこと……あるわけ……」

「でもお前、口ではンなこと言っつけど、機奨光が放出されてるぞ」

「えっ、う、うそっ」

ルルノノは振り返れない。だが事実、ルルノノの背中からはうっすらと白い翼が生えていた。

「ルノ、とりあえず俺はお前の素直な反応を見ているんだからよ、

そうやって嘘ついたりとかは勘弁してもらいたいんだがな……」

「う、うそじゃないつもりだったんだけど、お、おかしいな……が、がんばるよっ……」

「それにほら、天ツ雲にも売っているんだな。ちゃんと見えるか？」

ハクスイは紙袋の中身を、ドサドサとテーブルの上にぶちまける。銀色の手錠、黒革の目隠し、短い打鞭、拘束用の赤い革、等々、等々、一体なにに使うのかもわからないようなグッズまで含めて、十点近い品がテーブルに踊り、あるいは跳ね、あらわとなった。

「う、うわっ……す、すごいね、にーさん……本格的、だね……」
まさかにーさんがここまでやるとは……とルルノはつぶやく。

「ああ。お前が持ってきてくれた本も参考になったよ」

高度な調教には道具が必要だということも知り、まずは形からというわけで、こうして街まで買い物に行ってきたところだ。

「まずは、やれるところから、やってこうと思ってな」

「ありがとう、にーさん……やっぱりあたし、にーさんに頼んで、良かったよ……うっ……」

「お前が俺を一人前の彩光使にしてくれるつつたように、俺もお前を一人前のDMにしてみせるように、頑張るさ。じゃあまずは手始めに……」

道具を選び出すハクスイに、ルルノは身動きしながら、同年代の男子に訴える。

「で、でも、その前にちょっと……あ、あの……」

「ん？」

「そ、その……」

なかなか言い出そうとしないルルノに、ハクスイが促すと、彼女は顔を真っ赤にしながらつぶやいた。

「……お、お手洗いに、行かせてほしいかな、なんて……」

「あー」

その恥ずかしそうな言葉を聞いて、ハクスイは暗い目でじっとルルノを見つめた。

「行かせないって言ったら、どうする？」

「……えっ」

ルルノがこの世の終わりのような顔をする。彼女の瞳の輝きが徐々に失われてゆく。ルルノは何度も首を振り、その唇を震わせていた。急速にその機奨光が萎んでいく様を眺めながら、ハクスイはようやく告げた。

「まあ、構わねえか。おとなしく、いい子で待ってたんだからな」

「……う、うん、あたし、いい子で待ってたよっ、ありがとっ！」

ぱあっと再び機奨光が輝くのが見えた。従順にうなづくルルノの手足の縄を解きながら、ハクスイはつぶやく。

「ミズカにだけは、見つからないようにしねえとな……これ」

まだ小さかったヴィエは、暗闇で震えていた。

そこは寒くて暗い体育館で、周りにはクラスメイトたちが同じように身を寄せ合っているのだが、なぜだか隙間風は止まず、身体の震えが止まることもなかった。気を紛らわせるために歌でも歌えば少しは変わるのだろうが、騒いだら“彼ら”にバレてしまうのだと

思うと、恐怖心に縛られたように、誰一人として身動きすることもできなかった。小さな子供たちがガタガタ震えながら物音ひとつ立てず身を寄せ合っている姿は、異常な光景だった。

突如として、体育館の扉が開け放たれた。

ヴィエは悲鳴を我慢するために、手のひらを強く噛んだ。それがあまりに痛くて、目の端から涙が一粒零れる。月明かりもない完全な闇夜だったというのに、その姿を見ることはたやすかった。黒よりも暗い深淵の闇の粒子が、その身体を包んでいたのだから。

「そこに、イルのかあ？」

冥混沌をまとった獣——悪魔であった。

ヴィエは手を噛みながら、何度も心の中で祈った。こっちに來ないで、こっちに來ないで、と。しかし悪魔は無情にも、カカトの高い靴を鳴らしながら、コツ、コツと、迫ってくる。

「美味しそうな、子供たちばかりだな。誰から喰おうか」

生まれて初めて見るおぞましい悪魔の姿に、ヴィエは叫び声を上げてしまいそうになる。彩光使の助けは、まだ來ないのに、悪魔は着実に歩を進めてくる。

ついに、先頭に座っていた少女が、掴まれた。少女は泣き叫び、悪魔は笑っていた。ヴィエはどうすることもできずに、呆然とする。少女の悲鳴が自分のそれと重なる。まるで生きている心地がしなかった。少女のパニックが伝播し、クラスメイトたちが一斉に恐怖を溢れさせた。阿鼻叫喚の様相を呈す体育館には、悪魔の笑い声が響いた。

「イイぞ、この恐怖、冥混沌、たまらない。絶望に染まった天使は、とても綺麗だ」

そこに、ひとりの少年が立ち上がった。

「待ちやがれえ！」

暗黒に包まれた体育館に、機奨光が閃いた瞬間、悪魔が目を抑えて仰け反った。

「何、この輝き……彩光使……？」

ヴィエは泣くことも忘れたように、彼を見つめていた。いつしか悲鳴は止んでいて、全てのクラスメイトたちは彼の背中から生えた真っ白な翼に目を奪われているようだった。

「悪魔ごとき、俺の学友には指一本触れさせねえぜ！」

少年の雄叫びとともに、体育館は信じられないほどの光が、七色の光が生み出された。

そんな夢を見ていた。窓のカーテンの隙間から差し込む朝日で目を覚ましたヴィエは、ベッドの上に身を起こしながら、髪を撫でてつぶやく。

「……でも、よく考えたらあれ……本当にハクスイだったのかしら」
今の姿とは掛け離れすぎているし、どちらかと言えば、まだルルノのほうが近いような気がした。

「小学生にしては、なんか、物言いも、妙に大人びていたし……」
隣の部屋を隔てる壁を見つめて、ヴィエは頬に手を当てながら、首を傾げた。

「……忘れてるのは、わたしのほうだったり……しないわよね……」
「……」

第三話 - 5

休日明けの翌週、職員室前の壁には、期末試験の八教科の合計点数の順位が、内訳も含めて貼り出されていた。八教科とはすなわち、武道、光輝武装、機奨光、それに国語数学理科、人間学、天使学である。

テストの順位表の前に、ハクスイはいた。生徒でこつた返している昼休みだ。

ハクスイの点数は非常に尖っている。武道は満点、光輝武装、並びに機奨光は0点、そして勉強は上位だ。合計点としては、かろうじて平均点を上回っていてくれた。
(しかし、とても彩光使用試験に合格できるような点数じゃ、ねえよなあ)

せめて機奨光こそまでもであつたらと思つてしまふ。

一番上に光り輝いている名前を見つけてしまったからというわけではないが、まさに次元が違う。学年一位、ルルノ。その点数は二位に80点差以上をつけた、795点である。

「信じられねえなあ、なあルノ」

「えっ、あつ」

いつのまにか隣にやってきたルルノに話しかけると、彼女はぱたぱたと両手を振る。

「でも今回は、むしろ、にーさんに負けちゃったからさ」

「いや全然負けてないだろ？　どこかがだ？」

ふたりが話しているのを見つけてか、ヴィエがやってきて肩を竦める。

「ハクスイは、もう、なにもわかってないのね……わかっていないのも、わかっていないの……どうしてそこまでわかってないのか、わたしにもわからないの……」

「どうしたんだ、ヴィエ。なんかお前、きょうはいつにも増して暗くないか？」

「気のせいなの。シュレエル先生、言っただのよ。今回はハクスイとわたし全員抜きを果たしたから、武術の点数は全員、他クラスの子も、基準からマイナス五点されてるってね」

「あ？　じゃあ、これ、795点って、そのせいかな？」

ヴィエは絆創膏の貼ってある額を隠すように押さえながら、ぶっきらぼうにうなずく。

「そりゃあ……なんか、悪いことしたかな」

「うっん、むしろあたしだって、機奨光頼りじゃなくて、もつと純粹に武術の腕を学ばなきゃいけないって思うから、良い薬だよ！」

ルルノはどこまでも前向きだ。だがその視線が、ふいに斜め下に落ちた。

「で、でね、にーさん、あの、その……」

人通りの多い職員室前で、ルルノはこっそりとハクスイの袖を引く。偶然それを見たヴィエが、戸惑ったような顔で目を逸らした。

「あの、だから、その……あ、……“アレ”……だってばっ」

「ああ、アレの時間か、しゃあねえな」

ハクスイは腕を回しながらかつたるそうに歩を進めると、ほんのりと顔を赤らめたルルノがその後ろを小走りについてゆく。

その行く先を目で追いながら、ヴィエは頬に手を当ててつぶやいた。

「……なんだか最近、いつも一緒にいないかしら……あのふたり……」

思わず口に出してしまってから、誰かに聞かれなかったかと思い、ヴィエは辺りを見回して、恥ずかしくなった。

〃

女子トイレの前で壁に寄りかかって待っていると、ルルノノが手をハンカチで拭きながらおとなしく出てくる。やってくるや否や、彼女は釈然としない顔で訴えてきた。

「あ、あのさ、にーさん、あのさ……ちょ、ちよつと疑問なんだけどさ」

「ん？」

「……ど、どうして、トイレに行くのに、にーさんの許可が、必要なのかな？」

ハクスイは斜め上を見上げて、少しの沈黙の後に、告げる。

「……お前とは、もう、ここまでか」

「ちょ、にーさん、嘘だって、違うつ、文句とかじゃなくて、純粋な疑問でさっ！」

「ん、ああ、なんだ、そうなのか。でも、ここじゃちよつとなんだな……」

制服のシャツを引っ張ってくるルルノノを振りほどき、ハクスイは辺りを眺めた。人氣が少ないとはいえ、昼休みだ。生徒が通りか

からないとも限らない。

「どっか誰も来ないとこ、ねえかな」

「あ、じゃあ、えっと、ここらへんだったら」

と言ってやってきたのは、以前もルルノノと立ち入ったことがある生徒指導室だった。カギをかけてカーテンを締め切ってしまえば、外から見られる心配はなさそうである。

「お昼休みに、使われることなんて、ないもんね」

「なるほどな。んで、さっきの質問だけだな、あれは学校でやるから意味があるんだ」

椅子を引つ張ってきて座るハクスイの前で、ルルノノは地べたに正座をする。とりあえず形から入るという意味で、ふたりで考えた取り決めのひとつだ。

「だ、だって、恥ずかしいだけじゃん……いつつもにーさんのこと、探さなきゃいけないし……見つけても、にーさん、あたしがはつきり言うまで、わかってくれないし……」

「んー、だからさ、その、常に恥ずかしいってのが、ポイントなんだよな」

若干頬を膨らませているルルノノの頭に手を置いて、ハクスイは語る。

「悪魔だって、仲間の真ん前で悪口を言ってくるわけだろ？ 胸がないだとか、いつつもエロイことばかり考えている、だとかさ」

「か、か、考えてないし！」

「いやだからさ、仲間に聞かれたら恥ずかしいことだっていっぱいあるじゃねえか。そういうエグるような悪口をな、普段から恥ずかしい思いをして慣れておけば、みんなに聞かれても平然と構えていられるってわけだよ。俺の前だけは平気になったって、仕方ないだ

る？」

「……に、にーさん、ちゃんと考えてるんだね」

「当たり前だよ。最強の彩光使の命を預かってんだから……」

胸元で手を組んで急に尊敬の眼差しを向けてくるルルノに、ハクスイは首を振る。ことの重大さがわかっていないのは、ルルノのほうだ。

「だからな、悪魔に言われることなんて気にならないくらい、ものすごい恥ずかしいことを抱え込むんだよ。もしお前が、俺の許可がなければトイレに行けないどころか、俺の目の前じゃないと用を足せない女になったでしょう」

「絶対にならないと言わざるをえないよぉ！」

「いいから黙って聞け。そんな女が悪魔に無乳だとか、脳天気だとか言われても、気になるわけないだろ？ “なに幼稚なこと言っているの？” ってなるんだよ」

「な、なるのかな……そういう人の気持ちは、わからないと言わざるをえないな……」

「なる。だからお前は、ものすさまじく恥ずかしいことを経験しなきゃいけないんだ。だから、めいっぱい楽しめ、ルノ」

「た、楽しめって、言われても……トイレを我慢するのを、楽しむの……？」

「ほら、エンジェルエンジェル言えよ。楽しむのは、得意だろ？」

「ものによるよ！」

「いいか、ルノ。お前はヘンタイになるんだ」

「ならないってば！」

「ただのヘンタイじゃないぞ。夢のためのヘンタイだ」

「そ、そんな心惹かれるような言い方をしたところで、あたしが前向きになると思っただら大間違いだと言わざるをえないよ！」

「まあ、立ちはだかる壁にどんなモチベーションで挑むのかは、お前次第だけだな。できれば楽しいと思えるほうがいいんじゃないかと、考えているんだけどさ」

「そ、それは……ありがたい、けど……」

俯くルルノノに、ハクスイは「気にするな」と手を振る。

「お前は努力に努力を重ねた機奨光の天才なのかもしれないけどさ、それでもできることからやってこうぜ。徐々に進んでいけばいいんだからさ」

「にーさん……」

その気遣いにルルノノが感謝の念を抱きながら微笑み、自らの頬に手を当てて身体をくねらせる。そんな彼女にハクスイは、新たな試練を突きつける。

「じゃあ俺の言う後が続いて、復唱しろよ？」

「え、なに？　そういうのよくやっているよ彩光使でも！　オツケー、任せといて！」

「わたしはヘンタイです」

「うわあああ、そういうこと！　いきなり直球だね！」

「ほら、ルノ、言え」

ハクスイの冷めた視線に、ルルノノは身体を震わせながら、俯いて、搾るような声を出す。

「うつうつうつうつ………あ、あたしは、ヘンタイ、です……」

その背に、うつすらと白い翼が浮かんで見えた。今の段階では、彼女は間違いなく喜んでいる。真っ赤な顔をしたルルノノに、ハクスイは恥辱責めをしてゆく。

「“学校の昼休みに、ご主人様に虐められて悦んでいるヘンタイで

す”」

「が、学校のお昼休みに、ご主人様にいじめられて、悦んでいる…
…へ、んたい、です……」

ルルノノがぶるぶると震える。その頭から湯気が立ち上っているようにも見えた。

「悪魔を倒すためにドMになれるよう頑張りますから、これから
も可愛がってください”」

「……う、うう……」

「ルノ」

「あ、悪魔を、倒すために、どえむになれるように、頑張ります、
から、から……から……」

金色の髪から、水蒸気爆発が巻き起こるように、一層の煙が立ち
のぼった。

「そ、それは無理……それは、それは……い、言えない
いいいい………！」

ルルノノはゆっくりと後ろに倒れてゆく。ばたりと床に寝っ転が
ったまま、ぴくぴくと痙攣をし出す。

「うう……あたしはだめだあ、もう、だめだめだあ……」
ネガティブルルノノの再臨に、それすらも慣れてきたハクスイは
部屋の時計を見上げた。

「ま、こんなところだろ」

昼休み終了のチャイムが鳴る。ルルノノの回復には、まだ少しの
時間がかかりそうであった。

第三話 - 6

しかしなんと、ハクスイによるDM化作戦は、意外にも即効性があつたようだ。

単純なルルノノは、飲み込みも早かつたのかもしれない。それはハクスイとルルノノの秘密の関係が結ばれてから、数日後のこと。ある日の地上、真昼間の戦いである。

住宅地の屋根から屋根へと飛び移りながら、ルルノノは光の戦斧を振るう。この日のルルノノは、悪魔の大群から罵声を受けながらも、まったくそれを気にしなかったのだ。

カラスたちはすぐに追い払われ、獅子奮迅の活躍を見せたルルノノに、ユメは笑顔で駆け寄る。

「すごいですね、ルルノノさん！　どんな修行をしたんですか！」
「ふふっ、ちよつとした知り合いとね！　エンジェルぱーふえくとっ！」

ガッツポーズを見せたルルノノの頬が若干火照っていたのは、それは戦いの余韻だろうとユメは思っていた。

その帰りの機方舟の中。

ルルノノは他の隊員たちに隠れるようにして、ユメに顔を寄せる。

「あ、あのさ、ユメちゃん」

「はいはい？　なんですか？」

ルルノノは俯き、指をくるくると絡めながらつぶやく。

「じ、実はさ、あたしをトレーニングしてくれた知り合いに、その、お礼をしたいんだけど……ど、どうしたらいいと思う？」

「おー、良いですね」

ユメの目が一瞬きらりと光ったことに、ルルノノは気づかない。

「とりあえず、基本的にはお礼の意思を示すのが大事だと思いますね！ 男性でも女性でも、お食事に誘って、ご馳走するのなどはいかがですか？ 私、いい店何件か知っていますよ」

「な、なるほど……わかった、さすがユメちゃん！ あたし、頑張るよ！」

「……お食事に誘うのに頑張らなければいけないような相手……つまり、お相手は、男の方ですね！ コイバナ！ コイバナの匂いがいたしますね！」

内緒話のつもりが、一斉に注目を集めてしまう。ルルノノは慌ててユメの口を塞ぐ。

「え、あ、や、ち、違うよ！ 相手が男の人ってのはそうだけど、コイバナじゃないよ！」

「……ぷ、ぷふぁ……ほ、本当ですかぁ？」

ユメの疑わしそうな眼差しに、ルルノノは全力で否定する。

「ほ、ホントだよ！ 第一、コイバナってのは、聞いて楽しむものであって、自分がするものじゃないよ！ そういうのはお話の中だけだってば！」

自ら大声で暴露するルルノノは、周りで始まりだしたヒソヒソ声に気づいていない。ユメは苦笑する。

「んー……じゃあ今はそういうことにしておいてあげましょうか。これから期待、ですね」

「これからもないってば！ ホントだってば！」

ルルノノはまるで自分に言い聞かせるようにそう叫ぶ。

そう、自分が誰かに恋をするなんて、あるはずがないのだ、と。

「そ、そうですか？」

その勢いに押されたユメはわずかに身を引く。あの温厚なルルノが声を荒げることなんて、本当に珍しかったからだ。

「だって、もしその恋が破れちゃったら……機奨光が、なくなっちゃうかもしれないもん。せつかくあたしだって夢が叶って、みんなを幸せにできるようになったのに……」

誰にも聞こえないように、ルルノノは小さくつぶやいた。

天使にとつての恋とは、一生に一度、そういうものなのだから。

（あたしが、そんな……にーさんに、恋なんて、するわけ……だってにーさんとヴィエちゃん、あんなにお似合いだし……）

そのとき、左の胸がちくりと痛んだような、そんな気がした。

フィノーノはいくつかのエリアに分かれている。

五つの島雲を連結して繋ぎ、大きなひとつの天ツ雲としているのだ。そのうちのひとつ、中央庁のある天ツ雲フィノーノの中心雲、中央街エリアである。ハクスイの通院する総合病院があるのもこのエリアだった。そういう意味では通い慣れている場所だ。

だが、休日の買い物客で賑わうアーケードにやってくるのは久しぶりだった。ハクスイはいつものＴシャツにジーパン姿で、突っ立

っていた。

（お礼に食事なんて、あいつホントに、几帳面なやつだな……）
自分も助けてもらっているのだから、どっちもどっちだと、ハクスイは遠慮したのだが、それではルルノの気が済まないようであった。

というわけで、待ち合わせは中央街の女神アマテラ像の下だ。フイノーノ出身の女神アマテラはもつとも新しく女神化した天使ということで、男女問わずファンが多かった。だからというわけではないが、待ち合わせ場所は天使たちで盛況である。

あちこちをキョロキョロと見回しながら、ルルノがやってくる。休日の格好は白いシャツにローライズのジーンズ、黒のパンプスと、一見ノンセクシャルな格好であった。だがそのあまりの童顔の美少女っぷりが、アンバランスな魅力を醸し出している。

人混みに流されてしまいそうな背の低い彼女に、ハクスイは声をかけた。

「よう、ルノー」

「あつ、あ、に、にーさんっ」

ルルノが慌ててこちらにやってくる。その頭に手を当てて、ハクスイはネジをはめ込むようにルルノをぐるぐると回す。

「街の中でなんて、大胆になったもんだな、ルノー」

「えっ、あつ、な、なにが？」

「なにがって、なんでトボけてんだ。せつかく、こんなに人通りの多いとこに来たんだから、きょうも調教やりながらあちこち回るん

だろ。なんだ、お前きょうは首輪つけてねえのか？」

「く、首輪って、なんの話しているのかな！ あたしは犬猫じゃないんだから！」

「でもペットだろよ。ったく、仕方ねえな、放し飼いは禁止だしな……つけてやつからほら、人気のないところに行くぞ」

「あつ、ちよ、ちよつ、待ってつ、待ってにーさんっ」

手を引っ張って連れていこうとしたところで、ルルノノを振り返る。顔を真っ赤にした涙目のルルノノと、その向こうに、先ほどまでは気づかなかったが、どこかで見たような小さな美少女がいた。

「……なんだか色々、色々な、色々な言葉が、耳に入ってきたよ
うな気がします」

「お前……」

ルルノノの妹、ニニノノだった。彼女はクリーム色のワンピースを着て、ぺこりと頭を下げてきた。後ろで結んだ大きな金色のお下げが揺れる。

「……平素ねえねえがお世話になっておりますので、きょうはその
お礼が言いたくって、やってきたんですが……」

姉よりもまだ幼く柔らかそうなほっぺだが、微妙に赤く染まって
いたりする。

「ふたりがそんな関係だとは到底思わず……その、わたし、帰ります
ので……ねえねえ、今夜はおうちの鍵を閉めておきますね……す
みません、ごゆっくり……」

「う、誤解だよニニちゃん！ 違うの！ だからほら帰らないで、
ダメ、いっちゃだめえー！」

妹を呼び止めるルルノノの叫び声が広場に響いて、ハクスイは少

しばらく、（悪いことをしちまったかな……）と反省したのであった。

第三話・7

「ねえねえが元気になったのは、そういう理由があったんですね……」

ハクスイがルルノノの心を鍛える特訓しているということ——SM要素を除いて——かいつまんで語ると、二二ノノは納得してくれたようだった。

本日のメインはランチだったため、一同はルルノノが同僚に教えてもらったというパスタ屋に入っていた。いかにも学生が初めてデートをするときに人気がありそうな、清潔感のあるキャッチーな内装であった。

ルルノノはなぜだが、ハクスイにご馳走することに対して、少し嬉しげにしていた。ハクスイは、ルルノノ姉妹と向かい合って対面に座っている。

「……知らぬ間に、ねえねえがオトナになっているものと思ってしま……」

「そ、その話はもういいでしょ、二二ちゃんっ、ほら、た、頼も、頼もっ！」

無理矢理話を変えながらメニューを広げて、二二ノノの口を塞ぐルルノノ。

二二ノノは甘えるような口ぶりで、姉を軽くつつく。

「ねえねえはなににするの？」

「あ、あたしはねー」

「これなんてどう？ 激辛陰鬱パスタ“機奨光もぶっ飛ぶウマさ！”

”だつて”

「あたしの人生に一個のトクもないよね！　っていうか、なにその料理！　天使に毒だよ！」

「ねえねえ、お店の人が一生懸命頑張つて考えているのに、一蹴するのはどうかと思う」

「あつ、うつ、ご、ごめんなさい皆様！」

「じゃあやっぱり罰として……」

「罰！　罰って言っちゃったね！　二ニちゃんも、ほら、ゴメンナサイしてっ」

「ごめんなさい皆様」

「仲いいお前ら……」

からかわれていることに気付いていないルルノと、無表情で姉をおちよくる二ニノノは、自分とミスカのことを思い出させて、微笑ましかった。

久しぶりに会った二ニノノは、やはりハクスイの目を見ても落ち込むようなことはなかった。常時、姉の機奨光に照らされているから、耐性があるのかもしれない。

その後、三種類のパスタと取皿が運ばれてくる。湯気の立ち上る三色のそれらは非常に食欲を刺激した。姉との会話と食事を続けていた最中だ、唐突に二ニノノが尋ねてくる。

「ハクスイさんは、ねえねえのことを、どう思っているんですか？　あまりにも突然すぎた。ストローをくわえていたルルノノが吹き出しそうになる。

「どう、って言われてもな」

ちらりとルルノノを見やると、ルルノノは顔を真っ赤にして、なものにも目を向けないような一心不乱さを取り繕って、パスタをフォークに巻きつけていた。

「変なやつだよな」

「そうですよね、変ですよね」

「妹まで認めるのか」

「ハクスイさんは、良い感覚をお持ちですね。冷静な目を持っている人じゃないと、ねえねえには付き合えないと思いますので、ハクスイさんは合格です」

「そりゃ嬉しいな」

ルルノノはふたりのやりとりをちらちらを見つめて、すでにパスタの巻き付いていないフォークを噛んでいた。

「私、ねえねえって、アマテラさまに似てるって、思っんです。あ、知っています？」

ハクスイは頬をかき、「そんな、恐れ多い！」と手を振っているルルノノを横目で眺めながら、なぜだか決まりが悪そうに答える。

「まあ、そら名前くらいは」

そんなことを言った瞬間だった。ニニノノのくりくりの目が光ったような気がした。

「フィノーノが産んだ天使アマテラは、異例の早さで大天使となり、それから女神となりました。虹色に輝く特別な機奨光を所持していたことから、『虹彩なる太陽』の二つ名を持っています。もっとも最近に女神になったことから知名度も高く、まさに世界的な女神さまで、彼女が記録した写真集の最多発行部数は、天使のうち十人にひとりを持つている計算となり――」

「詳しいなオイっ」

急に別人のような口ぶりとなった二二ノノは若干嬉しそうに胸を張る。

「二二ちゃんは、マニアだからね……」

「ですからね」

そのことに彼女は誇りを持っていうようだ。二二ノノの瞳から微量だが機奨光が散布されていた。

「ねえねえって、アマテラさまみたいに、人を明るくさせたり、元気にする力があると思うんです。なんだか、どこか愛らしくて、間が抜けていて、なのに毅然としていて憧れちゃうっていうか……」

話題のルルノノはというと、「いやあ、あたしなんてまだまだで……」とひたすらに恐縮している。

「……まあ、俺もどこか似ているとは、思うよ」

ルルノノの秘めているポテンシャルは、すなわちそれほどのものなのだ。

彼女のような天使こそが、将来女神の座を手にするのだとハクスイは思う。

「あ、でも勘違いしないでくださいね。アマテラさまに似てるからねえねえが好きなんじゃなくて、私はただひたすらにねえねえを抱きしめたいだけです。トゥルラーブです」

「……だんだん、お前に付き合うのが楽しくなってきたよ」

「つ、付き合うだなんて、にーさんそんな、中学生相手にハレンチな……！」

「お前はさつきから、俺の言葉尻ばかり取ってんなよ。妹の求愛行動はスルーかよ」

「そんなところも可愛いですよ。ハクスイさんはねえねえのどの辺りが好きなんですか？」

「そういう意図的な聞き方をするんじゃない」

「じゃあ嫌いなんですか？」

「素直に答えれば良いのか？」

「どうぞ」

開いた手をこちらに向けてくる二二ノノに、ハクスイは嘆息をしてから、真面目に告げる。

「……感謝しているよ。ルノは根っからのいい奴だしな。俺相手にもまともに接してくれる。あと、可愛いかどうかに限って言えば……まあ、顔は、すげえ綺麗だろ……って、なんで俺にンなこと言わせたがるんだよ」

「恥ずかしがるねえねえの顔が見たいからじゃないですか」

平然と言う二二ノノの言葉に、ハクスイも斜めを見やれば、ルルノは顔を赤くして俯き、ストローの包み紙をもじもじとこねくり回していた。そうして、「うううう……」と唸っていたりする。

「……なるほどな、初志貫徹してやがる」

ブレの無いシスコンだ。

第三話・8「こころを強くするための冴えたやり方」

レストランを出た後にも、ハクスイはショッピングモールに行きたがる姉妹に乞われ、当たり前のようにふたりの後を付いて行くことにした。どうせならと、きょう一日ルルノノに付き合うつもりだったからだ。

二二ノノがモールの一角にあるアクセサリショップに気を取られている隙だ。モール通路のベンチに座っていたハクスイは立ち上がり、ふと思いついて近くにいたルルノノに耳打ちする。

「ルノ、今からやるか？」

「え、えええ、こ、ここでー……？」

ルルノノは少し拒否反応を示した後に、断るかと思いきや、OKサインを出してきた。

「ど、どんなときでも、向上心と、自己鍛錬の気持ちは忘れちゃいけないんだよね……生きている限り、永遠に修行と言わざるをえないよ……！」

「お前は、いつでも全力だな……いや、良い覚悟だけだよ……つか、近くにあんだだけ加虐心に溢れたやつがいるんだったら、あいつに頼めばいいんじゃないの？」

ショーケースの中の宝石に見とれている女の子らしい二二ノノを親指で指すと、ルルノノはとんでもない、と手を振る。

「実の妹にそんなこと頼むなんて、恥ずかしくて死んじゃうよ……！」

そついうものなのだろうかと思ひ首を傾げつつ、ハクスイは氣を取り直す。

「じゃあ、やるかルノ、きょうは珍しくズボンなんだな」

「え、ああうん、どう？ ふふっ、似合うかなあ」

軽くポーズを取り、ルルノノはジーンズを履いた長くて細い足を強調する。似合っていないと彼女に告げられるのは悪魔ぐらいなものだろうが、問題はそこではなかった。

「スカートのほうが虐めがいがあって良いんだがな……」

「ちょ、や、そんな目で見ないでほしいなっ」

ルルノノはズボンの前を押さえながら後ろに下がる。ハクスイはモール内の通路の人通りがまばらなのを確認してから、ルルノノのそばに寄った。

「まあでも、やりようはあるか。いいか、ルノ、絶対に隠しちゃだめだからな」

「え？ え？ え？」

ハクスイはルルノノの後ろに回って、ルルノノのお尻に手を当てた。

「ちょ、に、に、にーさあん……？」

困った顔で振り返ってくるルルノノに、ハクスイは少し迷ったあとで、彼女のジーンズを掴みながら、自分のシャツの裾を破ってみせた。

ビリリ、と音が響く。

「な、な、なにを……ま、まさか……！」

ルルノノの顔色が変わったのを見て、ハクスイはうなずく。

「お前の下着って、白ばかりだよな」

「ちょー！ ちょーっ！ ちょーっとー！」

後ろの生地を破られたと思っているルルノノの腕を掴み、ハクスイは穏やかに語りかける。

「いいか、ルノ、きょう一日それで過ごせよ。手で押さえたり、なんかの袋とかで隠したら、その時点で俺とお前の仲はそこまでかならな」

「……え、えっちなのは禁止だって、言ったのに……っ！」

ルルノノは涙目だ。本当はズボンの上の隙間から下着の色だけを覗き見ただけなのだが、そうとは知らないルルノノは、店にいる人間や通り過ぎる人たちが、自分の下着を見ていると錯覚していることだろう。

「後で弁償はすつから、心配するな。ま、堂々としてりやバレねえよ。くれぐれも、絶対に手で押さえたらダメだからな」

手を当てられたら破れていないということに気づかれてしまうからだ。

「うっ~~~~~~~~うつうつ~~~~~~~~!!」

ルルノノが今にも地団駄を踏みそうな顔で唸っているところで、二二ノノが戻ってきた。

「ウィンドウショッピングは終わったあとに、虚しくなりますね……わたしには、何年も手が届かないものばかり……ふう、あれ、どうかしました？」

「う、うつん！ なんでも、なんでもないと言わざるをえないよ！ だから、ほら、二二ちゃん、先に行つて、ほらほら！」

見えないところに汗をかきながら、ルルノノは両手を振る。二二ノノも不審がっていた。

「……？ いつも変だけど、きょうは特別変なねえねえ……」

「あたしは大丈夫だからさ、エンジェル大丈夫だからさ！ あと二十件くらい回ろっね！」

「う、うつん」

そんな挙動不審気味のルルノノの後ろから、ハクスイは美少女の

首筋に向けて囁く。

「ちなみにお前それ、二二ノノに見つかったら、言い訳せずに、“エンジニア大丈夫！ あたしはパンツを人に見せて喜ぶのが趣味のDMのド変態だから！” って言うんだからな」

「ちょ、に、そ、そんな……さ、さすがにそれ、二二ちゃんは、さすがに……」

想像したのか、ルルノノの顔色がさあーっと青くなってゆく。だが、その代わりにどういった感情の揺れ動きか、本人も気づかぬうちに機奨光が散布されていた。

「バレたらこれから幸せな暮らしができるぞ、ルノ。お前の言う修行が、どこでも可能になるぞ」

「そ、そんなの、無理、無理、むりむりむりむり、絶対無理……」

「口ではなんと言ってても、機奨光は素直だよな」

「こ、これはあ……違……う……」

ルルノノがそう言い張っても、彼女の身体からはきらきらと光の粒が放たれている。どうあがいても、悦んでいる以外は考えられない反応だ。

「？」

二二ノノはそんな姉の様子を訝しげに眺めていた。

ルルノノは帰る時までずっとこれがハクスイの口車だと知らず、恥ずかしそうに身をよじらせ、さらに弱点を克服し続けたのであった。

第四話 - 1

授業が終わるとともに、他クラスからやってきた美少女が、彼の机に小走りで寄ってゆく。清廉な香りを漂わせて、周囲の生徒たちの目を釘付けにする彼女は、どんな男でも虜になってしまうような笑顔とともに、手を挙げた。

「やあ、にーさん、下校の時間だよ！ 疾風怒涛の勢いで帰るよ！」
シュレエルの再三の願いにより、授業だけは他クラスで受けることになったルルノノだ。

彼女を握った女神は、『慈愛と成長の大地』アルテナノ。実にフイノーノの四分の一もの天使を生み出した、最も力ある古参の女神のひとりだ。それだけ多くの姉妹分、兄弟分がいるという事実は、彼女の才能が生まれで与えられたものではないということを裏付ける結果となる。

ルルノノの機奨光を浴びると、まるで陽だまりの中にいるような心地良い気持ちになれる。天使であれば等しく彼女のことを好きにならずにはいられないだろう。ヴィエは、それが悔しいとか、悲しいだとか、そういうった思いはなかった。代わりに、どうしてだか、自分に対して腹立だしく、もどかしく感じることはあった。まるでひとりだけ置いてけぼりにされているような気分だった。

「きょうもにーさんちに行くんだからね！ 勉強はちゃんと集中して行わないとね！」

「任務大丈夫なのか？ 最近、出勤多いみたいじゃねえか」

「うん大丈夫！ 今のところは呼び出されてないから、ほら、いっぱい勉強、勉強ができるよ！ 勉強だからね！ それ以外のやましいことは一切ないと言わざるをえないからね！」

「わかったわかった。お前は誰に弁明しているんだ……」

ハクスイが鞆を肩にかけたところで、クラスに大きな音が響いた。ヴィエは知らず知らずのうちに、手のひらを机に叩きつけていたのだ。

思わずハツとして我に返るが、もう遅い。ハクスイたちの注目を集めてしまっていた。追い詰められたような気持ちで、ヴィエはつぶやく。

「わ、わたしも……」

「あん？」

いつも無表情なハクスイが、やはり感情の機微の薄い顔で尋ね返してくる。ヴィエは顔が赤くなっていくことを自覚しながらも、声を搾り出す。

「きよ、きょうは、わたしも、一緒に行くの」

ハクスイとルルノが揃って同じ顔をした。戸惑っているような困っているような、そんな微妙な表情だ。それが妙に気に障って、ヴィエは語尾を荒らげる。

「機奨光の勉強でしょ！ そ、それなら、たまにはわたしが一緒にもいいでしょ。大体、こないだはハクスイがわたしの機奨光の勉強と一緒にやってもいいか、って聞いてきたんだから、それならわたしこそつちに加わってお互い様じゃないのっ」

「ま、まあなあ」

「ど、どうしょっか」

ふたりの曖昧な態度を見ても、ヴィエはキレなかった。逃げ出さずに辛抱強く耐えて、ふんぞり返り、胸に手を当てながら言い切った。

「だ、だってわたしも、るーちゃんの講義を受けてみたいんだもの。良いでしょ、いつつもひとりでお勉強ばかりして、つまらないんだから……ね、早く行くのよ。もしかして、それとも」

ヴィエは流し目を送り、先に進みながら、ふふ、と冗談めかして笑ってみせる。

「とても人に見せられないようなことを、ふたりで隠れてこっそりとやっているのかしら」

ぶつ、とハクスイとルルノが同時に吹き出した。振り返ったヴィエは怪訝そうな顔で、眉根を寄せるのであった。

〃

雲と雲を繋ぐ橋を渡りながら、三人でハクスイ宅へと帰っている最中に、パン屋からひとりの女の子が出てくる。清楚可憐の四文字熟語を、世界最高峰の画家が擬人化させたような黒髪の少女は、紙袋を抱えるように持っていた。肩に届く髪が、風に揺られて爽やかになびく。

タンクトップに長い白のズボンを履いた少女の背には、まるでかつて地上に栄えた王国の古い町並みが広がっているような、そんな錯覚を覚えさせるほどの美貌の持ち主であった。彼女の立つ一角だ

けが、スポットライトを浴びたように輝いている。

「ふえー……」

その少女を見つめながら、ルルノノが感嘆のため息をついた。

「あんな可愛い女の子が、フィノーノにいたんだねえ……」

うつとりとした声で、ルルノノは頬を上気させながらつぶやく。

「えーと」

ヴィエは頬をかく。

「うん、まあ」

ハクスイも似たような反応をしていた。

小さな天使はこちらを見つけると、バラのつぼみが花開くような笑顔で手を振ってきた。

「おにいちゃん、ヴィエおねえちゃん、今から帰りですかぁー」

ルルノノが疑問符を頭に浮かべてこちらを向いてくるので、紹介してやった。

「あれがミズカだよ」

「え、か、可愛い——ッ！　って、あ、え？」

叫んだルルノノが、なにかに気づいたようにその表情を曇らせる。こちらにやってきたミズカ天使の、その花のような高潔な笑みが光を放つ。礼儀正しく頭を下げ、そのたおやかな見た目とは裏腹な凛々しく高い声で告げてくる。

「初めまして、いつも兄がお世話になっています。——弟の——、ミズカです」

悪意のないサギに、ハクスイとヴィエはやれやれと首を振ることしかできそうもない。

ルルノノはぽかんと口を半開きにして、忘我の表情でハクスイとミズ力を見比べる。

「はい？」

疑問符を浮かべながら小首をかしげるミズ力。『彼』をじーっと見つめているルルノノに、天ツ雲を揺らすような声で叫ぶ元気が復活するのはそれから少しの後。

「——う、うそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！」

きょとんと目を丸くするミズ力の隣で、そのリアクションには納得するしかないハクスイとヴィエであった。

〃

「ミズ力ちゃんも今帰りなの？」

「はい、お夕食のおかずを買ってきたところなんですよ」

道すがら、ヴィエがミズ力にニコニコと微笑みを振りまいている間に、ハクスイは呆然としているルルノノの肩を掴み、振り向かせる。

「ルノ……！」

声を抑えて怒鳴ると、ルルノノは現実感のない事実戸惑っているようだ。

「み、ミズ力ちゃん、すごいね、かわいいね……」

「バカ野郎、ンなこと言っている場合じゃねえ、ミズ力の話は後で

たつぷりしてやつから、今は帰れ」

「え、ど、どうして？」

「どうしてじゃねえよ……お前は彩光使に呼び出されたってことにしておくからよ、俺の部屋を片付けておいてくれ……迂闊だったぜ……あれ、出かけてきたまんまなんだよ……！」

「あつ」

そこでようやくルルノは部屋の惨状に気づいてくれたようだ。本日もハクスイに許可を取って朝から家にやってきたルルノと、小一時間程度“特訓”をしていたのだ。

ルルノは何度も大きくうなずく。さよならの挨拶もなしに急遽転進し、砂煙を巻き上げるような勢いで、一目散に駆け出した。その背に、ハクスイはわざとらしく大きく手を振る。

「気をつけてなー！」

そこでヴィエたちも気づいたようで、彼女らは向き直って尋ねてくる。

「あら、るーちゃんどうしたの？」

「ああ、いや、あいつ彩光使の仕事入っちゃったみたいでさ、急いで行かなきゃいけないんだとよ。制服はスカートだから機奨翼で飛んでいけなくて面倒だって言ってたぜ」

「あら、そう、なの……」

「まあな、でもまた次の機会があるだろ、ヴィエ」

「うん、でも、やっぱり、忙しいでしょうし……残念だったの」

どさくさに紛れてヴィエがミズ力の頭を撫でようとした。その手をハクスイが叩く。

「むやみに触んなよ」

「わたしとミズ力ちゃんは仲良しだから良いんだもの。ね、ミズ力ちゃん」

にこりと笑うヴィエに対して、兄からの視線を気にしながらも、ミズカは苦笑する。

「ぼくはヴィエおねえちゃんに撫でられるの、いやじゃないよ」

「ほおら」

「俺が嫌なんだよ」

「……わがまま」

半眼のヴィエを相手にもしないハクスイ。

「ミズカは宝石のような美しい心を持っているんだから、お前がベタベタ指紋つけるんじゃないよ」

「こういうお兄ちゃんを持つって、どういう気分なの？ ミズカちゃん」

「しあわせだよ。えへへ、おにいちゃん優しいし、かつこいいし」

ミズカの写真を配れば、人間の世界は平和になるのではないかと思えるような笑顔だった。ハクスイはミズカの手を取る。ヴィエにとっては、それがいたいけな美少女中学生をさらおうとしている犯罪者のようにも見えてしまっていた。

第四話 - 2

「ヴィエおねえちゃんも、ごはん食べていくんだよね？」

「あら、嬉しいの。それじゃ、わたしもお邪魔しようかしら」

ハクスイはドアノブに鍵を差し込むが、どうやら鍵は空いているようだ。ルルノノが先にやってきて、共同家屋の管理人さんからマスターキーを借りるかなにかして——彩光使の地位を利用して——忍び込んだのだろう。

とりあえず胸を撫で下ろしながら、ハクスイは部屋のドアを開く。

「ミズカ……お前がいくら無限の優しさを持っているからって、それをわざわざ敵にまで与える必要はどこにもないんだぞ……」

「誰が敵なの、誰が」

玄関に上がり、靴を脱いでハクスイは自分の部屋に向かう。ヴィエの「お邪魔しますの」が続く。

「あ、ちよつと待っててくれよ、ヴィエ」

振り返ると、靴を整えるミズカの背が見えた。可愛い過ぎる。砂浜で貝殻を拾う人魚姫のようだ。思わず求婚したい衝動を抑えながら、ハクスイは平静を装ってヴィエに告げる。

「今、部屋が散らかっててさ、五分だけ待っててくれねえか」

確認だけはさせてもらいたかったのだが、ヴィエは無残にもハクスイの横を通り過ぎた。

「別にそんなの、気にしないの。ハクスイの部屋なんて、目をつむってても歩けるのよ」

「お、おい」

手を伸ばすものの、勝手に開けるヴィエを止める暇もなかった。ゆっくりとドアが開く。

（やべえ——）

「ふーん」とつぶやくヴィエの後ろから覗き込むと、部屋は綺麗に整理整頓されているようだった。朝とは違い、掃除機までかけられ、フローリングの床は水拭きもされているような徹底ぶりである。犯行は、もちろんルルノの仕業だろう。

「相変わらず綺麗なの。几帳面なものね、ハクスイ」

そう言って部屋に上がりこむヴィエに続きながら、ハクスイは感心する。

（すげえな、一瞬で綺麗にして帰っていきやつた……さすが、っ
つか……なんでもできるんだな、あいつ……あとは、何食わぬ顔
でここに帰ってくれば、なにも問題は……）

本棚をのぞき込んでいるヴィエを横目に、ハクスイは部屋を見回す。問題のブツの在処はというと……やっぱ、押し入れに隠したのかな、と思い、気軽な気持ちで押し入れを開けてみた。

ふすまを横に開くと、その直後、ルルノと目が合った。

ルルノが膝を抱えたまま押し入れに入っていて、SMグッズの山に埋もれながら、こちらに向かって青ざめた笑顔で手を振っていた。ハクスイの思考が一瞬止まる。

ルルノの小さな口がぱくぱくと動く。

(ま・に・あ・わ・な・かつ・た)

ぴしゃり、と戸を閉める。ハクスイは拳を握って震えた。

(お前それ、部屋の掃除までやっているからじゃねえか……！)

押し入れに額をつけて奥歯を噛み締めていると、ヴィエが怪訝そうにやってくる。

「なにやっているの、ハクスイ、機奨光のお勉強、しないの？」

「ああ、そういう名目だったな……つっても、ルノがいないんじゃないかな」

立つてお見合いをしているところで、ミスカが「お茶をおもちいたしました」と部屋にやってくる。そのお盆の上に乗っている湯気立つ緑茶を見て、ハクスイはこれだと思った。

(がぶ飲みさせて、ヴィエをトイレに行かせたところで、ルノを逃がしいんだな……)

とりあえずはヴィエをこの部屋から追い出せばいいのだ。それならばと、考えを改める。

(つて、待てよ……別にそんな面倒なことする必要ねえか?)

ハクスイはとりあえず機奨光の教科書を本棚から取り出したところで、気づく。対面に足を畳みながら座るヴィエを見て、いいことを思いついたのだ。

「そっぴや、前やった二人組の機奨光の本あったよな」

「え？ あ、うん、あったの」

「お前、あれ家から取ってこいよ。ふたりで続きやろうぜ。全然進んでねえんだからさ」

我ながら良い考えだと思った。ところがヴィエはハクスイの予想に反し、遠慮がちに鞆をテーブルの上に乗せてきた。

「じ、実は、今も、持っているんだけど……」

「なんで持ってたんだよ、畜生」

「え？ な、なんで？ やるんじゃないの？」

「ああ、そうすつか……畜生……用意の良いやつだなオラ」

「な、なんでそんなに態度悪いの？ い、嫌なの？ そ、そんなに嫌なの？」

長期戦を覚悟したハクスイは、戸惑うヴィエの横に座り直す。彼女の長い銀髪から、幼い頃からいつもそばにいた女の子の懐かしいような良い香りが漂ってくる。薄くて大きな問題集を机の上に広げて、ハクスイとヴィエはまたも恋人同士を演じることとなった。

「えつと、じゃあ、こないだの続きね……きょうのは……ええと……今度は“彼氏の家にやってきて、ひたすらイチャイチャする”、だって……」

「なんか、そこはかとなく、きょうのシチュエーションに合っている気がするが……」

「べ、勉強するのは大抵おうちでしょ。なんにもおかしいところはないのよ。彼氏の部屋はとても自然なデートスポットなのよ」

「いや、よく知らんけどさ……」

押し入れに気を取られながらも、ハクスイはヴィエの手元の本を覗き込む。

「あ、これは台本があるんだな、ありがたい」

「『台詞を自分流にアレンジしましょう。役に成り切らなければ、役には立ちません』……だって。巧いんだか、へたなんだかわからないの……」

「交互に読むだけで良いんだろ？　すげー楽な課題だな。とつとと終わらせちまおうぜ」

「わたしにはテストよりよっぽど難しいけれど……えと、また、わたしから、なのね……」

こほん、と軽く咳をして、ヴィエは棒読みでつぶやく。

「こ、ここがあなたのお部屋なのね……綺麗に片付いているの……」

「そうか？　まあ、普通だよ。それよりさ、ヴィエ。ここであなただけの肩を抱いてください……って、ああ、これは台詞じゃねえか。よっ」

ヴィエの細い肩に手を回した瞬間、彼女は突然狼狽してその蒼い目で睨んできた。

「きゃっ！　な、なにをするの、ハクスイっ！」

「なに、って、肩に手を回したただけだろ」

「別に、そんなのしなくていいでしょ！　ふ、フリでいいの、台詞だけっ、十分らのよ！」

「そうか？　でもこういうのは真面目にやっといいたほうがいいと思うんだけどな」

「い、いいの！　らってとっても危険なもの！」

「危険……？　よくわからんが、続きはお前からだぞ」

ヴィエは呼吸を整えてから、急激にトーンの落ちた声色で続ける。
「……ふう……えっと、だ、だめよー、ハクスイー、まだ明るいのよー……」

「良いだろ、ヴィエ、俺の部屋に来たってことは、やることはひとつだろ。 “ここであなたは彼女を押し倒して、胸の上に手を当てる” ……これ、ホントに市販の参考書なのか……？」

どうする？ とハクスイが目を向けると、嵐を起こすような勢いで手を横に振られた。

「だめだめだめだめだめだめだめだめなの」

「そりやそうだよな。そこまでやると、芝居の域を越えちまうし」
 ヴィエは顔を隠すように参考書を取って、蚊の鳴くような声でつぶやく。

「…………や、やあん、いけないのー、ハクスィー…………そんなの、
 らめなのー…………やー…………」

「いや、それじゃ、次の台詞読めねえだろ。おい——」

ハクスイがヴィエの肩に手を置いて、教科書を取り上げたそのときだ。眼前に突然現れた顔に動揺したのか、「や、やああ」とヴィエがハクスイの袖を引っ張り、彼を巻き込みながらひっくり返る。それはちょうど、彼女の胸に手を当てて押し倒したような形のわけであつて。

ついに、ルルノとこんなことをしていたような気もしたわけ
で。

「お、おい……だ、大丈夫、か？」

.....

そのヴィエの表情は、今までハクスイすら見たことがないほどに美しかった。柔らかそうな頬を紅色に染め、星々のきらめく瞳を潤

ませたさまや、銀色の髪が広がって真っ白な氷原のように輝くさまは、まるで女神の石柱のようであった。

しばらくふたりは見つめ合っていた。先に我に帰ったのはハクスイのほうで、身体をどけてからヴィエに手を差し伸べる。

「わ、わりいな、大丈夫か？ 髪踏んじまったりしてねえよな、怪我とかないか？ 起きれっか？ 手、貸すぞ」

「……………だいりようぶ、らいりようぶ……………」

「いや、舌回ってねえけどよ」

ヴィエはハクスイの手を借りずにひとりで身を起こし、髪を撫でながら立ち上がった。それから心配になるようなよろめく足取りで、部屋を出ようとする。

「……………ちよつと、お花摘みに、行ってくるの……………」

「お、おう、手洗いか……………って、お前、その戸はちげえぞ——」

起き上がって怒鳴りながら制止したときには、もう遅かった。ガラッ、と開いた押し入れの中から、ひとりの少女が転がり落ちてくる。

「わ、わわわ、きゃあああ！」

山のようなSMグッズとともに、雪崩を起こしながらである。

ヴィエは少しの間呆然としていた。様々な疑問が頭の中を渦巻いているのだろう。ズドンと勢いよく落ちたルルノを見下ろし、その後、ひとつの道具を取り上げて、とりあえずという感じで、ヴィエは細い細い薄い声でつぶやいた。

「……………え……………なに、これ……………」

小さなボールに革紐がくくりつけられている器具だ。頭を押さえながら「いててて……」と起き上がったルルノが、余計なことに質問の解答を提示する。

「あ、あはは……そ、それは、えと、ギャグボールって言ってね、口に咥えるものなんだよ。なにも喋れなくなるし、口を閉じることもしかないから、だらだらと赤ちゃんみたいに唾液も垂れるし、とっても恥ずかしいと言わざるをえないんだよ、あはは……」

「……説明してるんじゃないねえ……」
ハクスイは顔に手を当てて、そうつぶやくより他なかった。

第四話 - 3

空気が重い。

なぜだか、ルルノはヴィエの前で正座をしていた。

テーブルの上には、わざわざヴィエが並べ直した様々な器具が山盛りになっている。手錠やらギヤグボールやら縄やらフックやらクリップやら。ヴィエはその半分の用途もわからないようであった。

(……………参ったな……………)

ヴィエもルルノも間合いを計っているようで、口を開こうとはしない。色々な思いが胸中に去来しているのだろう。特に率先して嘘を並べていたハクスイがなにを言っても、爆弾を投げ入れてしまふような気がしていた。

「あ、あの……………」

先ほどから革の手枷を手で弄んでいたヴィエが、ようやく口を開いた。

「ハクスイと、るーちゃんって……………そういう関係、なの……………？」

勇気を振り絞った言葉であったのだろう。それがどういう関係かわからなかったが、ハクスイは断定しながら首を振った。

「違う」

「ち、違う、って……………でも、これ、こういうのって……………」

今まで知らなかった世界の扉を開けてしまったような顔で理解しかねているヴィエに、ハクスイはひとつもやましいことはないとにかく、胸を張る。

「なにを考えているかはわからないが、お前が思っているようなことはひとつもないんだ」

「でも……」

「人には事情ってモンがあるんだよ。誰にも足を踏み入れられたくない場所がよ」

「そ、それって、わたしに対しても、なの……？　どうして、ハクスイ……」

食い下がるヴィエは悲しそうな顔をしていたが、ハクスイは取り合わない。ハクスイはルルノとの秘密を守る方が大事だと思ったのだ。

ルルノは自分をかばい続けてくれているハクスイの決意を聞きながら、俯き、スカートの裾をぎゅっと握り締める。

「そう、なのね……ハクスイ、やっぱり、るーちゃんのこと……」

「——ごめんね！　ヴィエちゃん！」

その時だ。ルルノはまるで土下座するような勢いで、頭を下げた。

「あたしがにーさんに頼んじやったんだ！　最初は本当ににーさんの機奨光を高めようと思ってやってもらってたことなんだけど……なんだかそのうちに、あたしが多分、楽しくなってきた……」

「おい、ルノ——」

「——だからさ、ごめんね、ヴィエちゃん！　あたしが変な勘違いさせちゃって！」

「るーちゃん……」

「にーさんはヴィエちゃんにお返しするからさ！　お互い、大切にね！　一番大事なのは、思いやりの心なんだから、だから、立派な彩光使になれるように、あたしも陰ながら応援しているからさ！」

「どうしたんだよ、ルノ」

「だから、もう、今日限りってことでね！　もう、おしまい、おしまいにするからね！」

「お前……急にそんな、なに勝手なこと言っているんだよ……つか、もしかして、さっきの芝居の内容を勘違いしているんじゃないだろうな？」

「勘違いしているわけじゃないよ。でも、勘違いしていたのは、あたしだったんだと思う」

「ああ？　意味わからないぞ」

「あの、わたし……」

ふたりが言い合うのを、ヴィエは不安げな様子で眺めている。そんな彼女にも、ルルノは笑みを向ける。

「応援しているからね、ヴィエちゃん！」

「う、うん……るーちゃん……？」

「ルノ、待てって！」

立ち上がった彼女の腕を掴もうとハクスイは手を伸ばすが、それよりも早くルルノは踵を返していた。

「もう大丈夫だから！　これからの放課後は、ヴィエちゃんとお幸せにね！　じゃあね、今までホントにありがとう！　だから、バイバイー！」

口早に告げて、ルルノは部屋を出た。

ハクスイはその場に置き去りにされて、苛立ちを隠せなかった。

「なんだよ、あれ……」

「……ハクスイ、やっぱりこれって、わたしのせい……」

ヴィエは哀切を表情に張り付かせていた。自分が迷惑をかけてしまったと思っているのだろう。

「……きっかけはそうだったのかもしれないけど、だからって話もしないで出ていくなんてこと、ないだろ」

「……ごめん、なの」

「ヴィエが謝ることじゃねえよ、どう考えたって」

ミズカがやってきて、「カレー出来たよー」と告げてくるまで、ふたりは部屋で黙り込んでいた。

「おい、ルノ」

「ギクッ」

放課後の廊下で後ろから呼び止められたルルノノは、立ち止まって振り返ってくる。

「あ、に、にーさん！ ひ、久しぶり！」

ルルノノがハクスイと距離を置いてから、少しの日が経っていた。

「久しぶりじゃないだろ……シユレエル先生から聞いたんだぜ」

「え、なにがかな！」

「彩光使が最近多忙だってんで、俺の更正活動は後回しになったってさ。だからしよっちゅう下界に降りていたんだな。悪魔のせいかな？」

「あ、あーなんだ、そっちの話か……うん、それならうん、そうだ

よと頷かざるをえないよ」

「大変だな。どっか怪我とかはしてないか？」

「うっん、平気だよ！ にーさんに鍛えてもらったおかげで、あたしはもうすっかり心がエンジェル強くなったからさ。えへへ、悪魔なんて一網打尽だよ」

「そりや良かった」

以前と変わらない笑顔を見て、ハクスイはほっとした息をつく。

「じゃあ、俺への頼みごとの調教生活は、本当に終わりか」

「あ、うん……そうだね、ごめんね」

「なんで謝るんだよ」

「あのときはちよつと混乱してて、部屋を飛び出しちゃったから」
ルルノノは視線を伏せる。

「ごめんね、にーさん。今までしてもらった分も含めて、あとで今度またお礼をするからさ」

「別にそんなの、俺だって貴重な体験をたくさんさせてもらったし」

「そ、そお？ じゃあほら、ヴィエちゃんでも誘って、一緒にご飯でもまた……」

「あのさ、ルノ」

「な、なに？」

「こないだからなんか、やたらヴィエにこだわってないか？」

「え！」

ハクスイが疑問の目を向けると、ルルノノがハツとして顔をあげる。

「そ、そんなことないよ！ あるわけないよ！ あったことなんてないよ！」

「いや全然わからないが、なんでそんなに気になるんだ？」

「あつ、ご、ごめん！ あたしちよつと、今からまた下界に降りな

きやいけないからさ！ もうお話している暇なくなっちゃうんだ！
また今度ね、にーさん！」

「あ、ああ……そうか、忙しいんだな」

手を振りながら全力で廊下を駆け出すルルノノに、ハクスイは二の句を継げなかった。

その背を見送ってから、ハクスイは独り言をつぶやく。

「なんかもう本当に、ただの学生と彩光使、って構図に戻っちゃったな」

おかげでDSを繕う必要もなくなった。

しかしわずかな寂寥感のようなものを感じてから、ハクスイは思
い出す。

「いけね、俺もシュレエル先生に呼び出されているんだった」

第四話 - 4

「ねえ、ユメちゃん」

下界に降りてすぐだ。空を見上げていたルルノノが、唐突に話しかけてきた。

「ちょっと、聞いてもいいかな」

「あらあら、どうかしました？ なんでも聞いちゃってくださいよ」

「うん、ありがとう……えと、ね、友達の話、なんだけどさ」

（まあルルノノさんの表情を見る限り、その時点で120%自分の話だと思いますが）

ユメは苦笑する。大きな市民公園に夕焼けが差し込み、地上がオレンジ色に染まってゆく。悪魔に備えて待機を命じられたルルノノ小隊の面々は、公園脇の道路を通る通行人に片っ端からラッパを吹いていた。応援歌の乱れ打ちだ。

その輪から外れたところに、ユメとルルノノは座っていた。

「あるところに、エンジェルお似合いのふたりがいるんだ。男の子は天使A、女の子は天使Bとするね。しかもふたりはおうちも隣同士で、とっても仲の良い幼なじみなんだ」

「素敵ですねえ」

「うん、そうなんだよ。それでね、ええと、天使Bさんの友達にね、天使Cさんって子もいるの……その子は、その、ふたりのやりとりをしょっちゅうそばで見ているんだけど」

「なるほど、（天使Cさんはルルノノさんですね）、わかります」

「なんだか、その、天使Aさんと天使Bさんの素敵な関係を邪魔しちゃいけないと思ってさ、天使Cさんはふたりから距離を置くんだけど……でも、なんだか、胸が痛いみたいなんだ」

「あらあらまああ」

「しょっちゅう、天使Aくんの顔を思い浮かべたりして、そのたびになんだか、心がふわふわした感じになるみたいで。でもふたりと一緒にいるところを想像すると、悪魔に攻撃されたときみたいに、苦しくなって……ねえ、ユメちゃん、これって一体なんなんだろう」「えーと……」

「どこことなく大人びたような横顔のルルノノを見つめて、ユメは言葉を選ぶ。」

「だが、しばらく考えたところで、その一点を差し置いては話を進められなかった。さすがのユメですら、不安を覚えてしまう。」

「あの、ですね、ルルノノさん」

「うん」

「その、天使Cさんのことなんですけど……」

「うん」

ユメは若干躊躇しながらも、言った。

「……彼女は、天使Aさんに、恋をしているんじゃないかと思えます」

「うん………え？」

そこでようやくルルノノが大きな瞳をぱちくりと瞬きさせながら、

ユメを見た。

ユメはルルノノにすっかりとうなずく。

「天使Cさんは、天使Aくんに恋をしています。だからふたりが仲良くしていると胸が苦しくて、天使Aくんのことを思うと、少しだけ幸せな気持ちになるんです」

「……恋？」

それがまるで初めて聞いた言葉であるかのように、ルルノノはつぶやいた。

「恋です」

ルルノノはそのまま、しばらく固まっていた。

（まさかルルノノさん、自分が恋をするはずがないとも思い込んでいたわけじゃないですよ……天使だって、恋くらいしますって）

「そんな、恋って……」

ルルノノが俯いて、心ここにあらずといった感じに繰り返す。

遠くでは、人間への応援で一汗流して休憩していた彩光使たちの元に、にゃーんと鳴く獣が近づいていて、彼らが色めきだっていた。「おや、可愛いな」「野良猫かしら」「おお、ふかふかだ」「もふもふの三毛猫だな」

天ツ雲には生き物がいないため、地上の動物はもの珍しかった。小さな獣は、たちまち可愛がりの対象となっていた。

「あ、ほらほら、ルルノノさん、下界の生き物ですよ、人間じゃない動物ですよ、可愛いらしいですよ」

いつもなら満面の笑みとともに飛んでゆくルルノノだが、このときばかりは違っていた。

「恋だなんて……そんなの、困る」

「え？」

（困る？）

ルルノノはまるで青ざめているようだった。

（普通、自分の恋に気づいた女の子なんて、頬を赤らめながら、でもちよっただけ嬉しそうにはにかなりするものじゃないんですか？）

ユメはルルノノを問い詰めなくなった衝動を抑えながら、彼女に尋ねる。

「ど、どうしてそんな顔をしているんですか、ルルノノさん」

「だって、ユメちゃん……あたし、そんなことになったら、機奨光がなくなっちゃうかもしれないよ……」

もはや友達の話だとごまかす気力も失ったのか、ルルノノは搾り出すようにつぶやいた。

「どうしよう、ユメちゃん……」

ルルノノは潤んだ瞳をこちらに向けてくる。

「ど、どうって聞かれなくても」

ここで自分が、「ならユメちゃんがルルノノさんのことを幸せにしてあげますから！」と叫んで彼女の細い体を抱きしめたらどうなるだろう、などと考えてしまつて、すぐに首を振る。

（そ、それはすごい素敵な考えですけど、失敗してしまつたらとてもサムいことになってしまいますね……！！）

思わず頬が赤らんでしまう。

そんな自分の髪のようなピンク色の悩みを抱いていると、遠くで彩光使たちに可愛がられていた猫と目が合った。

（どう思います？）

目と目で問いかけてみる。猫はよくわからないといった風に鳴き、自分の顔を前足で撫でている。そんな牧歌的な一時の最中、ユメはすぐに違和感を覚えた。

(……あれ……?)

下界の生き物が、自分たちの姿を見えるはずがないのに、なぜ目が合ったのだろうか？

三毛猫の毛皮が黒く変色していったのは、そのときだった。

〃

一方、ハクスイとヴィエはシュレエルの元に呼び出されていた。

「さてとだな、あれから二週間が過ぎたわけだが、お前たちはよく頑張ったよ」

そう言うシュレエルは、機奨光の再測定結果が書かれた紙を、ふたりに差し出してきた。

「期末テストの結果と照らし合わせると、ハクスイくんがプラス3、ヴィエくんはプラス7」

それぞれ、わずかな期間では十分過ぎる成果と呼べるだろう。特にヴィエは驚異の成長率だ。

「……二週間で7つて、思春期の身長だってそんなに伸びないのに」紙を手につく立っていたハクスイとヴィエに向かって、シュレエルは己の手腕を誇るような男臭い笑みを浮かべながら、あご髭を撫でる。

「ハクスイくんは確かに0から3に成長ということで、素晴らしい結果なのかもしれない。けどな、彩光使をひとり拘束してまで価値があるのかというと、疑問なわけだ」

「はあ」

「対して、ヴィエくんは参考書だけで7ポジアップ。これはちよつと異常な数値とも呼べるが……報告書をまとめる参考にしたいんだが、最近なにか良いことでもあったのか？」

「え？　べ、別になんでもないですよ」

「……ん、まあ、いいか。とりあえず、この結果はここまで、ってことだな」

「え、あの、それって、どういうですか？」

「二週間も彩光使に協力してもらったんだから、もう十分って話だな、ハクスイくん。これからはヴィエくんと同様に、量の勉強に勤しんでもらうってことだ」

「えっ」

そこで驚いたのはヴィエだった。澄ました美女の顔が、童女のそれへと早変わりする。

「じゃあ……ハクスイは、もう、るーちゃ……ルルノノさんと、もう一緒に下界に行ったりできないってことですか？」

「ん？　そりゃそうだよ。大体、それが普通の生徒なわけだからな。ハクスイくんだって、より効率的な方法で機奨光を高めていきたいだろうしな」

先にシュレエルから聞いていたハクスイは、「はい」、とうなずく。

「彩光使が今忙しい中、負担をかけるっていうのも、迷惑な話だしな」

「忙しいって、なんですか？」

「あー……えつとな、下界が今は大不況だったり、色々混乱しているって、こないだ授業でやっただろ？　ってことで、悪魔の力が普段より伸びているんだ。経済的不況は悪魔が人間に及ぼす最も大きな災害だからな。毎日地上に出ずっぱりで冥混沌を払い、悪魔を退治して、相当大変みたいだぞ。もしかしたら、そのうちお前たち学生も地上に派遣されちまうかもな」

その話を聞いて、ヴィエがハクスイの表情を伺う。

「そんなこと、るーちゃん、一言も言っただけなのに……」

かたやハクスイは無表情で黙ったままだった。シュレエルは卓上のマグカップに手を伸ばし、コーヒーをすすりながら告げてくる。

「ま、これからは、カップル同士で、精進してくれ。先生は応援しているからな」

ヴィエが突然むせた。

顔を赤くしながら、シュレエルに食ってかかる。

「ちょ、ちょ、ちょっと、なにを言っているんですの！　カップルって！」

「ん？　そうなんだろう？」

「ゼンツゼン、ゼンゼン違いますの！　ゼンゼン違いますし、その上ゼンゼン違います！」

「そこまで言うか。いや、しかしヴィエくん、もうネタは上がっているのだ」

シュレエルは咳払いしてから、にやりと笑う。

「お前たちがどんなに隠そうとしても、休日の公園で情熱的に抱き合っていた姿を、生徒が目撃している。もう学校中に知れ渡っているぞ？」

「こ、公園……えっ、あつ……が、学校中に……？　な、なんてことを……！」

グイエはたちくらみを起こしたようにふらつく。

「いやあ、若いというのは、いいな。恋が機奨光の増量に繋がることは、明白だ。これからも幸せな生活を送ってくれよ、ははは」
「だから、違いますの！　大体あれば――」

天使がコイバナを好むというのは、教使とて例外ではないようだった。ほわわーんと機奨光を撒いているシュレエルは、なかなか気持ちが悪かった。

グイエとシュレエルの口論をどこか遠くに聞きながら、ハクスイはぼんやりと考えていた。

（ルノが俺に付き合う理由は、もうこれで、本当になくなっちまったのか……）

何もかも諦めているつもりだった。全てを期待せず、受け入れて生きるのだろうと思っていた。だが、想像した以上にショックを受けている自分に気づいて、ハクスイは胸に手を当てる。

（次に会ったら……やっぱ、まずは、礼を言わなきゃな）

ルルノの太陽のような笑顔を思い出しながら、とりあえずハクスイはそう決心していた。

第四話 - 5

シユレエルが言った、“噂は学校中に広まっている”というのは、あながち冗談でもないようだった。職員室を出たハクスイとヴィエが並んで歩いていると、あちこちから指を差された。これまでもずっと恐れられてはいたのだが、しかしそれは違う感覚で、どちらかというと羨ましいものを見るような視線であつた。

「……なんなの、このミィハーさ……」

廊下を歩いているだけで、羨望の眼差しを浴びている。ヴィエは不機嫌を装つてはいるが、耳まで赤くなっていた。

「ルノから聞いたんだけどよ」

ハクスイの声に耳を寄せると、あちこちから「きゃー」という叫びが上がる。ヴィエは辺りを睨んで視線を散らす。

「天使にとつての恋つてのは、一生に一度って感じのものなんだつてよ」

彼らしからぬロマンチックな語り口に、思わずドキドキとしてしまった。

「そ、それで？」

「失恋すると機奨光が全損するくらいの衝撃を受けるから、天使はまさに命がけで恋をしているとかでさ。だからこそ憧れで、天使は他人の恋愛に首を突っ込みたがるんだって」

「へ、へえ……で、でも、わたしたちのこれなんて、ただの勘違いなのね。それなのに食いつくなんて、とっても飢えているのね」

「ああ、そうだな。巻き込んで悪いな。放っておいたら、いつか消えるだろ、噂なんて」

「べ、別に……嫌、ってわけじゃ、ない、けど……」

ヴィエが首を縮こまらせていると、突如として声をかけられた。

「やつ、少年」

前につんのめるようにして、ハクスイは足踏みする。彼の背から誰かが抱きついてきたのだ。

「——！」

ヴィエが声にならない叫びを上げる一方、ハクスイはいつも通り冷静だった。後ろから抱きすくめられた姿勢でハクスイは肩越しに振り返る。

「……先生？」

わずかに驚きが混じっていたが、それは抱きつかれたことではなく、彼女を学校で見るのが意外だったからだ。クリアファイルを脇に挟んだスーツ姿の美女が、嬉しそうに腕を絡めてきていた。黒髪の女性から視線を移して、ヴィエが尋ねてくる。

「だ、誰なの？」

「この人がアマド先生だよ、かかりつけの」

そう言うのと、「あ、なるほど……お医者さんの……」とヴィエは納得したようだった。

「またまた、そんなビジネス上の関係みたいにな、他人行儀さね、少年」

「俺をどういうノリにしたいんですか」

頬をすり寄せられて、ハクスイは嫌そうな顔をする。ヴィエもまた、「ハクスイの主治医さんが、こんなに若くて綺麗な人だとは思わなかったの……」と複雑そうな表情をした。アマドを無理矢理に引き剥がしてから、ハクスイは問い直す。

「んで、なんでまた、きょうは学校に」

「この学校の生徒さんに、用があったのさ」

くねくねとなにやらポーズを取りながら、アマド。彼女にルルノほどの機奨光があつたら、さぞかし機奨光効果が鬱陶しいことになっっているだろう。

「八年前の大襲来で大怪我をした子の、その後の経過を観察しに、さね」

「ちゃんとした仕事っぽいすね」

「じゃあ、それと少年にも会いたくて会いたくて、二週間に一度の逢瀬が待ちきれなかったから、つい来ちゃったのさっ」

「なんで笑いを付け加えようとするんすか……」

ハクスイは脱力する。

「いやあしかし、あれだけの機奨光を持っている学生がいるなんて今の時代は進んでいるさねえ」

「それって……もしかして、ルノのこと、ですか？」

「すごいよね、300万ポジって」

アマドはあっけらかんと笑う。

「別にそれは、あいつが努力して勝ち取った数字でしょう。俺も頑張らねえと」

「へえ」

ハクスイがはっきり言うと、アマドはなぜか嬉しそうに目を細めた。

「少年は、なんだか前と感じが変わったね」

「そうっすか？」

「なんだかあんまり悲観的にならなくなったように思えるよ。これも、機奨光のおかげかな」

「……まだたつた3ですけどね」

ハクスイは恥じるようにそっぽを向いた。その顔がどことなく嬉しそうに見たのは、ヴィエの錯覚ではないだろう。

彼の姿を初めて見たのは、高校に入学してすぐのことだった。

学校の武道場にて、少年はただひとりで木剣を振るっていた。まだ朝も早く、他の生徒も登校してきていないような時間帯で、早朝練習に励んでいる姿を見たのだ。

（誰かな、あたしと同じ一年生みたいだけど……）

黒髪を振り乱している少年は、自分の目から見ても見事な太刀筋だった。何よりも体のキレが違う。あれほどの武芸を持つ天使は、学校の教師にもそういないだろう。

（すごいや、なんて人だろう。あの人はすぐに彩光使になっちゃいそうだな……あたしも負けてられないや！）

「ハクスイつてば、またひとりで……もう、次はわたしも来るって言っただのに」

「ハクスイ？」

「あら？」

いつのまにかそばに立っていた女子生徒と、目が合った。

（うわあ、こっちの人はすごい綺麗な人だなあ……！）

少しの間、見惚れてしまった。長いプラチナブロンドが彗星のように輝いている少女だった。

「あなたも、新生？」

「う、うん、ルルノだよ！」

「あら、そうなのね。わたしはヴィエ。ところで、こんな朝からあなたも武道場をしようとしていたの？」

「えっと、最初はそのつもりだったんだけど、なんだか使っている人がいるみたいだから」

「こんなに広いんだから、一緒にしたらいいのよ。ハクスイはひとりで没頭しているみたいだから」

「いや、でもすぐく集中しているみたいなのに、邪魔しちゃったら悪いからさ……うん、まだ出直してくるから大丈夫！」

「そう？　なんだか悪いの」

「大丈夫大丈夫、大丈夫だから！　えと、あのにーさん、ハクスイって言うんだね」

「ええ、無愛想でぶっきらぼうで無表情の男は、そういう名前なの。まったく……いつでも先にいつちゃっているんだから」

はあ、とヴィエがため息を漏らす。

ルルノは目をきらきらさせながら、黒髪の少年を見つめていた。
(ハクスイにーさん、かあ……)

ルルノが実際にハクスイに声をかけるのは、それから一年と数ヶ月後のことである。

少年の頑張りをずっと見つめていたからこそ、二年生になったハクスイがクラスメイト全員抜きを果たしたときには、つい興奮してしまったのだ。

ユメに言われるまでもなかった。本当は、自分がハクスイに恋をしていることなんて、とつくに気づいていて――

――ルルノノは気づいた。

「え？」

ハッとして我に返れば、景色は一変していた。機方舟に寄りかかっていたはずの自分は公園の中央に立ち尽くしていた。仲間の何人がが倒れていて、夕焼け空ではいくつかの黒い影と白い風たちが激突を繰り返して、火花を散らし、そうして自分たちの乗る機方舟が燃えていた。

「え、なに、これ、なに」

丸ごと記憶が抜け落ちていて、そのあまりの不安感から動悸が収まらなかった。その手に『光の戦斧』を作り出すも、状況が飲み込めないため、機奨光の輝きは乏しかった。

白い風のひとつが悪魔を弾いた後、ルルノノの真横に飛び降りてくる。桃色のポニーテールのユメだ。息を切らしながらも、光の弓を打ち続けて悪魔たちを牽制していた。

「ルルノノさん……」

「ユメちゃん！ これってさ、一体」

その間にもユメは夕陽の空へと光の弓を二射する。彩光使の隊を悪魔たちは数で押し切ろうとしていた。空を飛び回る悪魔の数は五十を越えているだろうか。まるで目が覚めたら、悪魔の世界に連れ去れてきてしまったかのようなだった。

「あ、危ない！ 今すぐ、助勢しなきゃ」

空を仰ぎながら機奨翼を広げたルルノノの外套の袖を、ユメが掴む。

「ユメちゃん……？」

「大悪魔です……あれは、大悪魔だったんです……」

悪魔の鳴き声が響き渡る中、ルルノノの前には、一匹の黒猫がやってきていた。尾を持ち上げながら歩くその様は美しく、不気味な魅力を醸し出していた。

「……大、悪魔……？」

身の毛がよだつ思いがした。高等な悪魔はカラスではなく、黒猫に化ける。そのほうが人間たちに密接する機会が、より多くなるからだ。不吉の象徴とされる黒猫は、天使にとってもまた、縁起の悪い生き物であったが、まさか、本当に大悪魔なのだともいうのだろうか。

「にゃあ」と鳴く黒猫が、笑ったように見えたその瞬間だった。

黒猫の小さな身体が、人間のそれへと変幻してゆく。黒い毛は絹となり、夜の闇を編んだようなドレスに変わった。四肢は細く伸び、艶やかな黒い肌となった。最終的に黒猫は禍々しい少女の形を取った。容姿だけならば、人形のように華奢で可憐な姿であったのだが、彼女の発散する冥混沌は見ているだけでも陰鬱になってしまうような恐ろしさで、ルルノノの身体は震えてしまった。赤い目をした少女は微笑み、指をこちらに突きつけてくる。

「良イ夢を見せてアゲルわ」

渦潮のように迫ってくる冥混沌に目を奪われているルルノノに、ユメが叫んだ。

「だめです、ルルノノさん！ 大悪魔の眼を覗いたら、心を直接攻撃されてしまいます！ 大悪魔は、ただの悪魔とは違うんです！」

しかし、時はすでに遅かった。
ルルノノは再び黒猫のさせる夢に、心を奪われたのだ。

第四話 - 6

ハクスイがすっかりと日が落ちた校内にて、帰る準備を整えていたところだった。

視界が明滅する真つ赤な光に塗りつぶされたかと思うと、その直後に警報が鳴り響いた。

「え？」

唸りをあげながら、校舎自体が赤く光っているのだ。まるで火災警報のようだった。

「こりゃあ……学生を招集するときの、警報か……？」
「ということは、つまり――」

「地上に降りていた彩光使に……なんか、あつたんだ」

ハクスイは歯を食いしばりながら、拳を握り締めた。

ハクスイは教室を飛び出した。どうしてだか、ルルノノが暗闇の中で落ち込んで震えているような、悪い予感がしていた。

「悪魔の野郎め……」

校庭には大型の機方舟がいつでも飛び立てるようにうなりをあげながら停泊していた。形状はルルノノやユメのそれと似ていたものの、大きさがその四倍以上もあった。華やかさが微塵もない無骨な黒鉄色の塗装は、どこか血生臭い現実を突きつけてくるようだった。

大型の機方舟は天使を何十人単位で運搬するものであり、大きく開いた扉の中に、事情を理解した学生たちは、次々と飛び移っていた。

「点数を稼ぐチャンスだ!」「出席日数もボーナスつけてもらえるってよ!」「将来の彩光使試験の面接で、有利になるみたいだしな!」「わたしも頑張らなきゃ!」

騒いでいる学生たちはまるでお祭り気分だ。文化祭に似た熱気の中、何人かの教使も声を張り上げており、ハクスイはそこにシユレエルの姿を見つけて駆け寄った。

「おお、ハクスイクンか。良かった、まだ学校に残ってたんだな」

「先生、これって、地上になんか……あつたんですか」

「ああ……彩光使が多数の悪魔に襲われてな、冥混沌を払うラツパ隊などの手が足りなくなってしまったんだ。フィノーノ中の彩光使を総動員しても間に合わなくてな、それで、とりあえずはうちの学校から協力者を募っている。この船は直接戦闘の可能性がある地点へ飛び立つもので、三年生に率先して乗り込んでもらっているが」

「ルノは」

「ルルノくんも、恐らくそこにいるだろう。あるいはもう少し奥にある、悪魔の中心地か」

「なら、俺も行きます」

「ハクスイクんにそう言ってもらえると助かる」

ハクスイは機方舟を取り囲んで物見している生徒たちの輪をかき分けて、ハツチへと向かう。その中に、顔色を悪くして立ちすくむ生徒がいた。ハクスイとともに伝説を作った二大天使のうちの片割れは、まるで初めて武術の授業に挑む一年生のような心細い顔をし

ていた。

「わたしは……わたしは……でも……」

まだ帰ってなかったのか、あるいは途中で警報を聞いて引き返してきたのか、それはヴィエだった。俯く彼女の肩を、ハクスイは軽く叩いた。

「無理すんなよ」

「えっ？ あっ……は、ハクスイっ」

「悪魔は俺がぶっ倒す。だから、お前は待ってろ」

そう告げてハツチに乗り込もうとしたところで、後ろから制服のワイシャツの裾を掴まれる。

「……やだ」

振り返るとヴィエは、玩具を買ってもらうまで動かないと言い張る子供のような顔で、きつく目を瞑っていた。

「わたしだって、ハクスイと、いっしょに、戦うもの……！」

「お、おい、お前」

ヴィエは先に機方舟に乗船すると振り返ってきて、精一杯の強がりとともに、胸に手を当てながら言い放った。

「平気よ……悪魔との戦い方なら……な、な、習ったもの……！」

「ムキになっているだけだろ、そりゃあ」

つぶやきながら、ハクスイもまた機方舟乗り込む。しかしヴィエは頼りない口調ながらも、しっかりとハクスイの目を見て告げている。

「い、いいじゃない、ムキになったって……頑張るって、決めたんだから、頑張ったって……！ 無理するな、なんて、言わないでよ……きゃっ」

そうヴィエが言った直後に、機方舟は上昇を始めた。ふわりとし

た浮遊感に態勢を崩したヴィエは、空いたままのハツチから落ちそうになったところを、ハクスイに抱かれて助けられる。

「……わかったよ。ただ、俺のそばを離れるんじゃないぞ」

「う、うん……ありがと、う……」

その甘いやり取りの直後だ。彼らが恋人同士なのだという噂を聞きつけていた学園の同乗者たちから、一気に歓声が上がっていた。

〃

「……もう、美月ちゃんのことなんか知らないよ！」

「……わたしだって、瞬くんと、最初から付き合わなきゃ良かった……」

公園の前の道を、少年と少女が喧嘩をしながらそれぞれの方向へ別れてゆく様を、ルルノノは膝をついてとても悔しそうな顔で見つめていた。

「だめだよ……そんなこと言っちゃ……」

彼女の周りには、倒れている天使や、機奨光がなくなりかけて動けなくなっている天使たちが、カラスに荒らされて散らばった生ゴミのように散乱していた。その中には「ふぁ……」と目を回すユメの姿もあり、もはや意識が残っているのはルルノノだけであった。

ルルノノの300万ポジの機奨光は見る影もなく、大技どころか、機奨翼の発現すら怪しかった。そんな彼女がともに戦えるわけもなく、光の薄くなったハルバードを地面に突き刺し、それでようや

く身を起こしているような状態であった。彩光使の外套はあちこちが破け、フォークスピアで刺された痕からは、血のような赤い機奨光が流れ出ていた。

悪魔たちは笑いながらルルノノを罵倒し、飛び回る。

「それ見たことか！ それ見たことか！」「チビのくせにいきがりおつて！」「いつもは威張っている天使が俺たちの前にひざまずいている！ キモチイイ！」「さすが大悪魔さま！ 面倒事を引き受けてくださる！」「大悪魔さまバンザイー！」

たくさんの悪魔に混じって、大悪魔が、ルルノノの元に歩み寄ってゆく。

猫の耳と尻尾を持つ少女は、何も知らない無垢な子供に現実を教え込むような下卑た笑みとともに、ルルノノの顎を掴んで、無理矢理に顔を自分の方に向けさせた。

「だってあなた、DMなんでしょう？ ホラ、楽しみましょう」

「やだよ、こんなの……」

黒猫はルルノノの心の中を決る。

「こんなの、にーさんと違って、ゼンゼン、楽しくないもん……！」

「あら、あなた、好きな人にされていたからって悦んでいたの？」

とんだヘンタイだワ。ひどいわね。あなたの本性を知ったら、周りの天使はなんて言うのかしら」

ルルノノは力なく首を振る。大悪魔には手も足も出なかった。

「気づけなかったじゃ、済まされないデショウ？ 何度でも見せてあげるワ、あなたの……」

勝利を確信しておきながら、大悪魔は何らかの目的のために、ルルノノを執拗に追い詰め、弄ぶのだ。ルルノノは目を閉じ、耳を塞いで、叫ぶ。

「やだ……あ……！」

『きょうも一緒に帰ろうよ、にーさん！』

ルルノノはハクスイに抱きつき、腕を絡ませた。

『ああ、今準備するからひつつくなよ』

『えーへーへー』

ふたりはお似合いのカップルだと周囲にも認められ、そうして憧れられていた。恋人としての喜びを手に入れることは、“愛のキューピット”の名を持つ天使としては、彩光使になることよりもずっとずっと幸せなことであるように思えた。

『それよりもルノ、彩光使の仕事に行かなくていいのか？』

『そんなのもういいよ！ あたしはにーさんというほうが大切なんだもん！』

ルルノノは満面の笑みをハクスイに向ける。

皆にさよならの手を振って教室を出ようとしたとき、ヴィエと目が合った。ヴィエもまた、ふたりを祝福するように真っ白な笑顔をしていて。

『じゃあね、ハクスイ、るーちゃん』

「——違う！」

凍りつくような冥混沌の冷気を、ルルノノの叫びが打ち砕く。ル

ルルノは片膝をついたまま、灼けた目で大悪魔を睨む。

「あたしは、そんなこと言ったりしない！　だって、恋愛なんて、結局は自分のためではないんだもの！」

「あら、まだ起き上がろうとしているだなんて、タフな子だワあ」

ルルノは土を掴む。その手のひらに、短いハルバードが現れる。

「あたしは恋なんて、しないよ……だってそんなの、自分と相手だけが楽しくなっちゃっても、仕方ないんだもん……！　あたしの力は、みんなのためにあるんだ！　あたしは人間と、天使を守るんだよ！」

「利他的な子ねえ……その強情さは、どこから来たのカシラ」

ルルノが横薙ぎで繰り出したハルバードは伸びて、大悪魔の脇腹に突き刺さる。だが悪魔は顔色ひとつ変えていなかった。

「そんなっ！」

「あと一押ししてところかしらね」

大悪魔はそう言って笑うと、ルルノの光の戦斧を手繰り寄せる。手を離す暇もなく、あっという間にルルノは大悪魔の前に引き摺り出された。

「どうしてそんなに自分を排してしまったの？　ねえ、アナタ……教えてよ、ウフフフ」

歯を食いしばるルルノの心の奥に、大悪魔は入り込む。

第四話・7

下界近くを舐めるように機方舟が飛び回っていたときだ。地上の道端で喧嘩している少年と少女が見えて、「ん……ありや……」とハクスイは思わずつぶやいてしまった。

気を取り直して、ハクスイは機方舟の中に立てかけられていた槥の棒を掴む。握りを確かめっていると、なぜだかヴィエが怒ったような顔で指を突きつけてきた。

「つて、ハクスイ！ あ、あなた光輝武装じゃないじゃないの！」

「あ？ ああ、まあな。俺は未だにほとんど機槩光ねえし」

「そ、そんなので、悪魔と戦うの？ 本当に？ 平気なの？」

「なんとかなるんじゃない？ 悪魔に石投げたときも効いてたしな」

「い、石つて……ハクスイの前向きさが、変な方向に向かっている……」

呆れられてしまった。そのとき、機方舟が急速に速度を落とした。目的地に到着したらしく、機方舟は上空でホバリングしていた。やけに明るい声の女性のアナウンスが流れる。

『さあみなさん！ 頑張つて、悪魔を最後の一兵まで！ 根絶やしにしてしましましょう！』

だがやはり、我先にと飛び立つものはいない。誰もが緊張している上に、下方には大勢の悪魔の姿が見えていた。そんな行き場のない空気を物ともせず、ハクスイはヴィエに問いかけた。

「ヴィエ、お前は翼出せたっけか」

「う、浮くくらいしかできないけど」

「時間もねえし、十分だ」

ハクスイはヴィエの手を掴んで、機方舟から飛び降りる。辺りがざわめき、ヴィエが叫んだ。

「き、きゃあああああ」

「頼んだぞ、ヴィエ」

「ちょ、ちよつと、あの、えっ、やだ、もう！」

ヴィエが39ポジの機奨光を放出し、幼児の持つような小さな翼を生やして、顔を真っ赤にしながら一生懸命羽ばたく。ハクスイはその細い足を掴みながら、彼女にぶら下がっていた。

「ぜ、絶対、う、上を、み、見ないでよ！」

「あ、ああ？ ああ、なんだ、パンツか。別にいいよ、昔から見慣れてたろ」

「な、なんでそういうこと、言うの！ だ、だめだって言ったのに！ ハクスイのばか！」

その瞬間、ヴィエの翼が消失し、ふたりは自然落下した。これにはハクスイも狼狽する。

「ちょ、なんで機奨光なくなるんだよ！」

「だ、だって！ なんだパンツか、なんて言うから！ 興味なさそうだから！」

「いやあ、ヴィエの下着が見れてすっげー幸せだなー、心がポカポカしてくるなあ、なんて言えるかつ！ その褒め言葉は優しさじゃないだろ！」

ハクスイは地面が近づいてきてパニックに陥るヴィエを脇に担いで、身体を平行に保つよう態勢を整える。

丁度良い位置を飛んでいた悪魔の頭を踏みつけて、跳んだ。

「グエツ」

浮雲を乗り継ぐように、ハクスイは次々と悪魔を踏みつけて衝撃を緩和しながら跳躍する。

「ゲエツ！」「ギャ！」「ギョエツ！」

そうしてついに大地に着地した途端だ。機方舟から歓声が降ってきた。クラスメイトたちも見守っていてくれたのだろう。見事な身のこなしを披露したハクスイは構えるが、持っているのが槥の棒なので、悪魔たちも相手が一体何者なのか戸惑っているようだ。

「よし、なんとかなったな」

「あ、悪魔が……」

「ああ、たくさんいるな、ヴィエ。倒しがいがあるだろ……だけど、ルノはここにやいねえのか。やれやれ、奥に行くしかねえみたいだな」

ハクスイの大胆なダイブにより、学友たちも勇気をもらったように、次々と機方舟から降りてくる。しかし、抜け目ないカラスの一言がまたしても状況を変えた。

「こいつら、彩光使じゃねえぞ！ 学生だ！」

その叫びに、悪魔たちは互いに顔を見合わせ、欣喜の声を上げた。

「学生か！」「高校生？」「学生だど！」「マジだ、学生か！」

「なんだ、クズの集まりじゃねえか！ 震えてやがるぞ！ ギャツ、ギャツ！」

初の実戦にこの先制攻撃は効いた。学生は顔を見合わせて、最初の一步を踏み出すことができなくなった。膠着状態は悪魔に有利以外のなにものでもない。悪魔たちは好き放題に叫ぶ。

「てめーらなんて一生彩光使になれねえよ！ 明日を諦める！ 夢を諦める！」「いきなりやってきて上手くいくとも思ったのか！ バーカ！ そんなの物語の中の話だけなんだよ！ バーカバーカ！」「それ見たことか！」「痛い目に遭いたくなければさっさと消えろ！ 彩光使が負けたのに、ガキが勝てるかよ！ それとも刺しまくられたいか！ ヒヤッヒヤ！」

おろおろと学生たちは左右を見回す。一度でも「そうかもしれない」と思ってしまったら、もはや悪魔の思いつぼだ。目眩を覚えて、ヴィエは口元を手で押さえた。

「これじゃ……あのときと、同じ、なの……」

夜の公園で悪魔に取り囲まれている自分たちは、あの暗闇の体育館に避難していた八年前の自分たちと変わらなかった。嫌な考えが頭の中をかき乱す。ヴィエの機奨光はヒビ割れてしまいそうだった。恐怖がヴィエの視界を狭めて、耳を聞こえなくしたその時、光を持たない天使が歩み出た。幼いときから、彼は誰よりも頼りになった天使だ。

「うるせえ！」

ハクスイは一喝した。その直後、悪魔たちの罵声がびたりと止む。「黙って聞いてりゃ、てめーらはどんだけ偉いんだよ。人のやることをバカにする資格があるってのか、ああ？ 悪魔風情が、なめた口聞いてんじゃねえよ！」

その不遜な態度に、「なんだあいつは？」と悪魔たちがざわめきだす中、ただひとり、「あ、あいつは……あのときの……」と震える悪魔がいた。彼は以前、ルルノと初めて地上に降りたときに石を投げつけられた悪魔だった。

「最初から諦めることしかできないように作られたお前たちとはな、こいつは違うんだ」

ハクスイは櫂の棒を肩に担ぎ、ドスの効いた声で悪魔たちを威嚇する。

「辛くても、それでも克服しようとする無理して頑張っているやつなんだよ。このヴィエはな」

「ふえっ！」

唐突に振られた話題に、ヴィエは銀髪を逆立たせて驚く。そんな彼女の腕を引いて、ハクスイはヴィエを悪魔の目に晒す。

「お前ら悪魔がどんだけ騒ごうがな、ヴィエは気にしねえよ。ムダなあがきだぜ。ピーチクパーチクさえする暇があったら、武術の腕を磨くんだったな。今さら遅えけどな、な、ヴィエ」

「は、ハクスイ……」

「ここまで頑張ったら、あともう少し頑張ってみりゃいいだろ。あとは戦うだけだぜ。相手をぶっ壊すのは、お前の一番の得意技だろうが」

ヴィエの腕を引き寄せてそう告げるハクスイの姿に、ひとりの生徒が、「愛だ……」とつぶやく。少し遅れて、拍手が鳴った。それは少しずつ数を増し、いつしか学生たちは、「愛の力だ！」やら、「なんだか知らないが感動した！」とか、「恋って素晴らしいわ！」だとか、勝手なことを口走りながら手を叩いていた。

「やつ、ちがつ、そんな、は、ハクスイっ」

周囲の雰囲気流されてなんだかわからないテンションになっていたヴィエが、頬を紅潮させながら近くにあるハクスイの顔を見上げると、彼は静かにうなずいた。

「あるだけ出してやれよ、お前の機奨光」

悪魔たちは、「愛だと……？」と、親の説教を受けた反抗期の子供のような嫌そうな顔をして、なぜだかとてもなく怯んだ様子だった。

「は、ハクスイ……や、やってみるけど、笑っちゃ、だめだからね」「笑わねーよ」

ヴィエはゆつくりと目を閉じて、手のひらに暖かな白光を浮かべる。体中からかき集めた機奨光を右手に形取る。やがてそれは、彩光使のものとは比べ物にならない程度のほのかな蛍光を明滅させながら、非常に刀身の短いナイフに変わった。『光の刃』とでも言うのだろうか。ヴィエはハクスイを肩越しに振り向いて、視線を漂わせながら、つぶやく。

「こ、これくらい、だけど……」

「上出来だろ」

ヴィエの勇気をあざ笑い、「なんだそのおそまつな装備は！」と叫ぶ悪魔たちを尻目に、ハクスイは堂々と彼女の代わりに胸を張った。

「俺の武器を見ろよ。棒だぞ。こいつに比べて、どれだけ頼りになると思っただ」

その言い草に、ヴィエは一瞬ぽかんとした表情をしてから、噴き出した。

「なにそれ、やっぱりハクスイだって、不安に思っているんじゃないの」

ヴィエは口元を緩めながら、悪魔に向き直る。彼女は理解した。あの時とはもう違う。違うのは、自分だ。今の自分には戦う力がある。そして、頼れる学友たちがいて、ハクスイと肩を並べている。こんな絶好の機会にくじけているのは、損だ。

「あとはわたし次第ってことなのね……いいの、あのときみたいに、子供じゃないんだから」

ヴィエは光の短剣を顔の横に掲げ、放つ。

投げつけた刃は、「あいつだ！ あいつだ！」と叫んでいた悪魔の喉元に吸い込まれるようにして刺さった。それは決して裏切らない鍛錬の成果だ。急所に短剣を生やした悪魔は、嘘のようになく霧散した。学生が歓声を上げ、悪魔がどよめき、ハクスイは当たり前のような顔をしていて、ヴィエはきょとんと目を丸くした。

「……なによ、これ。あつけなさすぎじゃないの？」

「ほら、なんとかなるもんだろ、ヴィエ」

ハクスイの言葉は、無責任で、気楽な無謀さであった。そこでヴィエは思う。八年前のハクスイの行動は決して勇気などではなく、もしかしたら、やってみたらできただけのことだったのかもしれない、と。ただそれだけのことだったのだろうかと思えば、一気に心が軽くなった。

「そうね、ハクスイ。こんなに簡単なテストなのに、わたしはちょっと、勉強をしすぎちゃったのかもしれないの」

くすりと微笑むその瞳に、徐々に光が戻ってゆく。ヴィエの手に集まった機奨光がその瞬間、形を変えて成長した。ナイフのようだった光輝武装はヴィエの身長よりも長く伸び、槍へと変貌した。それはヴィエの最も得意な武器であった。ヴィエはその変化をも容易く受け入れる。

「これが、悪魔なのね。なによ、人のこと、ずっと、ずっと驚かし

て」

彼女の背から生えた一對の翼が大きく羽ばたく。ヴィエは飛んだ。悪魔の集まっていた輪の中央に降り立つと、彼女は八年間内に秘めた機奨光を容赦なく発散しながら、槍を振り回した。

まるでルルノのような武芸に、悪魔の何匹かが千切れて風に撒かれていった。

その直後、関の声が上がった。それが開戦の合図であった。悪魔たちは散り散りに宙に浮かび、こちらをめがけてフォークスピアを振り下ろしてきた。学生たちもまた、ヴィエに続こうとそれぞれ光輝武装を持ち、関の声をあげながら悪魔に立ち向かってゆく。

第四話・8「いい夢をありがとう」

ハクスイはヴィエの活躍っぷりに、目を奪われていた。

「ハクスイ、わたし、ずっと、できるわけがないって思っていたの」
ヴィエの伸ばした槍が悪魔の腹部を貫き、その身体を冥混沌の力
スへと変える。今までヴィエが浮かんでいた位置をスピアが刺すも
の、そこにはもうヴィエはいなかった。ヴィエが空を舞うことに、
白い羽が雪のように降る。

「す、すげえな……ヴィエ」

人並みの機奨光どころか、天ツ雲のエースになれるほどの光だ。
襲いかかってくる悪魔たちを櫂の棒であたしらっていたハクスイが、
感嘆の声を漏らす。

「ねえ、ハクスイ、悪魔って、とっても弱いのに！ 信じられない、
まるでゴミみたい！ こんな弱い子たち、わたしが皆殺しにしちゃ
うんだからっ！」

ヴィエは素敵な笑顔でそう告げて、さらに悪魔を二匹串刺しにし
た。悪魔を倒せば倒すほどに、ヴィエの白光は濃く、強くなつてゆ
き、それはまるで、己の心の闇を払う復活の儀式のようであった。
零れた光が粉雪となって地上に舞い落ちる。

「ねえハクスイ！ 戦うのって、楽しいのねっ！」

機奨光が溢れたことにより、性格まで変わったかのように、ヴィ
エは朗らかに笑っていた。

「……何にせよ、助かるってもんだ」

彩光使の小隊長級の活躍を見せるヴィエのおかげで、他の学生たちも次々と奮起していった。悪魔と光を交えた学生たちは、口々に「ハクスイクんに比べたらなんでもねえ！」だとか、「ヴィエさんに叩かれたほうがずっと痛かったわ！」だとか叫んでいたのが多少気になったが、ハクスイは縦横無尽に飛び回るヴィエに声を張り上げた。

「ヴィエ！ ちょっと奥に行きたいんだが、道を切り開いてくれっかな！」

「えへへっ、お安い御用なの！」

ヴィエは手を広げる。すると、雪が降り積もるように彼女の周囲に12本の光り輝く槍が生まれた。光輝武装の遠隔操作と、複数召喚の同時展開術だ。学校ではまだ習っていないどころか、彩光使の中にも使い手はそうそういない。だがこれは、かつて彩光使として数多くの悪魔を葬り去った、女神ヴィルシアの得意技だった。

氷のような蒼煌を放つ槍はヴィエの周囲を旋回し、彼女の言葉とともに疾駆する。

「わたしの想い、風を突き抜けて羽ばたけ！ 『バトリオノウ雪華美人』！」

機奨光の輝きが、ヴィエの背中から雪の華のような模様を描いて広がった。スカートが翻り、水色のショーツがあらわになり、すぐに隠れた。ヴィエの手を離れた槍は、それぞれ12の軌跡を描いて空を舞う悪魔たちを一匹たりとも逃さず撃ち抜いてゆく。撃墜された悪魔は、12匹同時に黒い霧を吐き出して霧散した。

その足元を駆け抜けながら、あまりの無慈悲な行いを目撃したハクスイは、悪魔にすら同情を禁じえない。

「容赦ねえな……じゃあ、あとは任せたぜ、ヴィエ」

「あつ、待つて、わたしも行くのっ」
慌てて降りてくるヴィエを伴い、ハクスイはさらに奥へと駆けてゆく。

公園の中央に向かうにつれて、冥混沌の色が濃くなってきた。辺りを漂う冥混沌のせいか、深い霧の中にいるような心細さが胸を締めつけてくる。ハクスイの近くを浮遊するヴィエもまた、身体を抱いていた。

「……なんだか、こっちは、嫌な予感がするの」
「なら正解かもな」

ヴィエの身体から発散する機奨光と冥混沌が対消滅を起こし、きらきらとあられのような光が舞う。一方、機奨光がないハクスイは、泥のようにまとわりつく冥混沌を手で払っていた。

これ以上進んでは、せっかく復活したヴィエの機奨光に支障を来たすかもしれないとハクスイが思っていたところだ。やってきた先には、一匹の黒猫が寝そべっていた。猫はにやおんと鳴く代わりに、しゃがれた笑い声を上げた。

「クスクス……来たのね、学生さん」
その黒猫を見た途端に、ハクスイのこめかみにうずくものがあつた。

「黒猫……？ ひよつとして、お前、大悪魔ってやつか……？」
「ベオラと呼んでくれてもイイわよ」

黒猫が伸びをすると、その姿は小麦色の肌の少女のものへと変わった。彼女の佇む空間だけが月や星の光も届かず、周囲が歪んで見えるほどの、濃い冥混沌が発散されていた。

「……お前が、この騒動の原因だな」

「そうヨ。もう、終わったケドね」

「……終わったってなんだよ、なんの話だよ」

不吉がハクスイの首筋を撫で上げる。この場から全力で逃げ出してしまいたい衝動が沸き上がってきて、自制をするだけでも精一杯であつた。

「それはこつちの話。あなたたちには関係がないデシヨ？ それとも、少し遊んでいく？」

少女が掲げた右手から黒い炎が立ち上る。大悪魔の使う『常闇武装¹』だ。単なる悪魔のフォークスピアとは比べ物にならない禍々しさである。並の天使であれば、撫でられただけでも機奨光を根こそぎ奪われてしまふに違いない。だがすぐにベオラは自ら炎を消した。それから、地の底まで届くような深いため息をつく。

「ああ、でも、とても面倒だワ……働き出すと、これだから、負けた気分になるのよね……」

「な、なんなの……？」

ベオラは全ての事柄から興味を失ったような顔をして、ふたりに背を向けた。

「バイバイ、子どもたち……私は帰って寝るから……」

「そんな、逃すわけないの！」

アグレッシヴになったヴィエは、ベオラの背に槍を突き刺そうと飛ぶ。銀色の輝きが尾を引き、その槍がベオラの背に触れるか触れないかといったところで、振り向いたベオラの目がヴィエを捉えた。その瞬間、電源が切れたかのように、ヴィエの身体は一切の機奨光をオフにして、地面を転がった。ハクスイがヴィエの名を叫ぶが、彼女は微動だにしなくなる。

「学生さん、悪いけれど、あなたたち程度じゃ、ただただ面倒でしかないからね……自分の存在意義を見失ってしまつくらいにネ」

「てめえ……ヴィエになにをした……」

「ちよつと脅かしたただけだワ」

木の棒を握り締めるハクスイに、ベオラは眉根を寄せながら、囁く。

「もうイイでしょ。きょうのところは、こっちから帰ってアゲルっていうんだから、早くおうちに帰って寝るんだから、どいて」

ベオラの目が、ハクスイの精神を捉えた。その瞬間だ、ハクスイのまぶたの裏に思い出がフラッシュバックした。小学生の幼いミズカがいた。あの当時、ミズカはまだ悪魔に襲われた恐怖から立ち直れずに、たびたびハクスイのベッドに潜り込んでいた。

『どうしたミズカ、怖いのか？』

『うん……おにいちゃん、一緒に寝ても、いい……？』

ハクスイが上目遣いのミズカを放っておけるはずなどない。その柔らかな髪の毛の香りを思い出す。丸くて紅の差した頬が、ほっそりとした顎が、白い肌が、ハクスイの精神を支配する。ぱつちりと大きな瞳でハクスイの顔をのぞき込んでいたミズカが、桃色の唇を歪めて、囁く。

『おにいちゃん、本当に、気持ち悪い』

なにかが粉々に砕けてしまいそうな衝撃が、ハクスイの全身に走った。

「うおおおおおお」

頭のとっぺんから爪先まで、黒々とした感情が全身に行き渡る。

実際にミズカからそんなことを言われた覚えはないが、今見たそれは、現実起きた出来事のように鮮明だった。

「なんだ、これ……！　これが、大悪魔の技かよ……！」

ハクスイは機奨光を求めるように喘いで、脂汗を垂れ流す。

「これがあなたには最も効果的な攻撃ナノね。いつまでも、そこでうずくまってなさい——」

そう言った次の瞬間だ。ベオラは飛び退いた。ハツとして見れば、ハクスイが棒を先ほどまでベオラの立っていた位置に叩きつけていた。

「ざけんな……俺とミズカの絆を、なめんなよ……」

「アラアラ、必死ねえ」

決死の形相で立っているハクスイに、ベオラは妖艶な笑みを送る。

「でも、天使って、機奨光がなくなったら消滅しちゃうのヨ？　あなた、見たところかなり顔色が悪そうだけど……まだ、立ってイルんだ？　すごいねー、って、あら、あらあら？」

ミズカの幻に襲われ続けるハクスイは、足をひきずるようにして少女の前にやってくる。そうして、櫂の棒を振りかぶった。

「わりいな、その認識は正しいが、俺は特別製でな」

「にゃん？」

ベオラがぼかんとした。今にも悪魔に堕ちてしまいそうなほどに機奨光がなくなった男が、平然と活動しているその様が理解できなかったのだ。その呆然とした横つ面を、ハクスイは櫂の棒で叩き飛ばした。ベオラはフニャアンと叫びながら、吹き飛ぶ。そうして、黒猫になって着地すると、手で頬を押さえながらハクスイを睨んできた。

「め、面倒臭い子ね、だから働きたくなかったのよ……いいワ、最

低限の仕事は果たしたものの……ご主人様がお刺身を用意して待っているんだから、早く帰らなきゃイケナイんだもの」

「溶け込みすぎじゃねえか、人間界によ」

後から追いついてきた学生にヴィエを任せて、ハクスイは頭を押さえながらさらに奥に進む。不幸の気配も収まってゆく中、少し行ったところでたくさんの彩光使が倒れているのを見つけて、ぎょつとした。その固まりから離れたところに、金髪の少女を見つけて駆け寄る。

「ルノ……」

眠っているように目を閉じている少女を抱き起こすと、彼女が寝息を立てていることに気づいた。ハクスイは眉の力を抜いて、大きく息を吐いた。

「……生きてたかよ……つたく、心配させやがって……」

大悪魔の逃走により、大勢は決したようだった。遠くから生徒たちの喜びの声が聞こえてきた。ハクスイはルルノを肩に担ぐ。その少女じみた軽さに、なぜだか彼女を身近に感じた。

「……本当に、がんばりやだよ、お前は」

ルルノを引っ張って、ハクスイは機方舟の方へと足を進める。だが、ハクスイはこの後に待ち受ける運命を、まだ知らない。

目覚めたルルノが、あのようなように笑うことは、ないのだということを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5992y/>

全力天使【DM】

2011年12月6日20時46分発行